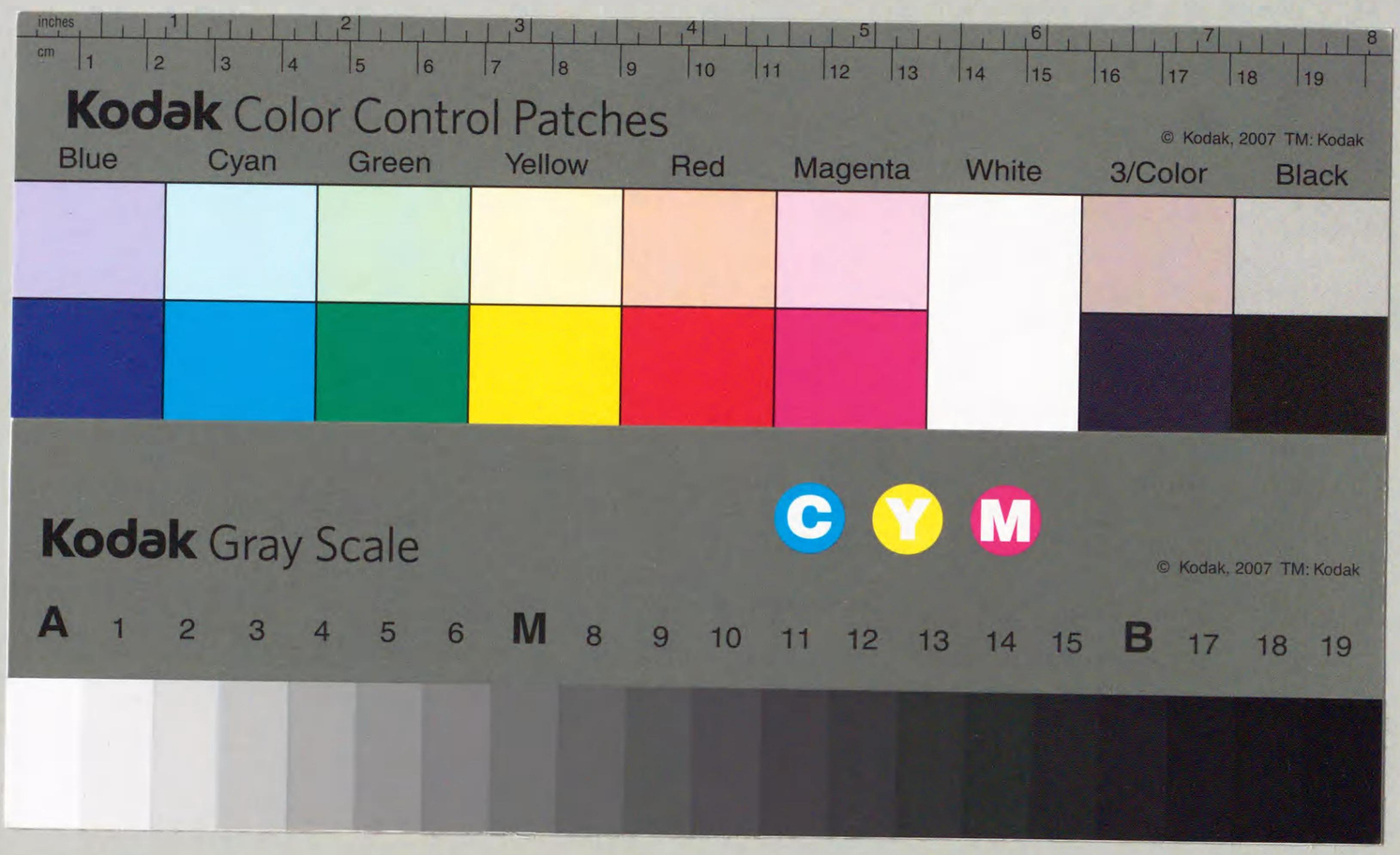

210.58
Ka9562k
O
00212629

川路聖謨文書 第六

田中藏書

川路聖謨文書 第六

田中藏書

212629

川路聖謨文書　第六

目次

一浪花日記　自嘉永四年五月十二日　至同年十月朔日　一

○嘉永四年六月廿四日聖謨奈良奉行より大坂町奉行に轉補され翌五年九月十日更に勘定奉行に轉す卽此日記は大坂町奉行轉任前後のものにして其前半は江戸留守宅に後半は奈良殘留の家族に送致せしものゝ如し抑此日記は前收寧府紀事に續くものならんも夙く嘉永三年正月以降翌年五月の部分を逸して傳らず且大坂町奉行在職中の記事も亦早く失はれたり

一房總海岸巡見日記　自嘉永六年六月廿二日　至同年六月廿八日　一四三

○嘉永六年六月十八日聖謨は目付戸川安鎭韮山代官江川英龍と共に若年寄本多忠德に從隨して房總海岸の要地巡見を命ぜられ一行は同廿二日發足して翌月十七日歸府したり

一長崎日記　自嘉永六年十月廿九日　至同七年二月廿五日　一四七

○嘉永六年七月露國使節布恬廷長崎に入津し定界通商の締盟を需む依て同十八日幕府は聖謨及大目付筒井政憲を全權に任し目付荒尾成允儒者古賀增を隨員と爲し共に赴かしむ此日記は卽長崎出張中の記事とす猶聖謨には魯使應接日記と題する一卷を傳ふ此日記に比較するに間々出入あり聖謨の記する所に依れは當時四種の日記を記したりと言へば或はその一種ならん共に幕末外國關係文書附錄一に收められたれば參照せられるへし

一下田日記　自安政元年十月十七日　至同二年四月廿九日　二四九

○安政元年十月露國使節布恬廷下田に入津す依て同十七日幕府は聖謨并筒井政憲下田奉行伊澤政義目付松本穀實勘定吟味役村垣範正儒者古賀增に之が應接を命じ同十二月廿一日日露和親條約を締結せしむ卽此日記はその任務中のものなり此日記亦幕末外國關係文書附錄一に收めらる

一京都日記　自安政二年九月七日　至同年十一月廿一日　三四三

○安政元年四月皇居炎上に依り翌二年八月九日聖謨は石河政平に代りて皇居造營掛を命ぜられ九月七日江戸を發して任に就き大坂砲臺場所見分を兼ね果して同年十一月廿一日歸府せり

一京日記　自安政五年正月廿一日　至同年四月二十日　三八七

○安政五年正月九日老中堀田正睦日米修好通商條約勅許奏請の爲上京を命ぜられたるに依り聖謨は目付岩瀨忠震と共に隨行を命ぜらる卽同廿一日江戸を發して上京し勅許奏請に盡したるも勅許を得る能はずして同四月廿日歸府せり

東京帝國大學圖書館藏書

浪花日記

（嘉永四年）

○五月十二日　おり〳〵雨　土屋ゟ直書かたの内狀來るくらの挨拶としてちゝみ二反被賜之其書面に新右衞門ゟ申せしことなとしるし有之候

○十三日　はれさむし　中數二段上り也月次ゟ講釋あり○三輪の神杉を得たり夫にてたにさくかけをつくりたり夫を淺野へ遣すとて古躰にて

此杉は大方にあらす味酒(ウマサケ)をミワノマク(ミワヲラコトハ)三輪のやしろの嚴(イツ)の神杉

嚴いつとよむ威嚴の嚴のことく万葉いつ樫のもと眞淵說也村田へ遣すとて中古のふりにて

玉匣(クシゲ)ミトイフマクラコトハみもろの山の神杉を万世かけてみそなはせ君

かくいひやりたり

○十四日　快晴　朝例ゝ通庭中の遠足三里半也冷氣にてひや〳〵也五時過六十八度也○例ゝ通大かくら來る半日其さわき也わかこゝに來りたるときは十六七にていまた藝の出來さりし若もの絶技をつくす也市三郎にいひきかせしは士は四民の上にたちて天下を治むるを役とす文事ならすは武事いつれにても大かくらと素人とちかふたけの藝何にても御役にたつこと一事なくてはならす夫なくて父の祿をとるは祿盗人也さてわれならへ來り六年ゝ内に上下共に仕出したることもなきは遙に大かくらうちにはおとりけりとて大に歎息せり上かたの大神樂はみな袴着用一刀を帶せり江戸より古風にて先屋敷内ゝ兩いなり弁天に行かくらを奏し畢ゝ庭にて藝をする也左もあるへき事也獅子々舞は江戸より上手也いにしへの田樂をかねたるものに似たり

庭訓に猿樂田樂獅子舞傀儡とありしと覺たり

○十五日　くもり　月並ゝ禮受ること例のことし○大和國行倒死人追々多しみな飢人也捨子なと多し迷子も有其内八才になる男子與力ゝ方ゝ來り動かす外へ行は非人に衣類を剝るゝといふ也段々穿鑿したるにふしみの土手にて親に辨當一ッをもらひわかれたる也奉行所の表こしかけに臥るよし也人々不便かりて食物を與へ三四日置たるに夜々狸出て食物を奪ふよし夫は長吏へ引渡してやりたるに又壹人來りて前のことし人の教ふる躰もなし小兒にても窮するところより智出るなるへし其外二三才の水死人度々あり親乞食の捨るなるへし既に子二人を吉野のかみなひ川といふところの岩淵といふ所へ投こみたる女非人ありて壹人存命にて其ことをいひ村役人共召捕來れり不屆至極也されは共わか先妻なとはこれより甚しきもの也わかき女なと別ゝ可恐は色欲也われ女非人を吟味していろいろと考みるにこれにかはらぬ親世に多し只かく荒からぬのみ

○十六日　雨朝くもり　乘馬いたす馬今度は斃るへしとおもひ居たるに此度の別當になりよく世話をやき隔日に塩湯を遣はせひるはやしきうち遊はせ歩行よるもかひをよくつけたるに毛つや直りて至ゝ健になりたり

極老故とおもひ居たるにおもひの外の事也人も養生にて健なること疑へからすわか健なることなと全手當による也今も十四五里のみちは容易に歩行して劍術一本位はつかう也新右衛門こゝろすへし新右衛門養生のはなし不承候いかゝ

○十七日　雨冷氣甚し　興福寺之碑銘をかくに惣字數五百はかりあり朝飯よりかゝれは必四ツ過より御用向はしまり一字かきては用人に談し一行書ては與力に逢故にいつも書損甚し十二枚はかり書たれと未全けふは考附て未明に起て墨をすり書かゝり四ツ時までに畢りたりいまた氣にいらぬ也

○十八日　雨　昨日五月八日出六日限之書狀相屆先以母上樣被爲初候御機嫌克恐悦之至母上々之御狀拜見○横山に初節句に被爲入候由鐘三郎も目出度候母上所々御佛參等恐悦之御事也○市三郎に手習可申付と之御事奉畏候晝夜私そはに附切にて文事爲致候御狀之躰よく〳〵文事は無之事と被思召可被下候乍去此ほと軍記なとはすきに相成よくよみ候人の論なといたし申候母上に孝行と存候學問等いたし申間敷旨長壽心懸候樣ありかたく奉存候保養專に仕候學問もみなこゝろをやすくいたし眞のたのしみを得可申と仕候義にてくるしみ候はいたし不申候ならへ參いろ〳〵の事に出逢其内別ては彌吉病死其次は狂女なと申サは心のいたみ候わけに候得共少もめげ不申健に候は少々書物すきにて夫たけの心にゆとり有之候故に可有御座候ならへ參り候二三年之所にて元來は大煩なといたし候譯に御座候しかるに丈夫にて此節なと家來末々迄之内にて左衛門尉第一に健に御座候兩三日已前にもアンマ參り腹なと別段にたしかに相成候由申候さもと奉存候義に御座候○昨日なとは御用向之外は碑文四百字はかりなるを書夕かたより京地々參候一垂弟子と黄昏まてはなしいたし居申候おさといふ今日なとは母上へ申譯あるへしめつらしく刀のはなしなといたし居候との事也酒は日々はのみ不申候折々也少も過酒

おさとを詠するされうたゝ雲となり雨とはならでなげろ〳〵となるかみさまのあなよはいこと

らしき事無之候節句などにても酒給候得は必手習いたし醉をさましふせり申候間いつも中坐仕候右にて凡御察可被下候其余の事おさとゟ可申上候」おさとゟ可申上とは衣類等ゟ御返事にて珍事にあらす

○十九日　くもり　新右衞門ゟゟ書狀別帋受取日記一覽候○盜賊御用心段々御尤也されともいかなる事なれは被召捕不申御府内事騷敷候哉人妖とも可申事也可恐○柴田病氣ゟ由左候はゝ六ケ月はかゝり可申候○日記ゟ内東門一件口上書相添候由御安心の御事也○新右衞門灸事有之由至極の事也灸事われによく覺候上去々月頃たしかに證有之候馬場にて馬にのり候處常より一段早し申サは躰かる〳〵といたし候躰不審に付別當へ承候處一昨日灸事せしと也灸事ならは七日は休ませ可申をいかゝと申たり馬にてさへに如斯人も同しかるへし○別帋ゟ人御察ゟ通也右に付縷々ゟ御愼方等御尤也さて諫言は間違にても御用ゟ御樣子感心せり

○廿日　雨　勝南院宮内といふ興福寺ゟ衆徒醫をよくす家内ゟもの共たのみ切也この藥（クスリ）を呑まぬはわれはかり也まさの死を救ひそのの難治の症を直したり俊藏の娘も同ししかるに出入ゟものゟ内にて宮内にはかりいまた紋服を不遣よりてきのふかれを招き骨折はまさその入用はわれ出して酒をのませたり常に酒を買てのまずといふされ共氣まゝ酒の大酒也醉て市三郎と腕おしをするに市三郎兩手にても不叶よほとの大力也力にほこりて腹を出してみするに相撲取のことし目かた廿七〆目あるといふ也畫かける布袋和尙に少も不違はらのはり出したるところへ猪口二ッ手しほさら一ッをのせて不落みな〳〵大に驚たりちゝみ紋附を遣したり○江戸の氣生ひものゝ如き男故金を多遣ふ男なれはあしきもやられすよきかたひらを遣したり木辻町に遊女を買に行に行ケは必遊女を一人も不殘買ひてそこにて酒をのみさわかするといふ男也諸事これに准す醫はよほと上手也みやくなとくはしきこと也この醫ある故に安心してかける也醫者には可惜大力也三十〆目位のものは自由にもつ也けしからぬ事也

○廿一日　晴　少々時候直りたり○おさと又けろ〳〵也今日にて八日目也當人も難義尤いふへからす左衞門尉もこまる也おさと不快之時は書物常之バイ程よめる也これはおさと不快なれは御用向之外、はなしなしありても時候位のこと其上は飲食のことなと位のことなれは也雜談等曾ゐなし

○廿二日　晴　泉水に小魚夥出來たり○けふ貞助順右衞門の悴共池のはたの芝原にて遊ひ居る故に小魚をほしくはもて行といひしにとりたかりて淺きところにていろ〳〵すれとれす女共ザルにてすくひたるに一すくひに十も廿もとれる也子共の喜ひ大かたならす太郎敬次郎等をかくなして遊はせたらはいかに喜ふらむなとおもひ居たる也泉水ふかき所は大人のへそのあたまてもあれとふちは漸五六寸也砂利多き所は水少の時は駒下駄にて歩行也故に兒共にもあふなきこと更になし金魚に六七寸もあるもの多く緋こひには壹尺四五寸も二尺なるもある也家來共はみな鮒をつる也

○廿三日　晴　きのふは母上もおさとも打臥て父上の御酒の御相手するものなし然ルに女共のはなしにて聞にをとゝ日も父上御一人なれは大に御寂寞にて御こまりと聞たれはおもひ附て日くれころより馬見所をあけて庭のけしき御覽かてら御酒奉りたり日くれころになりたるに馬場の溝のふちに螢一ツみえたりあれ螢よなといひてしはし過けるにこゝかしこみゆる也やかてかなたこなたと飛こふさまなといとよし泉水にもほたる出來れと二つか三つ也よりてめつらしとおもひて行てみるに馬場の溝のほとりに數多ことしは生したりこれは與力らか御堀の水にて魚を飼とて一乘院宮御泉水へせきいるゝ春日山の水谷川の末を引たるか馬場のふちの溝となり居る也それ故に生したるなるへしなか〳〵によきけしき也馬場をそこゝあるきたるに蛙所々になきていと〳〵めつらし初ゐ蛙の御役宅に居るを知れりこの蛙といふは則古今集の序に花に啼うくひすと對にいひし水にすむ蛙とある蛙也字はいかにかくやしれぬ也蛔の字なとか

くかもしらぬ也今江戸其外にて蛙といふものとはいたくことなるもの也カジカといふものこれ也其聲凡ヱンマカウロキといふものゝ聲或はコマ鳥といふものなと合たるかことくにて絶妙なるもの也江戸にても高田水いなり脇の田のみそには居るといふ也され共上かたの蛙には遠く及はぬといふこと也大僧正慈圓か井手の蛙の干物となからの橋のかむな屑とをとりかへたるといふはなしもあれはいにしへよりカシカを蛙也としらぬ人もありしなるへし字にて何とかくかしらぬ故に古今眞名序には蛙を秋蟬にかへて書しものなるへしならの蛙こと更に聲よきか万葉にもさほ川の蛙の聲をおもふ男にきかせたしといふことときうたありしと覺たり○父上近ころ御足大にわるく被成られたれは一合の御酒にて御歩行ならす歸りにはわれかたにかけて歸り參らせたり○おさと母上とも今日は御起也

○廿四日　くもり　昨朝遠足三里半余也追々足早くなりて三里半余位は半時余に歩行する也かゝることも修行によるものなるへし四丁位かけては息常の如し○番非人召捕參りたるものに十五歳のわか者あり衣類其外共よろし無宿ゝ由いへと無覺束よりて途中の小盗にて外に子細もなき故に見切て門前拂にする積され共以後直り可申歟とこらしめに骨のいたまぬ樣に牢屋敷にて牢問の格にてたゝきたるに外に事なしよく〳〵異見を加へなとしたるうちに親御慈悲願に出たり所持ゝ盗物は無宿盗賊より預たるよしにて取上急度叱りに成たり親ゝ引渡前に其方いかにこりしやこりて以後は慎マは格別左もなくはいくたひも攻たる上にて首をとるへしといひたるに親なるもの進み出て御とのさまの御叱り心を改るやいかにとていたく叱りたり其躰子を異見する積にて前後を忘れしさま實情あらはれてあはれ也さて急度叱りゝ申渡いたし縄をとき引渡やりたるにヤレ難有〳〵といひて泣なから其子の肩をかい掴て引すり行たり親は高もちにて御代官所の村年寄也子をおもふ親のさま家來共なとみな涙を流したり

○此ほと米は又あかり口也こまりもの也市中の困窮よほとの事也當年なと米不出來にて去年のことくならはいかならむとおもふ也幸に御くらにいまた御米千石余ありこれにて當年の救ひはよし

校訂者曰　原本ニ五月廿五日ヨリ六月八日ノ記事ヲ欠ク按スルニ此日記ハ其任地ニ於ケル日錄ヲ其都度江戸ノ留守宅ニ送リ後コレヲ一册ニ綴リタルモノニシテ今原本ニツキテ綴目其他ヲ檢スルニ欠日ノ分ハ散逸シタルモノナルガ如シ

○六月九日　大雨　御暇乞として東大寺　御靈屋春日幷二月堂兩御門主に參る○昨夜夜に入候ゑ一乘院宮へ參る前に記候通也○みや御手つから禁裏より正月被賜候物ゑ内ゑ由少々御持被成たる躰のにしきの御鼻かみ入を被賜候みや御落涙にて汝と又逢を必となしかたしなと被仰故にわれも涙數行下りゑ御受にこまりたれは不取敢

いや高きかすか山の千代の松立歸り來て仰かむとおもふ

と口よりはなしとも歌ともなく申候てさて私も七十致仕の上は必遁世してならへ來らむと奉存は別れなるもしはしゑ御事に候なと申たりきみつから御盃被下其御盃はもち歸りたり例の通なからわれなこりの酌してとらせむなと御意ありて御酌玉はりていと〳〵しめやか也市中にては專大坂也といふ也さすれは近し又あひみんも同しなと御意ありき清幽樹の御宴故に東大寺龍松院等ゑことときわかとりもち來れる儒者等は御椽にてわれは宮の御同間也御役なれはこそかゝることも有いと〳〵有かたし○われゑ宮へ御音物幷御酒白銅の御薫物壺なと奉りたり清幽樹に辨天あり夫ゑ町中ゑもの共參詣御免なれは（折ふし也）（みまち故）御簾を垂られて御構なく入らせらるゝ也官家のこと關東の心得とはいとかはりたること也けふは春日東大寺其外ゑ參る歸りゑ兩御門跡へ出る一門にては御逢無之候大乘院にてはいまた左衞門尉に庭をも不爲見其まゝに過し候こと殘念也汝か來りてゑ穩に治り候段大幸也よりてなこりの惜まるゝによりて御酒を被下候ゑはいかゝとの事昨夜御意あり及御斷候處けふは御逢ゑ上御庭のみゆる亭

に被爲召候ゑ御門主御出座にて親敷御物語昨夜汝に遣へしとおもひてしるしたりとて五月雨にほとゝきすと芙蓉の御畫を御手つから給候ゑいろ〳〵との御咄汝われをおもひ出は此畫をみよなと御意あり又逢へしやいかゝなと仰られて御咄切るゝ期なし取持として參候與力の隱居とても御はなしはつき不申候奉行は殊ゑ外御用多ゑ旨申に付漸御暇給はりたり一度も大乘院殿ゑ御召に出候ことなきにかく仰らるゝはありかたし○市中町人共ゑ内困窮人共何々なり共使ひくれ候樣多人數惣年寄共に願出る不及沙汰段申渡すこの類幷品物持參ゑもの甚多しはしめは用人共心うれしく思たるに夥なりて用多ゑうち利害に手かゝり候ゑこまるといふ故にわるくいふよりはよしとて穩に奇特ゑ段爲申聞候

○十日　晴七十三度の暑也　出立には天氣都合十二分也○けふは少々おもふ旨もあれはかこには不乘御役所ゑ御玄關より步行せり與力同心共先例ゑ通御役所御門前へ平服して暇乞いたす段々世話に相成候段詳に丁寧にいたし候ゑ申述同心共に も相應辭遣すなら町ゑ山城の木津迄與力共ゑ内別段にいたし候ものゑ由にて與力は若手ゑ分不殘同心は十人はかり醫者貳人勝南院宮内儒者槍遣ひ寶藏院ゑ後見滿田權平等町人共迄夥來る木津川渡船場に平服して川をわたり堤ゑ上を行をうしろかけみゆるまて見送たり市中ゑ町人共は困窮を救はれ候前にしるしたる町々ゑもの共數百人おもひ〳〵一二里より三里はかり送りたり小兒を携へ老人を扶て夥敷事也今迄なら奉行にかゝることなしといふ也其内目出度手札をしるす今般御參府に付恐悅奉申上候且私義當亥九十三才に罷成長壽に罷在候處御仁惠を以年々御手當被下置御蔭にて安穩に相暮し罷在候段私は勿論子孫に至迄永々御高恩ゑ程相辨如何計か難有仕合奉存候右爲御恩謝ゑ御武運御長久可奉祈候恐惶謹言なら西新屋町隅屋四郎五郎代孫四郎兵衞といふ名札也其外御高恩を報候ため御武運御長久可奉祈といふをことをいふもの多しそれはわか御用召ゑ義を承り禮として物を差出ても少も貰はすよ

りて急に武運長久いのりの大石燈籠を春日へ納永世の報恩といふことに
なりて奥方ゑ歸りまてに出來ゑ積晝夜をかけてするよし其ことをいふな
るへしと家來いひぬはしめて今日承たり長吏なといふものはひる休まて
來れり儒者幷花井隆助なと同し木津にゐ與力共に逢たるに涙數行下り辭
をやられすかれらか方にても頭をあくるものもなし往來にて涙の下りた
るは常に來る按摩平服して居るに一向わか姿をみること不能故に家來ゟ
今御通也といへは默禮せり別當ゑ悴は前々月父榮次にわかれ當月祖父死
したりよりて來年十二月迄ゑ養育料を與力にたのみ渡し遣したりこれも
山城境まて來り例の通り笑なから指さしなとして居たり老婆なとは多く
みな手を合てをかむ也かく民におもはるゝとはいかなる事にや嚴過て氣
ゑ毒なること多く其上にいくらも仕殘したらけにて耻ることといと〳〵多
く大和の人氣わろしなといふはつや〳〵受られぬ事也右ゑ次第故披露多
く給人一人にてはとても出來す供につれたる用人共供さむらひまて左右

に立並て披露したり其躰おもふへしかゝや助藏なと永代御出入相願旨ゑ
書面差出し聞濟遣したる禮に京地まて來れり市三郎を供に召連たれは同
人の供となり案内して京地なと見物させたり猿樂の類に送るもの壹人も
なし博奕打盗人は小躍して喜へし六年の間博奕盗賊は過半よりも減し猿
樂は大にさびれたれは今日ゟ其もの共は大悅也可憐迄に弱りたるは寶藏
院ゑ後見と儒者也後見なとは市三郎さへに目のはるゝはかりに泣てわか
れたり儒者六里はかり送り路傍に平服して泣々わかれをいひき
○十一日　晴　きのふは旅宿へ京にて知ル人になりたる人々等多く來り
て餞別なとくれたり菓子少かりしか夥出來たりならへ飛脚にて遣す右に
付目錄二兩貳分はかり出たりこれも　君の惠也○今朝六半時所司代ゟ參
り紀伊守殿に懸御目いろ〳〵と御物語いたす御同人不相替手堅御人也前
代下野守殿にやゝ近し紀伊殿幷公用人共みな新右衞門に世話に相成候旨
等被申候ゐ宜と傳言あり畢ゐ京ゑ奉行へ參り夫ゟ若狹屋八兵衞方にゐひ

るしたくいたし候ゟ四時過京地出立也三條より歩行いたし大津入口ゟ駕籠に乗石場迄參る石原ゟ使者出る石場ゟ立場ゟ二階を明拂たる所にあかりたるに程赤城か万帆とかいふ扁額ありて十三里の琵琶湖一望の中にありしはらくやすみてこゝにて家來共に暑氣拂の藥なと與へたり五苓散にてビハ葉湯ならぬもちといかゝこゝにて市三郎舟にのりて勢田へ行かむといふ俊藏あふなしとてとめたり夫ゟ膳所ゟ城下を出はなれて歩行せしに湖水より凉風吹來るいふへくもあらす野路にかゝりたるに比羅の高根に一片のくも起りて雷鳴せり

ひらのみね一むらくもの夕立にやとりをいそく野路のたひ人

なといひて立場にやすみ居たるに雷頻にてひらやまは雲にて少もみえす烈風甚しみる〳〵湖水にしらなみ夥たちておそろしきさま也こゝの立場には築山のわきに四疊半の高樓有まつあかりて湖水を見居たるに凉風氷をあふせるかことし矢はせのわたり旅人のさわくなるへしみな市三郎にいふ御舟ならは今頃題目念佛うちませなるへしといひけにも

武士はやはせのわたり早くともいそかは廻れせたの長橋

といふはまこと也と現に今そのけしきをみつゝおもひし也比え山おろしにて矢はせのわたしは危といにしへよりいふけに決してのるへからさること也

夕立はせたのはしにもかゝるらし比えの根高くひゝくなる神

といひしいやなるうた也夫ゟ瀨田長橋にかゝりしに風に吹とはさるゝさま也みかみ山の上に赤きくもみえ湖水半面龍にても昇るともいふへきさま也

夕立のかゝりかゝらぬ有さまを雲畫かき行しかの海面

とよみたり夫ゟ一里はかり行たるにそのわたりは夕立ふりしとみえそこゝに水たまり有

凉さをわれになるかみ賜ふらむ夕立はるゝあとを逐ひ行

なといひき○立場にてわらにてつくりたる中字の筆をかひたり酒にてあらひ用ゆれはよしと也今日も五里余歩行也○三條のケアケまて西村東藏〻悴さゝや太郎兵衞來れり○夜に入本多隱岐守家來藤井玉城使者として來る隱岐守より鯉一尾鮒四尾くるゝ鯉は三尺余もあるへしふなは黑鯛のことし驚かさるものなし大なる鯉に付日雇頭までやりたれと洗鯉夥あまれりふなはさしみ其外になし余は本陣へ遣す今少し近くはならへ可遣に〻と人々いへり玉城と云人の年來知ル人也當年六十五歳と云壯健なる男也はや隱居せしか主人ゟ左衞門尉〻義に付汝使を可積旨差圖候由刀劔の事甲冑〻事武士の陣頭に臨む心なとをいひてはなし圖に乘て立てまねをするにいたる武篇もあり才氣もあり謀略もある老人也

○十二日　くもり　七ッ半時草津をたち出て十二里を經て坂下宿にいたる折々雨ふる冷氣甚し本陣へ着入湯〻上給單物着用也尤坂下宿はすゝかたうけの下にて蚊帳をもつらぬといふ所故にや○今日八里はかり歩行せり一向につかれす途中かこに乘らぬに三益あり第一は脚氣にて足のはるゝことなしすはりこみては直にはるゝ也第二に食よくこなる第三に隱德也この意いろ〳〵に通せり○すゝかにては所々にてカジカをうる也はしめたて場の茶屋のかこにいれてあり市三郎みて蛙を何故かくするやといふ故にこれ例の古今の序にいふかはつ也といひしに龍介みて大に喜ひ直段を聞（キク）に一ッ百五十也といふ段々ねきりて五十文ッゝにかひたりよくみるに世に云蛙（カハズ）といふものにいたくこと也先ッ眼するとき赤蛙に似たるもの也赤蛙よりは小也千里のみちをかゝへて生餌の蛙を多く買ふほしころすこと受合也

ふり出て聲もきよらにすゝか根の名に負るとやかはすなくらむ

なといひきあはれなはこにいれられて世をやすく田川にすめる友やうらやむすゝかやまにてほとゝきすを聞て夏もなほ衣手さゆるすゝか山汝か聲なくは只秋の風馬一向よはらす元氣尤よし名馬也をしむへし獨眼龍な

ることを

○十三日　晴　六時過土山宿出立いたす谷川に添ひて例の蛙なくこと夥しこの地ほとよき蛙ある地まれなるへし八月下旬のことしすゝしさいふへからすけふも八里余歩行せりしかし午後より歩行すれは汗出る也七ッ時桑名へ着せり兩御隱居様おさと市三郎一同旅宿せし海へつくり出しの本陣也久々にてうみをみてみな喜ふ也石のことくなる庫之介か先達して濱より上ケ立のいわしを買ふわれか好める松魚の取立を尋ねしにいまた濱より兩三日は來らすといふ也殘念也桑名は樂翁殿の御あとなるに此節も三十兩取位のとみある躰也且めしもり至ゟよきか多き躰也さて〳〵政事はかはり行もの也密に歎息せり○土山にて

かやり火のなき山さとに旅ねして水音すゝしくよすからそ聞

○十四日　くもり又晴　六半時過佐や川を領主ゟ舟にて上り尾州領佐や宿ゟ着晝飯給夫ゟ熱田にて小休いたし鳴海に止宿○熱田宿は以前廿日はかり止宿せしこと有は宿役人共其外われをよく知れり追々罷出る旅宿せし蔦や傳左衞門は病死ゟ由はや十三年を經たることはこゝろつかさりし也其頃二ッ三ッの人みな相應ゟ若ものになりし也夫をおもへはわか老しをもしりうら嶋子か七世の孫に逢るはなしなとおもひ出ぬけふも又六里はかり歩行したり主從の顏備前德利のことしわれを並の老人とおもひたるに日ことに六七里位飛(トブ)かことくに歩行られて道中師大に驚たりくも介まて其ことをいふよしわれと松平肥前守ゟ外はなしと云也（市三郎話也）

たらちねに逢ふ日近きをかゝなへて飛かことくに足もすゝみぬ

われ此節晝辨當はやきめしに梅干也第一暑氣當ゟ患なし其上ちやさへにあれはいくたひにも食す腹にもよし

○十五日　くもり　至ゟすゝし鳴海を出立して赤坂宿ゟ着せりけふも八里余歩行せり道中師共早足に難義ゟ由内々申出に付けふは静に歩行したりかこに杖なきかことときもの故夜全にあけて出立しいつも十里余の歩行

にて七ツ時頃には必やとりへつく也○平松彌一左衞門いまた健也足少々わろしといふ也忰出迎せり彌市左衞門一類丈大夫其外今一人もなし藤田亮平迄沒せりわれ二十五才ゟ節旅中にて知ル人に相成候もの存命せしは此彌一左衞門一人也人はもろきもの也名をあけて死ぬ人ほとの幸は世になき也なら墨一箱黒縮緬ゟ羽織を彌一左衞門ゟ遣したり

○十六日　朝雨四時より止　六時赤坂宿出立いたし新居ゟ御關所改濟ゟ上暮時濱松へ止宿○けふ宿々にて魚類殊ゟ外下直也黒鯛の大なる百文位サバの生たるか二十四文アジ又同しなら人みな驚歎せりされ共なら抱ゟ惣吉か忰の類其魚を一尾も不買持參の梅干二ッにてめしを買て錢を遣ふものなしとわれはさそめつらしかりて魚を可食とおもひたるに存外也これにてはめしもりもかはぬなるへしきのふより所々にてうなきを出す當年はしめて食す

○十七日　晴よほとあつし　正七ツ時濱松宿出立いたし無滯大井河を渡夕七ツ時島田に止宿大井河にて

をちかたのしら雨見つゝ大井河こゝろすゝしくわたる夕くれ

けふ奇人の事を聞たりわれに附て勢州邊より參る四十余のフラリサン有此フラリサンといふは雲介中の尤下等なるもの也往來のものに附從て荷もちをする故の名なるへし其ものを家來憐みてめしをふる振たるに殊ゟ外難有かりたり魚一尾を與へたるに厚禮はいひしか少も不食そこを立つ時これは旦那ゟいたゝきたる也不麁末樣とて建場ゟカヽにくれたり家來怪しみて其わけを問は親ゟ忌日にはかく精進すと答しと也雲介すらかくの如し親の忌日の精進なと等閑にするは雲介には不及捨もの也○駿府高橋祖母君ゟ御廟所ゟ參詣ゟ積に候處御用　召歸府に少もよりみちはいかゝと存候間寶藏寺さへに拜禮せぬ位に付金二百疋拜の爲代參用人俊藏遣し候積也○此ほとあつき日にても夜ふせるに袷着用にて無差支位に付一同病人なし天氣の都合十二分とも何ともいふへからす天幸といふへし雨

は屢あれと夜或は曉に付道中有之候方よろし桐油用ひ候ことはつかに一時半位也大井河も出立の頃まては川留にて四日以前より明きし也今に九十四文川也此躰にては歸りまて何ゝ子細もあるましく候

○六月十八日　朝少々雨　四ツ時前ゟ晴○金谷宿出立候ゟさよの中山のたうけうつのやのたうけを經アヘ川をわたり駿府を過例ゝ小よし田のスシやにて小休いたし七時過興津に止宿○アヘ川をわたりミロクといふ立場にゟキナコもちを出すコレをアヘ川もちの元祖とす味至ゟよろし百疋の茶代をとらるゝこと也よきはつ也こゝにてら西直次郎待受居候ゟ面謁を乞御用召なから小休に落合ゝ事故面談いたす○江尻の宿にて馬急病起る暑氣當なるへしよりて馬醫をかけ療用せり死にいたらす○與助暑氣當りにて昨日ゟ不出來五苓散に加味のくすり遣すよほとよし○途中にて濱上りの生魚をもち歩行也興津にて聞は今晝過とれたりといふはやまくろ計也めつらしくて買て家來共ゟも爲給候惣躰ゝ肉コハクしてこり〳〵する也新しきブリのことしとて人々うまからぬも大笑也

○十九日　くもり　六半時興津宿出立候ゟ七ツ時頃三嶋宿ゟ到着いたす

○富士の雪猶のこれり人々大に驚けり○今日も歩行七里内外也○馬くるしみて胴繩をかけ置たる梁を折たる位ゝ由に付六ケ敷かるへしとおもひたるに十四里余のみちを走りて無恙追附たり一同大に驚く昨日の病は中暑なるへしといふ也されは共やせたること甚し干大根にて作りたる馬のことし尤飼もよく食す也三嶋宿にて馬醫にみせたるに箱根を越こと受合也といふ也

○廿日　くもり至ゟ冷氣也　かたひらにてひや〳〵とし大にこまれり本陣ゟ着早々給に成けふ天氣都合十二分とも何ともいふへからす難有事也

○今曉三嶋宿にてはやかねの音にて目さめて宿にとへは二丁はかり脇出火也と云也風下にて火のこなと庭ゟ頻に落る一同大騒にて支度いたしたる所飯を食せねは出立出來す急に食事を出せといへはこの騒にても御膳

を被召上候哉と云位の事にて亭主麻上下にて奔走してやかて我にはひやめし家來には茶飯のひやめしを出したり其内火大にやけひろこりたれは早々に出立せり其節十五軒余類燒ありといふいまた下火にならす箱根へ向ひ二里はかり行たるに夜あけたり夫ゟ箱根へ上りみれははや下火也けふは箱根八里の絶險をためしに例之通歩行したるに小田原へ着したるに八ツ時過也途中にてくも助なといかなる早足也やけしからぬ殿さまもあるもの也なといひしと市三郎物語りぬこれにて老ても修行により躰のつかれぬをしるへし少もつかれすいよ〳〵稽古といふものゝ有をしれりこれは三年前六里はかりの道を歩行してくたひれ極りたるをかなしみて歩行の修行を甲冑にてなしたる故なるへし老人ほと修行すへき事也○昨日サツタたうけにて血を夥拭たる帋の捨ありしをみたり前へ行たるもの怪我にてもせしかとおもひたるはかりにてすみたりけふ人足のはなしを家來共の聞たるに大に驚たりきのふサツタにて博奕打共數十人集り鎗又は竹やり或は刀を以及闘爭候所ゟ我行かゝりたるに手負なとをたすけて山かけに隱れわか通行畢ゟ又及闘爭おくれたる雲介のわきを拔身を以人を追なから行けしきに肝けしたると物語しと家來共申たりやゝ水滸傳めきなから　公儀御威光にてたちまちに逃去とは難有事也○馬筥根いかにやと案して着早々聞せしにやせは甚敷けれと足ことに達者にて我よりも先に着せりといふ惜へき馬なり○いまた松魚を不食今日小田原に着やとに聞たりしに今濱より上りたるカツホ二尾大サコシ（ハラ）一にて家來共申談して金貳朱也われも食しつ味尤よしなら人なと驚歎せり

江戸にてサハラといふ魚を上方にてはサコシといふ也

此魚のはなし父上母上等ゟ可申上は不及申候御覽もあるへしなら人にては勝南院にふるまひたしと人々いふ

○廿一日　晴又くもり　拂曉に小田原出立して戸つかに止宿○酒匂川を渡候節よほとの水氣也れむ臺こしおそろしきけしき也され共無故わたりて次ゝたて場にて食事なとするうちに川上より水多く押來りて川留とな

れり是は昨夜中大雷雨なりし故なるへしこの度の旅行天氣都合のよろしきこと並々ならす鬼神輔を得たるかことしといふも可也川明をわたり或は渡りて川留雨はあれと夜のみにていまた二時の桐油を着せしものなき也

○廿二日　晴　戸つかを出立して八時頃品川宿に止宿○川崎にいたるはや出迎へもの來りて用人抱入へ義なと申之夫々追々出入町人等出迎いたし品川宿に參りたるに本陣の人山のことし其内可笑は被抱と願ふものなと數人集りてはかまをとりくるゝもあり團扇にてあふくもあり帶をも解くるゝ躰油斷したらはふんとしまてとき可申さま也驚て着替したり少々休息して一同に逢候積へ處新右衞門はしめ差急候ゑ早く〳〵といふ故に紋附かたひらへの上に袴はかり着せしまゝにて逢たるにこれは〳〵といひしはかり只たかひに涙のみにて更にことはなし互に無事をは祝たれと新右衞門はしめのとし老たるに驚き我もとし老たるさま日記ほとの勢とはみえすなといひてかたる六年のはなしうれしさのあまり躍出て更に條理なし彰常の居たらむにはいかにや喜らむとおもへは涙はおさへなからもはなうちかみていと〳〵くるし太郎を新右衞門涙なからに手を引てこれそ六年來もりそたてたる彰常かかたみよといひかけたるはかりにて互に涙にくれてことはなしもとより二才へ時わかれし兒なれは見忘たれとヂヽ也とてこゝろうれしけにわかそはに居りもの給るにこれは給へしやいかにと新右衞門に問て新右衞門なれ親しめる躰祖父の如しけふは新家井上内藤大越貞松村畑山其外市川今井或は友野等又は顔見忘れ一度の文通せぬ人まてもなかにはまち受に來れりよほとの混雜いふへからす其内忠四郎は居殘て順右衞門のことなと申不相替貞正なること○新右衞門は立派にかさりたるよき馬にのり來りて庭をひきみせなとしたり幸三郎は市三郎を同道して歸りたしとて新右衞門の悴乘來れる馬にのりて歸りたり來りたるものゝ内にて見違たるは新右衞門次男横山鐘三郎也凡へ躰お

ことを男になしたるに似てさて人品とり廻し別段にてうちあかりたるさまわか血類ゑ内にては隨一也幸三郎いふ養子に行四五日前より人物生れかはりたるかことくなりしといふ也静にてことは少したのもしけ也其余いろ〳〵といふへきことあれとこと多にて記すにいとまなし家來共には立通して不眠もの多し夜五時頃佐久間象山來る九ッ前迄物語して歸る

○廿三日　快晴　昨今八十五六度の暑とおもふ也○七時出立にて五時前に御月番ゑ御老中伊勢守殿ゑ罷出參着ゑ旨公用人呼出し申述るしはしありて先格ゑ通心得登　城候様いせ守殿御差圖有之よりて御老中若年寄廻勤ゑ上登　城したるに五半にいたらす諸役所物静にて開かすよりて御まかない役所ゑ行飯嶋泰助ゑ面會ゑ上しはし待泰助不相替深切ゑ心附ケなとある四時過にみな〳〵登　城ありて御勘定所御目付等へ面謁いたす村田阿波守はいさゝか衰たれと昔にかはりたることなしわか歸りたるを殊ゑ外喜ひたるさま實意溢るゝことしされ共例ゑ木訥也いろ〳〵はなしに

奥方様ゑ御歸りはいかゝ御用ゑ體にては御老母ゑ面會も御なりかねなるへし御不快はいかに常におもふといひき親しき別段ゑ役人は老人にては只この人壹人也この人もわれ壹人なれはいさゝか血縁のことし八十四才とはみえぬ健也かゝる人をみ或はとしわかきか死しなと聞てしろめか歌のいのちたにこゝろに叶ふものならはとありしを感おもひたり御廻ゑ時御老中御列坐の御尋も無滞相濟御退出前明廿四日登　城候様いせ守殿ゑ御封帋渡る直に御受に參りて歸りたるに門外よりして出迎ゑもの山のことし凡昨日の躰也今日膳に居り候もの百人にあまる其余おしてしるへし今日四時ゟ夜四ッ時まて數千度のジキなしたるなるへしさて母上は少々御不快のところ押ゟ被爲在十日はかりうれしさに少もねふり不給よし只々手をとりかはさぬはかりのことにて今世對面無覺束と覺悟いたし少も病あれは臨終の時取亂すましと經のみよみ居たるに　上の御めくみにて對面を得たりわか喜ひ何物かこれにしかむ今は此世におもひ置こと

なし兩三日以來は汝か歸るをおもひて常の信心の修行疎ならむと欲すしかありては佛へ對して勿躰なし其心附第一也汝も　君恩を忘るへからすなと不相替御女義中ゝ剛正義烈の御辭也去年の御病後且御不快にて被召上ものは此ほと粥と香物少々はかり也と仰らるなるほと御やつれありてやゝ母上の御母君に似給ひたることくならせらるれと御心の正しく御健なるは不相替御事といと〳〵うれしおさとはいかにこゝろ遣ひにてつかれはせすやかれかよはきと汝か御役のこと夢の間も忘るゝことなしなと御意ありきけふの躰百分の一もしるさす其余は押ゐ知へし幾之進來る耳至ゐ遠し雷は近年なしいなひかりはかり也といふ躰也され共大聲にていへはわかる也以前ゝさまにかはらす只耳遠故に別ゐはなしなとこと長きさまは十段もまさりたるへし○けふ新家の妻としる人になる御奉公人上りとはみえす當世風なることも也盃事なとしたるに酒も少々出來る躰也○野田源大夫と知る人に成粗しにて武人也實意はあるなるへし彰常に似て學文なくこゝろ荒々としたる人とみゆる也三尺はかりの大刀をさし來れり○けふ太郎敬次郎のさまをみるに太郎は誰に似たるらむいろ至ゐ白くして耳大きく凡ゝ躰彰常に似て才ある也隨分相應にみゆる也ウバけしからぬ誇にて太郎さま位の人品なる人親類なとになか〳〵なし其上書物の覺至ゐよしなと高慢する也おンヂゝさまきくを一本頂戴仕たしとおとなしくいふ故にわれはわけをしらぬ故にオフ〳〵きまゝにとられよといひしにやかて行て母上の御植置たるきくを夥ひきぬき來れり新右衞門より金魚はちの三尺四方なるを造り與へ別に泉水をも掘與たるよし金魚船はもち來りてきのふゟ自由にせしといふか金魚一尾もなしみなひねりころされしとみえたりわかそばに親しく附ておヂゝさまこれはなにあれはなにとうるさくきく兒也新右衞門いふ書物は品に寄たらは出來るなるへし大學をよみて其字を十に七八はみしり數をうはの敎によりてよくかそふるなといふ也さもあるへしこれはわか喜也敬次郎は眼中するとくいろ

手傳として來る女はみはけん材木けん番丁けん

黒く人品太郎におとることよほと也才はある躰なれといつれにも二番はへの躰ある也○土屋大膳來りいふ同人老母の喜ひ大かたならすとて例の兄弟のことくかたる也夏かけ先生來るけふの躰本陣と江戸と混雜したるにテンヤワンヤにて其さま沸騰（ニタツ）する粥のことし一々しるすにいとまなしおしけ來る小兒熱出て昨日よりとまりけふは歸りたりわれをみてかなしかる也われもかなしき也

○廿四日　晴　五時登　城いたす御目付へ之罷出之書付等相達す御老中方御登　城にて直新番所前へよせになる越中殿案内にゐ御奥へ廻り　御前に出る大坂町奉行被仰付可入念旨之　御意伊勢守殿御とり合せ也畢ゐ御老若に之御禮御側に之御禮申上諸役所に參り吹聽いたし御退出ゟ西丸に廻り御老若其外廻勤いたす歸りたるに來客二百人余にて膳にすはり酒のみて歸たるもの百六十人余といふ也其さわきおもふへし○歸り懸淺野中書に參る緩々面談この人の深切驚はかり也此老母も兒をおもふ愛を押て母上のことを兩三日申くらすといふ也○今日はならへ狀出る大坂にも直書といふわけなるにしるすこと不能故に二階を市三郎にあけさせてそこにて書狀三くたり計書たるに艮齋先生被參無余義二階へ通し酒等を出すはなし一ッ二ッして被歸候」書狀にしたゝめかゝる夏かけ先生被見候是も又二階へ通すはなし中に大草直胤來りて作之小刀二ッくるゝ無余義是も二階へ通す夏かけは無間も歸る直胤は少々酒のみて日くれに歸れり○待受重立候ものは土屋大膳亮大熊善太郎村井助左衞門豐田榮次郎西村珉助豐藤五十助等也それ〳〵の挨拶いたす大熊善太郎はさても御なつかしかりきといひき涙數行下りしはしことはなし○夕かたゟ恩田虎次郎來り河野七太郎と相手にて酒のみ夜五時頃になりたるに都筑金三郎鈴木莊五郎同道にて來り金三郎は殊之外喜ひて酒のみ喜ふ躰めつらし虎次郎はめつらしき貞實家にてわか中書に申上ゐ奥御右筆になしたる喜ひを以親しくして客のとりもちなとする也夜四時まてかゝる夫ゟ書狀にしたゝめか

ゝる○日くれ頃に新右衞門妻狂女を同道にて來る此事に付ゐは一昨日以來新右衞門母上より仰らるゝ旨もありしかと追ゐと申置たるにおちへ來りて同人存寄を段々申述其深切なること驚入て大意此女專らの趣意にて狂女を引受たる以來の存意等申述常にかはりたる嚴正條理あることこゝにいたりてわれもいたし方なくおちへの存寄にまかせ一わたりの只一面會をゆるしたりおちへは歸り狂女は逗留させて歸れり

○廿五日　晴　五ッ時より出宅にて所々廻勤いたす○此ほと宅之躰うは二人にて兒二子の世話いたし其外はオカヽか家事をするかことくもみこみにて大に働く也敬次郎かうは美人の聞ありしも大笑也根本かはなしのうははいつれに哉とおもひ居るに曾ゐこずちらしかみにて魚油三斗はかりにて單物共に煑上たることきき女壹人ありこれ例のうは也大笑のかきり也

○廿六日　晴　五ッ時登　城前より所々廻勤いたす○退出ゟ廻勤せむとおもふに少々腹痛に付歸宅五苓散を五ふくはかり幷大柴胡湯一ふくをのみてひる飯は少も給へず其内次部右衞門新右衞門なと來るわれは何も不食夕かた梅干にて飯二椀を喫すしはしありてはらけしからすいたみ厠へ行たるにます〳〵甚しく少々吐氣もありアクビ出てこゝろもち甚わろしよりて厠より出たるに忽に倒れむとする故に手水鉢の前に坐居たるに治部右衞門わか顏色菜の如しとて走來りて問ひ直に背中をもみくれたり夫より新右衞門家來共等惣立にて大騷となりたるに少も病不減手足結冷にて惣身より夥しく汗出るのみ也しはらくして所々へ遣したる醫者の迎のもの來りてみな留守也といふ其次解毒丸熊膽なと如夢にのみたり其最中に土屋大膳亮來る驚ていろ〳〵と世話す厠へ行こと頻也手をとり腰を押人々市三郎をはしめとしてなこしの大ぬさゟも甚しく手を出して世話するも忝しやかて醫來りてはりをうちくすりを飲ませなとして四ッ時過に少々治りたり其後新右衞門大膳亮次部右衞門なと歸りたり母上の御案事

大かたならす苦痛をみるに忍ひすとて御經のみ也これも恐入〻一ッ也

○廿七日　晴　不快に付登　城不致され共幸ひに不快今朝はやゝ本復せり五ッ時前例〻肴や彌助走りて大松魚如生をもち來りてわれに呈せり醫に聞にはや食してもよしと云也よりてひる飯にさしみ少々食せりみなあらた也とて多く食するもありうらやましけふは不快にて一人も不逢積なれと無余義夕かた迄逢もの引もきらす○治部右衞門新右衞門等昨日〻跡を案事して來る幸三郎も來る

○廿八日　晴　廿六日にて見習濟廿七日にて御老中方〻申上平服に成初詰番〻積なるに一日引たれは表向引になりたりよりてよほと快押てならは出勤も出來るなれと兩三日加養〻積にて引込御屆を進達せり○おのふこのほと暑氣甚しき故にわか中(アタ)りはせぬやとてしまを遣すいろ〳〵と東海道中山道を下たるはなしなとする也大江中務か妻の姉のかた目なる老女のはなしをして笑ふ也万金丹を御藥に奉るらむなといひて人々絶倒せしよしなとかたるなみた落ることもありき追〻かたるへし○わか不快を聞て追々人々來る大越又は忠四郎等も來る大越はひる後來る幸三郎とともに刀を拭ふそはにていろ〳〵のはなしをするをみるに實にきのとく也其上に今日は暑中所々歩行たれはいよ〳〵耳遠也とてこまる故にくみたての水を以われみつから半手桶計藥くわむにて頭をあらひ遣したるに少々耳近くなりたり然ルに近頃書物をよみていろ〳〵の論をする也近頃は鷄もなほさりにてあくひのみをなして時をつくることなしいかゝなといふかことし耳のきこえぬはこまりたること也都筑なとにてさそこまるへしと歎息する也され共氣力は少も不替酒なと給られたりかゝることをみてもおさとかまと(ト)居にあらぬいかにもあはれみ思ふ也

○廿九日　くもり　昨夜出火寺のはやかね聞たれと火消やしきの靜なれは其まゝにふしぬならにては大騒なるへし○ならを去り江戸へ來りてこまること第一に飯也なか〳〵引わりめしをくふよりもくるしされ共中上

米也といふ也俊藏等甚敷迷惑するとて一同はなす也庭鼻を突合すかことくおもふ也さて風ふけは足のうらざら〳〵として土にてつくりたることくなる也其上に錢至ゐ高く七百五十諸色高くしていかむともすへき樣なし難有土地なから家來共ゑ上かた慕ふも尤也とおもふ也肴は今はもらひものあれと今十日過はなすより食するものなかるへし其上に藤田幷河野御番留主に押込入たること事實にて所々盗賊のさま驚入也このほとはみな旅つかれ不止故に表にて不寐番をする也雨戸なと一枚ことのしまりにてけしからぬこと也ならにて足ふみのはしふしたることきこゝろのこと一夜もなし○此ほと合羽やの世話にて十六七はかりなるやとひ女をせり指をはらして下りたりこの女はタツか從弟女也といふ也少々似たる所あるかことし上かたへも行といふ也ゲン日々はたらくよし也されと飯の時折々出るはかり臺所にて中をとひ歩行躰也めしたきに別段雇女（ヤトヒ）せり越前のもの也と也夫へなら人かヒタルフテナランサカイハヨメシクヒタシなといふとて女共めつらしかりまねをする也日ことに四度ツゝめしをたくといふこと也女共ゑ内にてシマヒなとするものくに壹人なるも大笑也ひやめしのなきにこまるなとめつらしきこと也左衞門尉不快も既に快氣に近しされ共遠國奉行御用なけれはみやけものかた附其外のために來月三日ゟ登　城するつもり也蚊はならよりはよほと少しさして患とならす○母上御心は少も替らせられす古にかはられしこと相みえすくにを御相手にてみやけものゝ御世話等なさるゝ也御氣根のよきこと別段也

○七月朔日　晴　おのふもわれを案事て屢（シバ〳〵）シマを差越し御下の御飯其外なとくる○市三郎細川ゟ馬の弟子入いたし今朝ゟ參る○今日なら表よりたよりあり日記來るおさとのうた不相替おもしろし氣分もよろしかるへきかなと母上と御物語いたす○いまた御役替不被仰付已前ゑ事也遠國のことみなこの如し既に九日を過せり○朝より夜中まて客來る其混雜いふ

へからすけふ貞五郎なと來りたれと其邊の人は一わたり口をきゝたるはかり也例の小笠原來りて僕迄御膳難有と云て歸るさま以前のことし

○二日　晴　昨夜ノロシあかりたり太郎二階へ上ることをゆるさす故に昇りみたかりてひるよりわれをせむること甚しされ共客來に付夜に入らはつれ行へしといひき夜に入兒輩寐る時となりて太郎わかそはへ着坐御ヂゝさま私はいまたねませぬと屢いひてわか顏をみる也されは共なかなか其ことなとにかゝり居られすよりて市三郎を添て二階へやりたり五時過

○ならにて石燈籠を春日へ奉納といふことまことかいかゝ○此ほと朝夕ほとゝきすやかましきかことし山ほとゝきすならて都ほとゝきすなるへし

大和ひとまことゝはせし初あきもなほ打はへてほとゝきすなく

豐藤かもとへ壽乘か鮎の小つか遣すとていさゝか其人の今のさまを賀すこゝろにて以前烏帽子なと奪行たることおもひ出て夫等之はし書して

老ぬれと君のめくみのよしの川のほれる鮎をわけまゐらする

と手帋の末へ記したり○不快こゝろよしよりて明日より登　城之積同列へ申遣したり

○三日　晴　四時登　城○中暑全快いたし今日ゟ登　城候旨山城守殿ゟ御屆として出ル○今日中野ゟ參る兼而後家ゟ面謁之義申に付よりて也中野はわか七ツ八ツの時ゟ常に參りたる家なれは後家其ことを申出泣也大坂のことを聞に庭番と云ものありて勤番するよしなと承りさて〳〵窮屈のことよとおもへり○伊能へ行先生七十五才也と衰大にみゆる○小笠原日々來る○今日蜷川能登守へ參る同人殊之外之喜也古佛古器等みするふる神社のうしろ玉かきのうちは白河院の御世に古物をうつめし所也といふ能登守わか參りたるをよろこひて宅へ歸りみれはいろ〳〵ものくれたりわか江戸役ならぬをかなしみてなみた落すさまいとかなしいかなれはかくわれを思ひくるゝかとおもふ計也

○四日　晴　所々廻勤ゟ上登　城初詰番いたす○母上日々の御世話例ゟ通也御氣力至ゟよろし御忘れは多しと仰らるれと左もみ奉らす候此ほと衣類其外ゟことみな敬事くに引受也諸遣ひものなと同人に取計する也われいふくになと人間にならは新右衞門は親にまさること遙也元來は目通ゆるさぬ積なれと新右衞門妻の云こと又こととはりにて無余義ゆるしたり此こと兩御親君へも御聞にいれられ候樣とおもふ也おさとよりもしはしはいひたることなれと決してゆるささりしか新右衞門妻の云こといとあはれ也其こと長く面談ゟ上に詳にとくへし○昨夜夢ウハバミと爭て組しかれしとみて夢さめたるに市三郎ねほけてわか腹の上へ大なるあしをあけ置たる也おかしさもおかしはらも立故力を極て足を打たるに驚さめて悴まて御目見にてわひことをいふ絶倒也

○五日　晴　たつの從弟カツハやの世話の女指をはらしたるとて不來其かはりに吉田金助世話ゟ娘來る十六七才はかり也いつ方の歟用人の娘也以前の女ゟはたらく躰也けふも亦のろし上る

○六日　晴　一昨日井上へ行たるに同人は留守にて同人の妻出ていろいろはなしの上にさて今般太郎を大坂へ可被召連と云義は余人はしらす新右衞門妻におゐては殊ゟ外歎息也其わけは太郎を母上の愛し玉ふこと別段にていかに怒玉ふときにても太郎さへにあれはおさまる也其上御氣の保養藥十ふくにあたるへしされは太郎を差置るゝは母上の御爲也といふ也これも一理也されとおさとか出立前にいふは太郎は嫡孫也おさとみつから養へしと何卒可連參といひたり是も一理也いつれも尤に付村田阿州翁ゟ及相談候處おさとに同意也といひし也

○七月七日　雨　例ゟ通登　城いたす　御城の混雜夥し常三郎大にきもをつふせり○新右衞門幸三郎來る小笠原太左衞門も來る夕かたより新家も來る平岡圓四郎其外來る夜四時頃客來相濟かゝること日々のことし○けふは一町を廻り新家ゟも行新家酒のみ居たる所ゟ行たり所々廻勤故われは

不呑差急候ゑ茶一ッ給歸れり○新家へ久々にて行たるに家のさま大にかはれり壁立具なとみな新にて金すなこ彩色畫の二枚折を立庭は軒下をみなたゝき土になして長サ五尺計厚壹尺はかりのねふかはの沓ぬきを置夫より同し石を庭へ置ならへありて石燈籠二もとあり節句故にみな〳〵キレイに着替居たりはなし中御ヒクニはいまた着替前の躰にてあられたり六年ふりにて逢たれと少も衰たるけしきなくいとみづ〳〵し新家には小さふらひ供さふらひ下女二人あり（御ヒクニの方は別也）常のくらしのさまけしきはみゆ○うなき肴すしなともらひて新右衞門幸三郎銕作なとへも爲給候みなこのほとのよろこひ也　君の御めくみによるものにて露人にいはれぬ到來もの半てんもなし有かたきこと也役人は人にいはれぬ到來もの有て天は身をも家をも亡ほす也可恐こと也新右衞門なとは此ほとのくらし莫太のことにて所々到來もの至ゑ多し新右衞門夫を至ゑ苦勞にして少のものにても心さはりは返却するといふ也少々安心せり

○八日　雨　例刻登　城○去ル六日藤左衞門妻出產せり小兒至ゑ女弱し昨日なと舌こはりて乳を呑こと不能故に醫より外醫にもみせよといふよし也○野田ゟ朝貞數はち來る其内を太郎もらひて井上のおばへ書狀を附てやる也書狀をはわれにみせたりあさかほ一はち獻上奉り候とかきて以上は目錄の通はなして書たり其わけいひきかせたるに直してスグに書來りあさかほにのしを附てもち出たるさまなとさなからに彼か母の幼年なる時茶をもちてわか前へ出たるに其まゝ也上かたのおばゝさまへも書狀を近あけよと母上の仰られて御めてたく存上候とかけと仰られたるに男ならは恐悅奉存候とかきたしなといふ也

○九日　くもり　宅調兩三日已前妙壽來るひかきのうはよりも甚しき躰にて耳もきこえすわれをみてたゝなきに聲をあけてなくのみ也みやけとして目錄を遣したるに不足なるへし衣類の質をうけくれよ今日そなかきわかれなるへしなといふ金子遣したるに懷中ゟ袋を出してつゝむ躰なと

氣力少もかはらすのち聞は五月にも貳分貳朱井上よりもらひ行たると也
されは泣事にわれ欺たる也

○十日　夕かたより雨　田口加賀守其外來る夕かた加賀守と對話中玄關
ゟ參り繼上下ゟまゝ醉臥いたし候もの有之乙骨彦四郎と申候ものゟ由い
かゝ可致哉と用人共いふ故其彦四郎は能書にて詩文共に當今聖堂ゟ罷出
候ものゟ中にゟ聞へたる男也大酒のことわれ聞り必わか歡として來り其
途中にて大醉に成たるなるへしゆり起しわれに面謁ゟ事ならは醉墨をみ
せよといへとて帋を差出たるに唐帋幷扇面へ龍蛇の雲を起し雨を得て昇
天するかことき物を書たり客歸りて面謁したるに上下もとり無刀也詩
文を論するに舌も不廻やかて雨強けれとてかこをかりて歸りたり本所四
ツ目に居る人也幼年の時より大才子の聞へありきわれ以前面謁ゟ時初見
に先生は六朝の人の風ありといひき今も其くせやまぬとみえたり此人ゟ
詩文學文をわれにくれたらは荒井筑後守位にはなるへきに可惜こと也

○十一日　晴　きのふ幾之進被見候御殿ゟ娘幷畑山ゟ今度ゟ悦に手塩
皿二筥を被吳候同人やゝカナツンホといふへき躰なれと氣力は不替刀ゟ
はなしなと頻也大聲にて例の五文の油揚のはなしなとあり耳遠故に大聲
殊に甚し追々に直カツ江川太郎左衞門小笠原太郎左衞門落合ふヤツコ豆
腐酒差出すいろ〳〵はなしのうちに太郎左衞門いふ左衞門尉さまと御隱
居樣御同道也やと母上御答にいや也とて段々仰られたる故にわれ脇ゟ母
の上かたへ行かぬには困ると申たるに太郎左衞門いふ若母上の上方へ御
出をおもはゝ日蓮を信仰せよ日々十卷の經をよむならは母上上方へ御同
道可被成といふわれいふ母の參ることならは十卷の經をよむへき勿論也
といひしにさらは母上上方へいらせらるへしといひしに法のためならは
上方はおろかいつくへも行へしと忽御決心にて此上は市三郎御くに緣組
取極候はゝ即刻上方ゟ可參と被仰候彌夫に相成ゟわれ大悦せり其替り母
上御發足當日ゟ日蓮を謗らす經を十卷ツゝよむへしと決心せり

○十二日　くもり　母上昨夜より少々御中暑の躰也昨夜は何も不被召上候今朝少々御膳被召上候午去御つかれみゆる也これはこの頃よりの御つかれ出たるなるへし御世話は不相替よりて御邦に申付て今日ゟ何事も母上へ御聞にいれすわれにいふへしと申たりこの女少々心静になりてよる〳〵われと母上のあンマをする也われはもとよりことはり也小遣ひ帳其外遣ひもの等ゟ義夫々いたす小侍太郎等ゟかみさかやきをする也

○十三日　晴　昨夕方ならゟ狀とゝく七月朔日までの日記來るならに日ことの雷雨大におとろく其上ホラ拔ありと聞く世によくいふことなれと貝のホラにや山の洞ホラにや其詳なることをしらす山つなみ山潮なとゝもいふよしは兼ゟ聞ついかなるわけにて水の出るといふこと是又しらぬ也

○おさとのうたとり〳〵に感吟也折節小笠原太左衞門來るよみ聞せしに大に驚て土左日記に源氏物語の文意を加へたるかことしといひきあまりのホメ様なるへけれはカヽ自慢にて十分一に買へし此ほと朝五時前ゟ夜四時迄ゟ客來其内に小笠原なと定客にてうたも詩も出來不申候○廿五日の素麺の取計大によろし○貞助の不快いかにや同人福來卽死といふ三世相なとのことなき様にいたし度候○松魚のうたはよし一向松魚はなし日記ゟ通也○酒のみへ甘きものゝこと諸事に通へし尤なること也○父上母上より御歡の御書被下難有候父上の御書は御勇さましく別ゟ難有候母上の大坂御難澁もこれ又御尤に御座候○おさと市三郎を案事候由御尤に候道中にてはこしにわらちを附たるさまなとすさましく有なから一向にあるけず我遠足の狂言と名附たるに至るされと歸りては日ことに勢ひよろしく候今日も新右衞門馬に乘來り同人と一同馬にのり新右衞門方ゟ行たり○母上の御不快少々のこと也恒菴あんし不申候由也今日御針をなされ候宜候ゟ夕かたより御起出なと有之候○桑原の隱居來る法躰にて大に衰たりしはらく逢はすとて先汨にて久しはなしをなし居たりわか少も不變に大に驚たり○ならの石燈籠はいかになりしやはなしはかりか○土地の

もの共よくいたす躰おもひの外のこと也夫に付はなしありわかならへ行ころ來もせぬ人々ゝ内不來してはいかゝおもふものまて子まてつれて奥へ來り母人へいろ〳〵へつらひいふも不少耻しらぬ面々いと〳〵多し夫に母上との御はなしさまたけらるゝはつらしされ共勢に從ひ勢なきに敵となるはいにしへよりのこと故又わか勢を失ひし時敵となられぬ様に大切に取あつかふ也されとはちしらぬ小人共也○おきつ宿下りゝ義申來る母上の御事分ル迄は面會不致と申遣たり

○七月十四日　晴　江戸は日々の風にてみなこまる也夜のすゝしきは當年はかりかさてもしのきよし○江戸蘭醫被行故にきくすりやのみせにてヒルをかめにいれてうる也いつかたもみな同し其外單衣のくろき木綿なからちりめむのことをきる也大嶋かとおもへは小サク小縞かとおもへは大縞なるをみなこのめり○なら人を二人外へ出したるに江戸繪圖をかひ大道なかへ開きて兩人相談して歩行也町の子供はヤシなりとおもひて蟻のことく集と也往來の人に世話やきありて靈巖嶋のミワ方迄みちを教へ半途までつれ行たりとめつらしきこと也とて人々笑ふなら人日々イワシを買ふやすきに驚よし也○淺野中書來る久々にていろ〳〵の物語くれかた迄にてめしなと出すこゝろ置なき事也同人いろくろくさかやきこと〳〵くにはけたり大にとし老たり○ほとゝきすなほしはなく也

○十五日　晴　きのふは上野　御靈屋ゝ拜禮として罷出其歸り懸所々佛參いたす多寶院ゝ參る寺のさま以前と大に變れりはか所しれすよりてよく聞は隣の寺也かゝること江戸中絶故に所々にてする也○上野　御靈屋ゝ參常三郎二天門よりうちの石御燈籠の夥しさ御立派なるをみて肝を潰せり　勅額御門々内ゝさまを遙にうかゝひ奉りてからかね御燈籠の夥にまた肝をつふし御水屋其外の御けしきをうかゝひ所謂聖人の門墻をみたるものゝことし御くちもとなから驚さることなし　文恭院様ゝはしめ參詣そこきりかとおもひたるに　有德院様の　御靈屋少もかはらす殊に御

修復出來たてにて石御燈籠金　御紋等ギラ〳〵しきに肝きえて眼をみはり頻に首めくらすはかり也かゝる　御靈屋增上寺にも紅葉山にも上野にも猶いくらも有といひきかせしにアッといひて驚歎せり○昨日は佐藤捨藏來る八十才也といふかはりたるけしきなし○茂兵衞後家來るしはらく物語したるにおさとゟよほとわかくみゆる五十一才也といふ也わか眼のあやまりかと密に市三郎を呼て臺所にてめしくふさまをみせしにおさとより三ツ四ツ若しといふ也あまりの不審さに俊藏を呼て聞によほとおさとより若しとて市三郎より甚しくいふ也いろ男なとあるものは別段なることゝみえたりされと亭主もちより甚しきわけなし亭主は意みせ御出入ゑ類いろ男はふりうり新みせの類にて又別段故歟或はいろ男われより二十も若しと聞は老木にわか木を植添て實にわかやきたるか其詳ことはしれかたし

○十六日　晴　今度抱たる士に太郎汝は何に抱られたるやと問ひしに大坂へ參りとのさまになりますと答たり太郎不審して夫となく俊藏に彼は何になるやと問ひしに中小性也と答けるよし太郎其時されはよ其位のつら構のやつ也とわれもおもひきといひしよしみな〳〵大に笑ひし也○太郎はよほときまゝ也夫故給物なと夫是きらひ多し嫌ひなりといへは母上余の品を被下也わきゟ來るもの其外共に太郎は神佛の次也母上の御さたに太郎は大坂へやる積なれは人は何ともいへわかおもふまゝ十分にかはひかる也叱るへからすとの御意故捨置也敬次郎は大に異也おもふまゝにならぬことはかけへ行て泣居る也太郎は諸事ゆるやか也敬次郎はこまかも兒戲のケンなとを打をみるに敬ゑ方かゝることにはよほと才ありて太郎は叶はぬ也

○十七日　晴　上野　御宮へ參拜きのふは貞五郎來る夕かたまて書物のはなしをなして居新右衞門來るとも〳〵にはなし新右衞門へは酒貞五郎へは其さかなにてめしを振舞候貞五郎以前にかはりたる躰なし書物も不

相替よむさま也相應〻わかきもの也○十二日には諸向年毎等〻御番入あり百人はかり也石川良左衞門忰も被召出たるなるへし御沙汰書にみえたり荒井甚之丞忰は十一才也といふ是さへに出たり○十五日には治部左衞門實父の年回に付名代として市三郎を遣す例の無理とめをされて歸ると不能迎を遣して夜九半時に漸歸り來るこまりたるヤツラ也

○七月十八日　晴　此ほとこと更にあつし九十度位なるへし○村田阿波守嫡孫鐘三郎御小性組へ御番入いたすしかるに阿波守其歡にてつかれたる所時候にあたりたりと聞て見舞に參るよほとムクミみゆる也四五日のことなれといたくつかれたりとみえてこの度はとても出勤難成なと云也見舞に參り暫はなしたり歸宅後見舞として少々青丹よしをわかちて玉子添遣したり

○十九日　晴　惣とし寄十七日にいろ〳〵の屆物差出すかゝや助藏昨日着せり昨日ころ惣吉忰其外〻人々ならへ歸着なるへしかたみに江戸とならのことを聞なるへし母上日ことに今いくかにて出立になるとて今よりはや御かそへ也そのたひにわれかくの如し大越の御隱居は不意なかるへしと仰らるゝ也○いかなる人にや有らむわか方〻來るといひて外へ行其上酒のみて遊女を打擲せしなと聞ゆる也いやなること歎息せり○三嶋所左衞門と相談〻旨もありて來る廿五日新家〻寄合〻積也

○廿日　晴　新家よほといそかしきか着已來既に三十日に及ふ一度出かけに來る其後は夕かた一度來る酒なと差出され共客來にて新家とはなしすることならす其後きたらす新家は御兩親樣のことなと御平日〻樣子等詳に承るへき爲屢來りて其御樣子を尋一ッは御健を喜ひ一ッは御とし被召たるをかなしみ御平日を伺なるへき筈也わか機嫌聞に來るにはあらぬ也しかるに右〻通也夫にておもへは遠國中書狀を以御機嫌をも不伺筈也留役はわかつとめし頃とちかひ格別にいそかしきとみえたり日ことにわか前を必二度ッゝは通る也夫に來らぬて今のいそかしきをおもひはか

る也○敬次郎ひかむを防くにて粥三はいの外給物なし故にひもしかり朝夕人のもの食ふをみてはなく也かくしるし置たるに今朝銕作來る一わたり時候のはなし等いたし暫あり其はなしのうちに川名八藏不束増長いたしいろ〳〵のことあるに付親圓藏無余義突殺し其旨申立になる無子細すみたり人々圓藏か正直故かくたしかなることも出來たりとて感心せり八藏は銕作別懇にいたし候ものにゐはなしなといたしたるもの也

○廿一日　晴　御老中御人少且大暑に付式日御出座なし右に付誓詞も延に相成る○昨夜大雷雨四時ゟ八時に至る麹町市ヶ谷其外ゟも落候由其外共都合九ヶ所といふ也江戸のかみなりいかなれはかく落ることにや御城内梅林の松或は八重洲かし山下御門なとへも落たりといふ都合なか〳〵九ヶ所よりは多かるへし○長崎奉行今日出立飯田町を通る故に二階へ上りみな〳〵みる母上は俄に二階より御下也母上はなせと問奉るに左衞門尉か九月はあの躰かとみるもいや故に俄におりたりとの母上の思召さてもお

もはぬこと也

○廿二日　くもり　きのふは暑九十三度に及ふといふ夜もねられす團扇を持通し也これにては米下らくなるへしけふも又あつし○根本善左衞門來るおしけのはなしなとするおしけ貧なるよし可憐こと也衣類なとよほと少なくなりしといふ也○誠一郎父來る今般の賀を述る母上御世話有て御酒等被下候夫に付ゐもおさと歸らすしてこの度は大越の御老母いといと本意なかるへしなと仰らるゝ母上日としておさとのこと仰られぬことなし○昨夜土屋大膳亮來る夜四ツ頃まてはなすこの頃四ツまて客のあらぬことなし下女共の難義おもひやる也下女のうち太郎のうはよく雷の起ることをしる日ことに二階へ夕かた上りけふは雷なしありといふ也おけいまた同し江戸の雷かく落ては人々きらひなるも尤なること也○當夏松魚少しきのふみしまゟ二本來るみなふるし

○七月廿三日　くもり　大にすゝし不相替客來多し

○廿四日　くもり　大にすゝし○例之通登　城廿日之雷町奉行所ゟ届出候分計九ヶ所といふ右之趣を以おもへは二十ヶ所以上江戸中に落しなるへし○十七日夜駒場野御たて場（御成之節上之被爲成候小高きところにて中丸といふ也）の大松一本地中ゟめりこみ二間はかりなる大なる穴あき其わきに別に二三間はかりなる所土を大にもちあけしと也よりて見物出候由

○廿五日　くもり　村田阿波守腫氣不宜樂信院へ轉藥いたし候由吐氣さしこみなとあるといふ何分六ヶ敷かるへし

○廿六日　くもり　おのふ所よりいろ〳〵と對面之事申來るよりて御留守居へ懸合之上にて親類書にとり拵なくは對面すへしと申遣りたり夫にこまりたるか丈助方へいろ〳〵と申遣して新右衞門を頼さま〳〵にいふ也されとも母上の御事たしかならすしては逢かたしと申切遣したり○鋏作わか方ゟ來るよしにて兩三度夜八ツ時過に歸りたるよし其節俄に御用出來たるなるへし來らさりし也留役はわかつとめしころよりは大にいそかしきとみゆ

○廿七日　晴夕かた雷　けふはあまり人不來とおもひたるにひるころより段々落合夜に入て夏かけ來り彼是にて行水をも遣ふことならす四ツ時頃まてかゝりたり中納言俄にいとまを願ふ故に願之通申付る右に付ゟは段々夏かけゟ申聞たるよしあれと聞かすよりて願之通申付る夏かけへ無面目逢こともならすして置手かみにて日光へ行とていつ方ゟ行たりやしらす必ならへ行たるなるへし可憐心得違也

○廿八日　晴　月次御禮有之例之通登　城佐々木循助奈良奉行被仰付之同人はわか目出したる人にて其上此人ならはならよく治へしと大によろこふ也

○廿九日　晴　佐々木循助の師匠番いたす同人御徒御抱入より二十四年也といふ也同人のけふの供立等近所ゟ見物として來るもの夥と也左もあるへし目さましき事共也母上は循助のことは少も仰られす松月尼のさそ

遠國のわかれをかなしむへしとのことのみ也

○晦日　晴　昨日大越幾之進來る耳ます〳〵遠し何事も近所合壁（ガッペキ）へなりひゝくかことき聲にていふこと也幾之進も又しかりはなし以前ゟ五六段廻りくとくなりたりおさとにみせたらはさそ氣をもむへしといひくらせりされ共刀すきはやます目キゝは少々よく成たり氣分はかはらぬとみえたり耳少々は近くなれとくみ立の水にてわれとおくに打寄て頭へ冷水を多くかけやりたり其時はいさゝか近くなるかことし病氣養生のため剃髪したしといふいつれとも相談いたしおさとの了簡に隨ひ可然旨申答たり折節如生すゝきの大魚をもらひたりウシヲにつくりさしみなとにいたし差出候○佐々木循助來るいろ〳〵のはなしいたす松月尼のこゝろ果して母人と同し廿一才の忰十四のよめに付妻を可殘置なといふ故によろしからしと答へき

新家へ御狀參り御決心之よし詳に被仰下同人安心せりと物語る

○八月朔日　晴　八朔として登　城例年ゟ通也○廿九日夕かたなら表ゟ出立前ゟ書狀來る○母上よりの御狀難有拜見仕候委細は母より御受申上候義と別にこゝにしるさす宜申上奉る○父上母上大坂御難義に思召候は御尤と奉存候され共　上よりの義いたし方無之候かゝるときは信心を被遊候ゟ御經を御よみ御心を靜に御じれ被成候事不被在候樣と奉存候義に御座候御經をも左衞門尉ためなとゝは決ゟ御無用鋏作無事に參り候樣と御いのり可被成候じれ候樣のこと万々一被爲在候得は法華經に至ゟソムキ候事に付大坂はいやに思召候とも鋏作をふひんと思召候ゟ信心被遊御經の力を御かり被遊候樣只夫のみ申居候○おさとへ今ゟ返事○太郎を差置候義に付段々の了簡尤に有之右ゟ趣井上にも書狀のまゝ可遣候母上の御そはにたま〳〵罷在候事に付少も長く罷在孝養いたし候へとの事まことに御尤也此地居（オリ）合可申とゟ事一わたりは然りされ共朝よりよるまての客にて母上わかはなしするひま少とゟ御歎息ありおさと日記ゟ内におく

に宜なりて夜の明たるこゝちすといふことあり實にしかり此節之躰あしきことさしあたりみえす諸買ひもの小遣ひ帳のゞくゝりなとみな引受也わかねる時は來りて按摩をなし朝夕のことみな取計着類之出入等之類不及申これみな新右衞門妻のしん切より出ること也序におさとよりふみにしるし申遣たし幾之進のこと彼是決ゑおもふへからすわか方へ來れはおさとへ骨折の挨拶こゝろにて諸事なす也これも一ッの樂しみ也され共都筑或は佐々木なとへ行ことはこゝろあるへしおさとよりこゝろ附遣すへし其内都筑は格別なれと佐々木なとは行かすともよし當人は愛子の貞五郎か爲に權門こゝろ也可憐事也幾之進は隱居のこと故佛參と樂しみに刀をみて遊ふことよし勤向等のことは必貞五郎にまかせ切にいたし少も世話をやくへからす却ゑよからぬ也○このほと客來ありて可記ものあれと記すことならすこの日記は今日も終日の客來なるへしと明六時に起て椽かはにてしるす也蚊ならの十分一位故さしてこまらぬ也

○二日　晴　晦日くれかた七月廿一日附之狀來る○おさと書狀之内御隱宅女之事召抱可參旨委細承知也右は此節所々に申遣し穿鑿專也され共相應のものなし其内當月は出かはりするものある故に必あるへし今十七才はかりなる女壹人重助の世話にて來り居る也これをつれ行は子細なしされ共風俗丈ひきくいろ黑して身のとり廻し田舍相撲のことし太郎なとノロマ御前と呼故余は夫にて御察しあるへし金子遣ひ拂等之心得詳に承知也刀壹本新右衞門に遣し其あとは直勝か打たる不用のものに切るゝもの有たれはもらひ置たり三兩はかりにてすむへし脇差は所々申遣し置たれとも一本も不來來りてもわかこゝろに叶ふものなし歎息せり逗留中手に入こと覺束なし○太郎に之おさとのふみ來るはしめより末まて手本のことくにしるしたるものなれはみなよくよめてわかりたりよろこひて自らまきて箱に入たり大事に納置と申付たり一日に二三度出してみて又納置たり○日記之内惣吉悴等かよし原へ晝行たるよしいかゝあるへき無覺

束され共道中にゐなま魚を不食あさめしにつく香の物をかみにつゝみ夫を菜にて一せんめしを買事をすますくらゐに付晝みて遊女のにしきゐにても買しなるへし或人云其夜よし原の女郎にいかなる故にやうなされしものありと也いかあるへき無覺束こと也○おさと折々の持病され共早速に快御兩親様御健ゑ由醫師申上候由恐悦の御事也○此ほと江戸の人々の様子をみるに親のなすことみな其子或は孫にむくひ來る也彌吉なとの死したるといふもわかあまりに昇進せしむくゐ也よりておもふわか人を叱れは無利なることなれは夫たけはいつかたにてかわか子孫必無理に叱らるゝ也其子孫へむくひ來りて血筋ゑもの段々難義すること物をかひてかけ取のくるより甚し人を叱るは少々の事也身の分限を知らぬものみなしかり可恐つゝしむへしよりて此ほとこと更につゝしむ也母上の御沙汰にいかることあれはよむ法華經みな火ヱンとなりて身をやきくるしむと出家の言はわれもつゝしむ也汝も可慎と仰られたり此ほと太郎らをあはれみおもふによりて人々の行末をためしみるに其血縁のものにむくい來ることおそろしき事いろ〳〵おもひ當る故に別ゐこゝろする也

○三日　晴　八朔には新右衞門方ゟ酒肴もち出しにて馳走あり人々にとりわけて遣す新右衞門なといたくつゝしむ躰なれと奉行其外ゟ正しき道のもらひものありてゆたか也八朔には大坂にて父上母上おさといかにやあるらむなとおもひ奉る也其こゝろのさまならにて江戸の母上新右衞門其外をおもふに同し旅と違ひ登　城をもなしいろ〳〵の人々に逢ひ勿論上の御機嫌宜御ありさまをも奉伺なれとさりなから夜なと秋の空のすみわたるをみて同し月同し星を今みるやいかにとおもふこゝろはならにありしと露かはらぬ也

○四日　晴　おさと日記の内大越の御老母のこと有老人の了簡御別段なること也され共おさとのこゝろやすかれとの御心もあるなるへし夫は母上の御さまにておもひしる也夫をいかにといふに佐々木循助御徒御給人

より廿六年めに諸大夫芙蓉の間の奉行になりて江戸中の上下目を驚すことにて待受其外のにきやか夥しきことなりよるもさはるも佐々木とてうらやみおもふ也夫に引替て母上は松月尼はあはれ也とて其ことのみを仰らるゝ也果して松月尼母上の御察しに露もたがはぬ也人のこゝろ同しきことかくの如ししかるにわれよかれ人はともあれとて身のほとしらぬことをなし人を難義さするもの天道の御ゆるしなき尤也とおもふ也死して地獄へ行ことなと佛の敎遠にあらぬ也人は目出度時行末をはかり人をあはれみ不敬をすましき事也此ほと夫をおもひ朝より着替にて面謁を乞ものには身の高下をいはすつゝしみて對話する也さすれはあの人は逢ことかすき也とて用もなき人面謁のこと申こみてさらでもなきことをいふ也されは共夫を少も不厭つゝしみ敬ひて逢かわか身の修行也○この日記みな心學めきたりよりて大笑をしるす去年よりの雷にて雷公つよく太鼓をたゝき太鼓破たり故に彈左衞門方へ雷公あつらへに行たるにトクイのタンナとおもひて例之通タバコ盆のかはも火うちを出たるにイヤよし〳〵と斷にていなひかりにてタバコをすい附なから天下無双の厚き皮を以太鼓を申付られたり彈左衞門方にても厓兒水牛名譽の皮にて太鼓をはりて出したるに雷公一ト打打てはみな破る也彈左衞門困し果て急度工夫をなして雷公へ申出たるは御あらくとても出來不申然ルに此ほと承るに彈左衞門配下に八代目團十郎といふものあり大に被行る也其もの學問すきにて儒者を招き學問する也されは共さすかに行かねたるに大造之謝禮をする故にある儒忍ひて夜行クといふこと也儒たるものゝあるましき事也この儒必鋏面皮のかきり厚こと甚しかるへし右之皮を以太鼓をはらは決而破さるへしされ共今彈左衞門の手に及ひかたし何卒雷公行てかれか面の皮をムキて賜るへしといひし也雷公よろこひて行つもりになりしと儒者聞て日々に桑原〳〵といひて居るといふ也其後聞は夫は至而のくされ儒者也いかによき鋏にてもクサレては用にたゝすまして儒者のくされたるをやと

て雷公更に取上なかりしと也さすか雷公の了簡は別段也といふこと也われ夫をきゝて江戸の儒はまたも士氣ありてかゝることをあしくいふ也外のところにてはさむらひ少故に専百姓町人相手故にかゝることいひてはゝ儒者アコかひる也江戸はありかたき事也これにて八代目のハヤルことおもふへしこの頃不快なるに御殿醫の名人を百金にて内々まねきたるなといふ也恒菴も目の療治に行たるに大造にもてなすと也恒菴はかはらものゝ謝禮也施しにすると也謝禮を斷たるよしをわれにかたりき

○八月五日　晴　八朔登　城之節藝州之嫡子をみる大からのわか衆也いろくろくにきひ顔にて健らしき人也よく當時之藝州に似たり眼中之樣子等父上と同し位の人材なるへし○母上昨日ゟ御中暑也よりて母上の御へやゝ引越居少々の御事也無間も御快かあるへし○今日珍敷客なしと申居たるに夕かたより幸三郎次部右衞門野田源太夫土屋大膳亮來るいつれも酒幷めし等差出夜四時頃まてかゝる其混雜おもふへし今日朝より材木町の源來る同人九月には出産いたすに付參りかね可申とていとまこひ也うたの姉も來る母上御逢被遣源うた姉より菓子をくるうた健にて出精之由等詳に後の源よりはなしきけ候由

○六日　晴　昨日飛脚屋ゟ廿七日出之書狀おさと幷家來之狀八月朔日差立之飛脚持參のおさと書狀用人共書狀おさと日記來る○廿六日無滯大坂御役宅ゟ引移相濟御二所樣御機嫌克おさとも快其外一同無事に相濟候由民藏順作別ゟ心配いたし取計候由貞助も先ッ快候由大慶也○日記之内魚のうた不相替おもしろし○按摩かつふれたる眼より泪おとしたるよし聞ておそろしけなるわか眼よりもなみた落る廿五日けろ〳〵の速にこゝろよかりしは天幸と云へし鹿よりさきのうたの返し

玉章をくりかへしみて小男鹿にまさりてわれもねをそなくなるならにわかれのこゝろ切なるさまいと〳〵よくもしるしたり筆のよくもいふかことし勝南院か泪辨慶か泣ことくなるへしわかれを送る人々夥

市三郎おさとゝ之書狀を難有かり一同御涙なくかす也市三郎かくおさとをかなふにて日のおさとの深切なる夫も一ツのなたれの持病なるへしなるとゝ母上御意也

しく近くためしもあらぬよし難有こと也これも　君の御恩也おさとか峠を歩行せしよしにて安心せりやまゐ(マヽ)も例のけろ〳〵のみなるへし生駒根に今つへたてゝのうた万葉にも同し意の名歌ありしと覺ゆ千年のむかしも同しさまなるへし御役宅庭せまきよしはけふ與力共より來る圖をひらきみてしりぬ御目付のはなしにてならの風流にかはり浪花の俗地なることはかねてきゝぬならの庭のはなもみちの慰なと一生涯のかたり草なるへし佐々木循助實母なとは江戸に居つもりなりしかならの風流なる古跡の多きを聞御役所のことなと承て循助に隨ひてならへ行つもりに成しと也おさとか何くれとならを惜む尤なること也この味のおもしろさはなか〳〵まくろのさしみいわしのすいりなとの味のみ論する腸にてはわかりかたし

○七日　晴　きのふは浪花の返事しるさむとせしに四時頃より新右衞門三番町ゟ馬場へ行たるとて來るとりあへすおさとの日記なとくりかへしよむ新右衞門いふ御姉さまの文土佐日記のことし女中にかゝる日記なと當今容易にあるへからすと賞歎せりひるめしに酒差出すわれは一合也新右衞門は三合也新右衞門われに字をかけといふ故に筆取て大字をしるしたり新右衞門も書たり母上今日は御快御とこもあかりて新右衞門とわかものかくさまねなからに御覽つゝ御咄しありて其内に御樂寐となり又御起上り御物語なとありかゝることならにて屢夢みしといひしに母上も新右衞門も亦同しといふ○三日には新家へ行三嶋所左衞門も來る同人立合にて父上より御渡ゟ書付一同へみする鋏作へも詳に申聞する禮后鷲香ゟ兩隱居ゟも詳に相談いたす右に付夫々立合にて取締了簡申聞る新家の宅へ其あさもらひたるさかな遣したるに其外さしみなととりて大に馳走あり新家はあまり酒のますこれは三嶋より禁酒のことすゝめし故なるへし四日に新家禮として來る鷲香院ゟも禮のふみ來りものなとくれたりわれも三嶋も一わたりこゝろ落附たり

○八月八日　くもり少々冷氣也　例之通登　城此節脇差を買候積所々尋歩行日々數本來るなれ共一本もなしされ共なら六年中一覽いたし候程之ものを二日はかりに見たり江戸の刀多き田舍の刀少き格別之こと也なら人にみせたき事也○きのふ佐々木循助なうなきのをりつめを貰太郎敬次郎にあてたらは給さすへしといふ太郎は五たひ六たひいひて漸當たり敬次郎は二度にてあてたりコマを太郎は廻すことならす敬次郎はよく廻す也都あかくの如しされ共太郎はゆたかにて相應になるへし敬次郎は太郎よりのちにおとるへし

○九日　晴　大にあつし○昨日は大越より志之重之内貞五郎持參しはし對話中夏かけ來る四ッ時まて閑話右故貞五郎話中に歸る○俊藏大越へ行たるにならの事を川路にて聞に十に七八はよく聞かねたりよりてけふは喧嘩のことくなる聲を耳に口よせていひきかせよといはれたり其通になして少々わかりたりとわか方の咄も喧嘩のことくなるに又其上の聲とみえたり大越の婦人不快之由出産にはあらしと人々いふ

○十日　晴　大越老人わか江戸着の躰をみむとて着の日密にいつ方迄歟行てみられしといふこと此ほとわかる家内之人々驚たるといふ也此老人奇なることいまにかはらすとみえたり○みわ兒をつれて來る四五日は奥へとまる○昨夜治部右衞門來る四ッ過になる母上より御沙汰にて歸る

○十一日　晴　七ッ半時出宅にて評定所ゟ罷出誓詞無滯相濟和泉守殿御見屆也大目付堀伊賀罷出る○歸かけ佐々木ゟ行松月に面謁同人大にとしよりたり七十三也といふならへ行とすゝめたり○新右衞門日本はしのかしへ人をやり松魚をかひてもたせ來るともに酒給て字なと書たり

○十二日　晴　一昨日小笠原と忠四郎同道にて來る吉川榮左衞門甥病死跡十四歳之女有あるかたへ市三郎遣す積相談あら〳〵行屆候二百石知行上總持金百兩也○おくに之縁談岡村備後守同家同人忰某かたへ相談是も可行屆哉之樣子され共先ッ此節風聞糺中也藤左衞門來る同人と席書いた

す

○十三日　晴　新家世話にて御隠宅ゑ女きまる十八歳也といふ洗たく物なとよくするよし也下女にはちとをしきもの也といふいさゝかいもあれとかあいらしき女のよしみな〳〵いふ我は留守中故みさりし也○刀やより日々刀もち來るいつれも氣にいらすこの躰にてはまた刀なきなるへし○刀や忠右衞門（七十才也と云）來るこれはわかいにしへ彼か家へも行或時は酒なとくみたるもの也此度は此ものゝ計用向申付るけふも來りいと〳〵喜ひていろ〳〵と物語す過日曾我楠等の題にて人々うたよみたるをみせたるにわれも讀たりとてみせたり

曾我兄弟

十あまり八とせの夢をうち碎くその名は富士の山ほとゝきす

わか宿は江戸の大路の市中に時のかねつくあたり也けり

述懷

さひくちてとぐかひもなき山刀もとよりにふき老か身なれは

とありかれかたにさくに驚けれは宣雅翁のうたをいとおもしろくおもひてとはし書して

市の中に獨かほりてちりの世のちりにもそますさけるはなかな

としるして外にうたよみたる書て返禮したり○佐久間修理この頃書をかくと聞てもらひにやりたるに密書のすみ書の山水來る絶妙目を驚せりこの人實に凡人ならぬ事也人一生の藝を一二年にてする也うらやましきこと也文筆のことはなか〳〵万人なとより上にすくれたるものなるへし九年にて蘭學は江戸にて指折と成三年にて鋭炮の師となり弟子の百五十人もあるなといかなる自由なることにや書はよほとの上手也○兩三日已來みわ兒をつれ來りて手傳をする也

○十四日　晴　奥に田口五郎左衞門來る不相替ゑ才氣驚入三男をわか小侍に遣ひ吳候樣相たのむ五郎左衞門四十才也といふされ共氣分はいにし

へと少も不替困たること也○治部右衞門世話ゑ縁談みくじあしゝとて母上より御斷被成候ところみくしにとんしやくなしとてがつてんせず田舍の風なるへし漸意味を示してすみたり○さく夜月至ゐよろしならのさとをおもひ出なにはのことなとおもひやりたり幸三郎來りて四ッ過まてはなし居たり母上より御沙汰幸三郎汝か長尻何事そや粟もりの一ッものみ夜氣を凌き歸るへしとの御意也其躰市三郎を御叱りコタッの御沙汰に少もかはらすみな〳〵大に笑ふ也今朝やり木刀のすこき等例ゑ通也此ほと至ゐすこやか也

○十五日　くもり　月並御禮有之候例ゑ通登　城○母上宗柏寺へ御出也この頃は願滿ゐも御出也片みち廿六丁余ある所也此ほとみちごみ立て雪踏はいやとの御意にてあしたをめして御杖也御丈夫也とてあまりゑ御事也あんまはりのことしとて大におくになと笑ふ故に御下駄をとりよせみたるにあしたの齒としを經て短くなりたる也大に驚て以後はかゝるもの被召候事御無用と申上たり少々の雨はこれにてもよろしなと御意大笑いたす

○十六日　くもり　きのふは夜月よろし例ゑ通月見なれと蛤吸物團子計也しかるに人のもとより肴くれたれは其肴を新家井上内藤へも遣し余を羮附にして給る母上とわれと酒をのむめつらしく二合にいたる月見七十二文はかりにてすみたるも大笑也され共いにしへは塩かつほ一きれにて寺社方調役中も月見をせしにくらふれは近頃は大に奢侈といふへし月をよくみるにはあまり給物ありてはあしゝ酒一二合にかきるへし

○十七日　微雨　きのふ夕かたより俄にさむしみな袷わた入也例ゑ通上野　御宮へ參拜いたす御別當に大越の縁僧なりしなるへし出居ておさとは出府するかいかになと問ひたり御別當にならはよき勝手となりしなるへし○諸向ゐゑ達并に親類書其外等俊藏順右衞門に調させたるに少も出來不申よみ合もの五くたりも落字する或は先格を間違或は調違等夥少も

目はなされ不申さても茂兵衛をなつかしくおもふ也これ同人に香典を遣し或は永代月牌料を附遣したるわけ也かくもやくにたゝぬことかと一人用人をつれ來れるを後悔してしるす

○十八日　雨　おくに縁談ゝ義母上御題目講御ともたちの老母火消與力ゝ隱居也世話にて知行二百石身上よろし屋敷なと立派也といふ事御厩谷の小普請馬場新左衞門といふ人三十六兄の養子に去年なりし人也夫に相談あら〳〵行屆可申哉ゝ躰いまた治定いたし不申候先方至ゝ節儉家にて當主幷養父御奉公あかりの伯母幷母ある所也伯母は廊下傳にて別宅ゝ由小普請なれと取締宜持參二十兩支度望なし只々儉約にいたし度旨を專に申聞る出立前引移いたし候ゝは家來共多入用懸に付十一月に引移いたし度旨申聞る夫にて大に安心せり其余をしてしるへし是ならは相談いたしゝも安心なるへきかおくにを見せ可申とゝ義申談候處不及其事とゝ事なれ共安心ゝためみせ候積也夫は彼方ゝ姉さまみるよし也○太郎よく新右衞門とね

るよしなれ共われとはねすよりてけふケンを打勝たらはわれとねよわれまけたらは菓子をやるへしとゝ約束也しかるに太郎大にまけて當惑して明日までの日のへとなれり○太郎ゝさむらひ千次といふもの貞實にて何事も出來ること大藏と同し病身もやゝ似たり

○八月十九日　雨　さむしいとま乞かた〳〵乳母さとへ行太郎いろ〳〵といひて泊るへからすと申付たりしかるにもしやといろ〳〵といふ也太郎いろ〳〵世話をしてみやけなと爲持やる也今もなほちゝを夜はのむといふこと也さもあるへし乳母人々へ太郎をたのむけしき子のことし夕かた乳母歸る太郎の悦ひ知へしよるわれ戯に乳母は留守のつもりにてわれとねよといへは太郎笑ひて太郎はおりませぬ〳〵といひてトボケなから床へ入たり

○廿日　くもり　少々暖也きつこと逢かたき旨再應申遣したる所昨日□虫損丈助來返事の延引恐入れる旨を申述其上にて表使よりの書狀をこした

り其書面々意親類書は引替不相成候され共母上万一のこと有らむには急度受合候ゑ表向忌服受候義無差支夫は男子の御規定のことくにはあらす受合也との書面也以前の親類書焼失いたし候由乍申引替不相成と々事不審々至乍去忌服受候義表向出來候上は母上を祖母とせぬにもあらぬ事なれは面會いたし可遣旨申遣たり

○廿一日　くもり　きのふ大越來る刀のはなしはよく聞ゆる也外に少々入組たるはなしは筆談也刀のはなしの聞ゆるも不思義也酒を二合に不足給られて大に醉ていろ〳〵のはなし六半時頃歸られたりよき機嫌也○ある人のかたにて娘に淨瑠璃を習はせ其地ひきに十六なるを置其師匠は女にて大名にてめかけいたし候ものにて坐もち也とて屢よひて止宿なとさせしよし然ルに其ことおかしく聞へて尻出て即日下女にいとまをやりしものありと人のいひしをきゝきまことにや其人は隨分手かたき聞への人也なといふ人のかたるをよそことに聞て名もきかさりき○新家一昨夜來りしはしはなして歸るこのほと御用すきにや夜遅く歸ること大に減たりと人はいふ也

○廿二日　雨　在宿きのふは新右衞門方ゑ參る大に馳走になりたりひる九ッ半時過位より夜四ッ半時過位迄に酒一合五勺はかりものみたるへし江戸へ來り別ゑ酒を減したる故也少もよき機嫌と人のいふ躰になりしこと一度もなし松魚なし鯛のさしみ其外也アヒルの油煮なと出たりいとうましく來るもの横山鐘三郎養祖父の隱居幷鐘三郎内藤幸三郎也我とゝもに行もの市三郎幷太郎くに太郎のうは也太郎は實に新右衞門の兒の如しく

御記錄もの
を聞なから
酒なとは呑
へからすよ
りて義經記
太平記をこ
のみたり

に太郎はとまりたり○太平記よみ出る村上彦四郎討死の所を好みたり義經記をもよみたり富樫之介か關所の所をこのみたりいつれも涙を落せり畢ゑ婦女子のおもしろきものをとて寶暦二年正月十一日夜大坂のカフキ役者嵐ひな助といふもの舅の仇相撲取岩石鬼右衞門といふものを相撲共相集たる中ゑ飛こみて鬼右衞門を殺したることをよみたり○新右衞門宅

今は奉行所より之賜はり物其外たのみ等の事多けれはおさとなとのみたる新右衞門か宅にはあらす兄弟かくあるといふはいかなる天運にやと冥利のほとおそろしくおもふ也新右衞門は始終我にはみつから給仕して親のことくなしたり横山の隱居は川村鶴翁の類の今二三段世智かしこく下手より出て且武人藝ことに多き人也鶴翁なと無二の友にて碁なと打歩行あるとき鶴翁を投倒したるに同人息絶けれは小便を口へシコミたるに漸に息出たるなとのはなしある人也衣類其外立派なること別段にてたはこ入をしめサンコ珠大そうなるもの也よほとの工面よし也タハコ入に二十兩余の品ありといふ其余しるへしされ共其たはこ入は時ありてもち來ることならぬこともあるよし也きのふはみす歸宅九ッ時也

この隱居われに御筆を願ふなといひて字をかゝせたり夫にて凡そこと察へし

○廿三日　くもり雨　佐々木循助嫡子婚禮也さとは小長谷某也石河土佐守いとこ女なるへし○大熊善太郎豐藤五十助井上新右衞門平岡圓四郎等追々來る大熊善太郎は夜四時過迄閑話也○大越の母上御入也御供にみわ

參る忠四郎娘來る着服等いかにもうつくしキリヤウ別段也健之丞のいろの至ゐ白きにて躍子シタテ也利口なる躰眼をおとろかせり五十の翁八才之娘を評するはいかゝなれと少々年齡不似合に付あしからし世にいふ男スキのすると云娘となるへし當時わかいまたみさるの美人也順右衞門戯に大坂へつれ行かむといひたるにいたくおそれあのオジサンと忠四郎とはいつれか男よきと人々いひしにヲツカサンの美人と同しく忠四郎の色男天下にならふものなし父上母上の御そはをはなるゝことは片時もいやゐ也といひしよし其利口其余押ゐしるへし何もかも知りて如才なく老人大人みなこの小兒に欺れ居るなるへしとおもはるゝ也

○廿四日　くもり　きのふ大越の母上御同歸との事故に夫はいかに夫にては日記に記すへき樣もなしまけて御泊とて御とめ申たり（このこと兼ゐ申遣たること也）よりて昨夜は御止宿也夜に入母上其外寐ころひてみな〳〵ならはなしおさとの弱かことくにて健なるよしなと御物語申上たり菓子うなきなと給

はり畠山氏の嫡子も參るけふは御歸との事也御反物代五百疋奉るこれはあまりの被下物にて恐入たれ也（ば脱カ）○御用なければ御老母は念珠を御もちおさとの日記にのみ御かゝり切にて御覽也尤其以前おくに一遍はよみたる後也夜はみわも呼出してともにいろ〳〵話也われに用ひよとてふた物に入たる蒸菓子をも被下たり

○廿五日　晴　再暑也○安中城主いたくらいよ守逢度よし申込に付御城にて面謁いろ〳〵のはなしあり同人おさとのうた及ひ手跡のみことなることなと申す岡本花亭老人ゟ承たるよし也いよ守ゟ使者を以甘雨亭藏書をくれ候廿四冊ありおもしろきもの也白石ものことによし○堀田攝津守へうたのことに付石摺墨等謝として遣す同人ゟ鮮鯛來る○昨日は劔術遣ひ團野源之進幷前田夏かけ翁被來候おち合に付同坐はなし一向におち合ひ不申候夏かけはひさしくあとへのこりたり○けふ來るもの小笠原平岡其外數人也夕かた大越來るはなし中に山田朝右衞門隱居松翁來る同人ハ

は菓子幷目ろく二百疋遣す大越へは堀田よりもらひたる鯛ことに新しよりてさしみにいたし振舞其上今日まさむねといふ酒一樽を得たり口きり也とてふるまひたり多くはのまず歸らむとするとき大坂の六日限とゝくよみきかせむといへと飛脚來たりといへと一向にきこえす立歸らむとする故にわれかけ出して肩をもちて引來りて書狀をみせたるに笑ひて坐したり大越ハ〻書狀をもわたす日記とおさとの書狀等はみなわれよむ半はきこえつる也折々笑ふ不審なることあるへけれは以前より〻日記共にかし遣したり同人五ツ時頃まて居たりおさとの書狀をよみておさとはわかいもとなから天下の奇才にして貞實又世に越たり世にかゝる人あるへくともおもはす紫式部にして松浦さよひめのみさほあるものは一天四海にわかいもと一人なるへしといはぬはかりのはなしにて醉中大悅せりわれはカゝ自慢なれと大越かいふほとにはおもはす夫ゟ一二段は不及かたかと疑ふ也いかゝあるへきはないろちゝふ松浦さほひめ位かとおもふ也さ

れ共夫よりはよかるへきか大越鯛のうしほを給いさゝか醉躰にていろいろと大聲にていふ女共等みな〳〵笑ふ也

○廿六日　雨　おさとの書狀江戸よりの書狀をまちたるよし十五日にとゝきたるよしさもあるへし母上の御こゝろもめ可申とゝ事尤也十月さし入に出立を市中幷與力共も待よしいかゝあるへき待へきいはれなし行たらはアキルゝなるへし○御隱宅の女新家世話にて極候もの今日引移十八歳也といふ大から也中スりなとあり坂本源藏といふイトコはなしやとわれ尋たるに人々笑ふ○甲州よしさとよりの書狀一覽候御隱宅御二かたさまのことき世にまれなる御高運の御かたもあるに只の養子をなし其養子の爲に甲州へやられ御難義なさるゝよしあはれなること也よしさとの躰なとは御兩親さま不便に思召して御不用のものなとは彼方へ被遣御めくみ有て然るへし人をめくまぬものは必其血筋のものにたゝりあり可恐ことのかきり也われは一錢も酒食等ムタなることに遣ふはキラヒなれとそれを恐るゝ故に少々つゝのことをする也凡世の中に平日給物等に奢りたるものに貧人をめくめるものなきこと也故に其子孫みな難義する也よしさとへも定ゑ母上等よりも御めくみ遣さるゝなるへけれはわれも御手傳可申其内へ御加へ候ゑ金子三百疋も遣され下さるへしよしさとの書狀には二百疋はかりのことゝみゆる也其外の意もあれと三百疋にてこと足へし又申すこともあらは勘へし新家へ申來るよしは更にきかす尾崎より二度はかりも無心申たると鋏作かたりきわか方ゑ遣し度候得共いにしへより今にいたるまて一度も文通なとなし故に母上ゑ被遣ものに御差加願ふ也此次のたよりに被遣可被下候○大越のこと前に記せりよしさとのこゝゝ御兩親さま幷新家なとは世にまれなる御運也御兩親さま新家なとは世にまれなる御運也

○廿七日　晴あつし　おさとの日記○たかよしのうたなるほと不分也されとなつかしとていろ〳〵と申越あはれ也セのうたおもしろしあなあは

れのうたおさならしくしていと〳〵よろしふるさとものうたおもしろしいこま根の山のはのうたいさゝか心得かたきうちか或はわか解得ぬか又は在五中將の余流なるへし○長崎奉行の家來のはなし江戸にてもおさおさ風聞するよし大笑のこと也世の浮沈の有さまみなかくのことし青くなりしは民藏等別ゐなるへし貞助にかきるへからす○砂糖至ゑ下直のはつ也高きよしは必姦あるへし買に行ものかうりてか○かりの玉つさのうた殊によろしく候と伺候○高橋の短刀よろし大越なと一覽して筑前ものなるへしといふ左の西蓮なとなるへし無銘にて六七寸のもの故三方もすへし

いにしへを忍ふもかなしふかゝりし庭の訓の露のくさ〳〵

このうたをよみて大越もわれも涙を落たり實に感吟也○月をみる亭あるよし御申越のことく拾ひもの也○母上の御不快速に御快恐悦也されは共醫師の躰阿世家也はけしき症は無覺束○江戸の日記を待よし母上其外大坂の日記を御まちある又同し其内大越の一條大越へおもはすもよみ聞ケきのとくにおもふ也されと事實也松月のこと先便に云かことし○太郎のこと御喜ひのよし此ほと日々大學を教ふるに日々三行を五へんにては必よく覺ゆる也且ものよむことスキなるかたちにて何くれとよむ也家來の姓名等大かたはよむ也○阿波の不快よくなりかゝり又わろし日々に同篇と云也○月見にめつらしく人きたらす其外のこと前に記す通也○春日の神主ゟ鶴來るよしうたになるへき趣向といふへし○いものされうたみな笑はぬものなし

○廿八日　雨　廿六日には土屋大膳亮方ゟ參るともに來るもの佐々木循助都筑金三郎井上新右衞門也隨分うまきものあり八時より夜五ツ時退散也○きのふは幾之進來るおさとの日記をくりかへしよむよしにて歌は上達せりとゑはなし也酒を出したるに多くは呑不申候おさとなとよりしりを出したることはなきや此節まさ宗といふ酒を得たり刀すきにはよかる

へし一合にかきり其上は御無用と申たるによろこひて給たり○土屋の母へは別段手みやけに五百疋遣したり

○廿九日　晴　市三郎同道にゐ幸三郎鴻の臺行德の邊へ參る市三郎此ほとは大に健也上野　御靈屋ゑ參拜○殘暑に付九月も夏衣類ゑ旨被仰出之

○十月（九カ）朔日　晴又雨　月次御禮有之登　城○おのふ宿下りいたす右ゑ入用差出吳可申とゑ事也然ルに同人事養女に遣し候義は元來不承知ゑ義其上母上の御事に付親類書不束いたし置逢遣し候にて十分也しかるに其入用まてわれ皆可出遣わけ少もなしされ共此ほと極貧窮ゑ由に付金五兩可遣旨申遣候元來しま參候ゐ申聞候入用廿兩相懸候由申之其内に市川其外へゑ土產も有之然而已ならすわれ奉行職也とて供立等對箱ゑつもり也御次ゑもの對箱は元來ならぬ事也よりて供立其外も殊ゑ外に爲減候ゐ家來共へゑみやけ等みなことはりたり人々よりて不相成と申たるを不聞入遣し

たる市川といふ御したもあれはそこへ行ていか樣ともすへし實家ゟ可構わけ少もなし五兩遣したるは莫太ゑ義と可心得旨申遣候かくとがもなきおのふに苦勞をさせるはいやなれと無理にわか手元をはなれ母上の御こと親類書に省くなと旁以不埒ゑかきりに付嚴敷する也おのふにとかなしこさかしき女ともよりてわか心に背樣に仕かけたることは無是非事也おのふ身上引受極貧に質なと置よし也○明日はおのふ宿下りゑ積ゑ處昨夜癪氣俄に取つめ以ゑ外ゑ躰され共御醫師等にてひらき附よし也急に使差出す退出玄關ゟ御殿ゑ返事はいかにといふ大に快明日は宿下りゑ積親族共呼置可申旨申來る大に安心也畜生あまの因果おのふに報ひ候ゐいろいろのこと有可歎

おのふ身に不束はなく余人のために難義するに也可憐也涙落れともわれゆるさす

○二日　くもり又雨　御城にていろ〳〵のはなしの序に淺野中書菱川もろのふか畫たる春畫をもち傳たると聞て人々借たり村田翁もかせといふ故にかしたるに宅へもち歸ひそかに二階へ上り内御用ゑ書物のことくな

る躰にてみたりと云人々其頃わらひしよし昔禪家の老僧にわかき女抱附たるに寒山の枯木顔色なしと申て走り去しよし其ことを老婆聞て存外僞をいふやつ也とて追ひ出したりと也このはなしのうらにて村田翁の清直の一ッのうちともいふへきかいかゝ翁は至ゐかたき男にて八十四才也聖人の八才以上七十以下男女席を同しくせすといふ敎をけにもとおもふ也

○三日　晴　いとさむし○きのふはおのふ宿下せりおのふ不相替穩にて才氣あり可惜わか子にあらす○おのふ宿下りとて新右衞門夫婦幸三郎夫婦鋏作は不快也とて不來新家の隱居妻幷此ほと泊に來り居おつる來る母上殊に御よろこひ也與助勝藏料理也肴なしといふこと也しか所々大名よりもらひたる肴にて事足候講師三人來る義士傳或は御記錄等ゑよみ切ものあり新右衞門ゐおのふへの時計一ッやるおのふことの外の喜ひ也其外の人々より菓子來るおのふいろ〳〵のはなしする同人此節一人にゐ身上するよししかるにへや親の借金夥其上御奉公出の借金もあり極貧のよし也人々歸り夜八時頃までうちよりて物語す

○四日　晴　おのふ來りいろ〳〵の料理向客對等みな不殘おくに引受也相應に取廻す也客來なきとき市三郎おのふおくになと打寄母上御上坐にていろ〳〵とはなしする母上はおさとの今般のまとゐにもるゝ事をいろ〳〵と仰らるゝ也みなうちよりみれは彌吉の失しことなとおもひ出てひそかに涙を落せりおしけは小兒不快にて不來昨夜のはなしによりてけにも母上のわかれを御をしみ御尤也としみ〳〵おもふ也新家のおつる里に逗留は同人少々不快其上婿よほと不快にて留飲或はかむ症等にてよほとやせたりとて旁其上のさと歸也外に子細なしおつるは少々の事にゐ藥も不飲ともよし位の事也御兩親樣御心配に不及候太郎は昨夜も新右衞門夫婦に附きりにてあとを追ひ新右衞門にいろ〳〵といふ新右衞門夫婦涙くみてつれ行んといふわれもみるに不忍やらむといひしかうは承引なし太郎を叱て泣居たる太郎を抱て乳をひねらせなから寐かし附たりこれらの

ことい〻ろ〳〵と記せむにはこのほとのさま記すにいとまなしされ共かゝることはつまり人間世にあるうちの天然の所作事也とおもひて大に發明してこゝろやすし

○五日　曇　所々廻勤昨日御能拜見被仰付候御禮也○きのふはくにのふ寺參いたす○一昨夜は夜ふくるまて子供と母上うちよりいろ〳〵と物語して其序にのふ書をかけりわれこと〳〵くに讃を成したり書を催促して卽吟也朝顏のかた

朝顏もかくうつし書に千世を經てさかりひさしき花とこそみれ

富士と松原あるかた

富士の根をうつす千さとの水かゝみくまなくみゆる田子のうらなみ

竹のかた

くれ竹の千よをかさねて君のためおのかみさをゝつくさむとおもふ

かくしるしたる所へ俊藏罷出いろ〳〵申談いたす其内書出來たりとて出すなてし子のかた也よしといひさまに

うつくしきいろをみせたるなてし子はわか子のかける畫にそ有ける

としるすみな〳〵笑ふ母上の御樂しみいふへからすされと今より御わかれをおもひて樂しみ中にひそかに涙をおとす歡樂極りて哀情多しと古人のいふをけにもとおもふ也干ものにとくり一ツ出してわれ二ツのみたる殘をしま幷太郎のうは給たり子ともはくりを給させたりひるまは大越貞五郎來る文を論し詩を評して夕かたまて居るめしを出しわれは一合のみて字をかけり

○六日　晴　おくに緣談之事われ昔入魂なりし高山又藏忰と緣組之義申來篠山攝津守幷大工清兵衞世話也高二百石にゑ身上もよし申分なしされともむこ十九才といふ五ツ違ひあまりの事也よりて其旨色々申たれと强ゑのそみにて是非くれとの事也よりて昨日先方之舅姥をよひてみせたりむこはわか方へ登　城前に來るをとなしき人也才子にはあらす○のふ

くに佛參の歸り谷中の植木屋に小休したり用人其外共に上下十三人はかり也この植木屋のとなり名代のそはやにて料理をもよくすと也器物其外共美々たる事ゝ由さしみ煑肴等を出して二百疋也そはは上下たらふく給たりと也はなれさしきにて外人不來風流なる所ゝ由ならの辨當かりよりは至ゟ重寶也

○七日　晴　伊賀守殿ゟ參る大坂表ゝ義いろ〳〵相伺候○おくに緣談ゝ義篠山攝津守より再應談有之候間彌相談いたす積及挨拶候事○今夕おきつ市川ゟ參る同人十二日に歸候由に有之候おくに緣談はさゝ山嫡子表向ゝ媒人に相成候旨攝津守申聞候○今夕大坂より書狀來る

○八日　くもり　御佛參に付登　城○御兩親樣ゟゝ御書狀難有拜見先以倍御機嫌克恐悦ゝ至御坐候南都御引拂ゝ節は彼是と御疳積も御起被遊候處大坂へ御引移御住居も定り御安心被遊候ゟ御疳積も治り候とゝ御事さて〳〵恐悦ゝ至御坐候おさと其外より何等ゝ義も不申越候間さしてゝ御

212629

疳積には有之間敷候處かく御沙汰有之候は平日ゝ御愼御別段ゝ故御心も被爲附候御事に可有之候江戸へ御歸りに不相成候故御疳積ゝ御起も御尤に御座候得共乍去是は　上の御事其上少も願候ゟ被仰付候には無之候間無余義次第に御座候御疳積御起候得は下々殊ゝ外なる難義に相成大なる御不隱德と相成候間夫たけは其子孫へ必むくひ來候義に御座候處かくまてに御心被爲附候は恐悦ゝ至とことさらに感心申上候義に御座候新家事も御教ゝ趣相守候由にゟ先ッ此ほとはよろしき躰に御座候爲續度ものに御座候され共酒をのみ候ゟは必やふれ可申と奉存候私なと酒癖は無之候得共たれも知候通一テキものみ不申候義久々に御座候間何卒私歸府迄は禁酒ゝ義被仰付度ものに御座候母上より御狀御不快既に御快然とゝ御事恐悦ゝ至御座候御手當第一ゝ御事と奉存候御酒は多くは不被召上候樣に奉存候○おさとよりゝ書狀○太郎大坂へ參候義宜ケ間敷とゝ義に付母上の御爲を存候孝心ゝ存寄逐一尤ゝ論に候然ル處此ほとおくにも緣談極

かく母上の御事をしる置候處新右衛門來り涙くみて御とめ申其ことばに付市

三郎おくになといろいろと申上まいたゝ御うけこのきの御しきみゆるあまりの事也此次のたよりならすしては難定候

御かみ重くこまり被御成候はゝソカ伊賀守夫婦若林等之例もあれは

市三郎も九分通極候義に付大に御安心にておくには新右衞門市三郎は幸三郎に御まかせ今般御出立之積御了簡相定り申候例之御氣分故大に御決心にて御自身と專御したくありおくになと御笑ひ申上候位之御さわきに付更に御子細は無之候間もはや御案事は無之候○佐々木へ澤庵ぬかみそ可遣旨承知不自由之品は書付參り不申候間不相分候○大こし緣談之事少も存意無之候何之差支も無之候に付忠四郎申談取計可申候此事幸ひ忠四郎來る其事次に詳也

○九日　くもり　重陽之御祝義として登　城○おさと日記本多と女共相違之次第御尤也されば共奥之事故いつれとも勝手たるへしかたはつしとはいかなることかまくらをはつす女は以前も□ひ候ことありし也ふみはつして身上わるくならさる樣にいたすへししかしカツクリカヘシくしまきに准し候不束なるいやしけなる躰なと上下決而あるましき事故夫はおさとより急度世話すへし○なてしこ鹿のことに付うたおもしろしなにはの

母上御てい髪あらは御風流なるへきかいかゝ

俗地なる事は人々いふ事也土方八十郎御目付代として參る事に付御申越之趣御尤也○春日野の火のうたは前のうたよりよきかことし○わかれのうきうたまことに實情也夫に付はなしあり一昨日市三郎稽古より歸り母上に御行逢申上遙に御まち申上候而御同道申上坂みち等は御こしを押なといたし殊にこゝろをつくしたるよし也且市三郎母上の御出立をかなしみていろ〳〵と申上る故にけさも母上市三郎の顔をつく〳〵と御覽なからこれもにくゝはなきやつとの御意也市三郎御受にそれならは江戸に御のこりと申上たるにいや也おれは一おもひに左衞門と一所に行と之御事也市三郎の顔にくからすみえしは此一事なるへし○おさとの御つくりをなしたるさまを大越の母上御覽ありておさとのうつくしさ京人形のことしと仰られたるよし承りしかおさとの顔うつくしく候とも京人形のことしとはいさゝか過賞のことしいつくも親は有かたき事也○中條良藏方之卓之こと其外共具に承知追而何そ遣し可申候○河内のうた御感心之由此

男宅へは以前しは〳〵參候もの也風流なる刀や也此ほとも頻にうたをもち來る也○昨日も兩三日以前も忠四郎來るこれは大越縁段幷忠四郎身分等々事也縁談々義はもとより我等存寄なし我は忠四郎の申出をまち居たる也身分々義は忠四郎は此ほと御取箇々改方にゐは一人のきゝ物也御代官に人撰の風聞あれと夫らよりは今一段宜仕かたあるへしと々事にてなと世話いたすかと聞ゆる也貞五郎事は此節留役々事いまためくみ不申追ゐはと奉行もはなす也此ほと二人當分助にはもるゝなるへし

○九月十日　雨　桂城恒庵何々いちとか申候針醫の療用いたし遣したる所發明清眼に成歸俗いたし然ル處其もの藝州のものにて此度母對面に行故道中は我醫師に成つれくれ候樣と々事也今日あんま幷針等をさせこゝろみたるによほと上手にてあんまは幸悅大津なとよりは一段よし針は別段にすくれたり右にて本町々表店に居るといふ左もあるへし此ものはなしに九才の時サカマツケにて眼つふれ廿七歳にて明あきはしめて女のうつくしきかわかりたりと也はしめは上野其外へ行てよろこひしと也されと盲人の時と違ひくらやみに甚こまり且覺は甚敷わろくなりしといふ也今もめしを給るさまなと全に座頭のことし眼の下の皮をはさみとりしといふなれと少もあとみえす恒庵以前ゐは遙に上手になりしとみゆる也内弟子三四人あり本町石町邊にて一二を爭ふはやり醫也といふ也風邪の時は紫紋ちりめむのかい卷をきて調合場に出居といふ也○重陽々殘暑けしからす候みな單ものにて汗出る也五月中旬位のことし人々大に驚これ八月晦日八月中の節に成る故なるへし

○十一日　くもり　十日には新右衞門方々うなきふる舞ありて參る節句には幸三郎來る例のはなしにて四過まて居るわか兄弟の子供も末は他人のことくなりやと常にあやしむ也○母上少々御風邪にて御ねころひなからいろ〳〵と御はなし也われと市三郎と替る〳〵アンマをなし奉る○曉めさめて書物をよみ居たるに母上厠へ御出被成はや汝は起たりやと御尋

ありてほとなく御出わか床の中へ御ねころひにて頻に御はなし也暫ありてときをきけは七ツ也やゝねふくなりてこまりけれは母上の御そはへ打臥御はなしをなしなからいつしかと寢たり目さめてまた御物語いたすめさましを給り候へと申せしむかしおもひ出候

○十二日　雨　十日に新右衞門方へ行に兼ゐ太郎をもつれ來れとゑ事なれと雨ふりたれは少々風邪旁やめよといひけるに必行へしといふわれいふ相かこにてつれ行たけれとヂゝは右衞門方ゐ行ては新右衞門とねるといへは内々太郎より相カコにて行は斷也といひしと戯にいひたるに太郎殊ゑ外のこまりにて御ヂゝさま夫はうそ也とてわれに抱附てさわく也やう〳〵乳母のいふによりてカコにのせて行けり井上へ行やいなや奥へ行ておますにとり附新右衞門にとり附て大嬉ひ也此前おますわか方へ來り歸るときおますにとり附井上へ行かむとせしを乳母かやらさりけるにおます歸りてもこゝろかゝり也しによくも來りたりとて愛すること甚し歸りに臨みていろ〳〵いひて泊る故に汝は新右衞門の孫なれは大坂へはつれ行かすといへは大にこまりてそれはその時也とていろ〳〵といふも大笑也」母上は御不快にて御出なし○恒庵いふ一昨夜本郷丹後守錠御番のもの奥女部やへ切込女五人を切倒し其身も自殺したり恒庵行たれと女五人なから死果て中々療治ならすして歸りしと云也

○十三日　晴　けふ早ひるにておきつ　御城ゐ上る○市三郎養子相談破談に成おくに相談は相決來る廿日結納と成○市三郎養子相談に千三百石并千石ゑ方有之候旨申來る人はいろ〳〵なるもの也○新家御用多故にとけ〳〵と長座なとせしことなし小笠原十度の内新家は二度位來るこの頃又曉六時頃に歸りしことありといふ近頃の留役御用多のことわかつとめたるときと大にことなり心配なるもの也新家も曉なとに歸る御用はなきほとの役にいたし度候此上御用多ならは必からたにあたるへしとそはに

ておもふ也當人はさほとにもおもはぬか也されと早出之御用日なと度々不參之由に付近頃はよはくなりしかいかに

○十四日　くもり　おきつといろ〳〵とはなしをなしみるに同人はへヤ親其外之諸借金を引受て夫にひかるゝ故に人の半身上にてくらす躰也近頃は自分まかなひなるにいかにもくるしき躰也あつけものなとすといふ當人此上行先のことなと大に案していろ〳〵といふさまに可憐こと多く感すること多しわか子なからわか世話やくことならす此節は無理に人の養女となれるを後悔當惑すれといたしかたなしみなおきつ一人の身にあつまり難義となれりこれ可憐事也○上の御事を難有奉存女なから忠義のこゝろありていろ〳〵とおもふさま可感事也　上は十三歳の時より御そはに罷出たることなれは今に小兒のことく思召て被下物なとおさなしきものを被下よし也御戯にはコン〳〵とゝて被　召よし也御戯なから御手つから被下候おもチヤのことときもの一ッをわれに福分したり

○十五日　晴　十三日は晴又くもりて天氣たしかならす夜五時前後は晴たりひる後より新右衞門來りて松魚持參にて酒なと給くれ後まて遊居たり日くれて新家來るしはらく居て六半時に歸る○ひる後に前田夏かけ來る同人にはなむけのうたのかはりに唐帋半切に十二月故十二月のうたを乞是は屏風一双にするつもり也段々出立近寄てことの外に騷敷なりたりけふは六半時登　城にて御白書院にて　御目見御役所に之御暇被下入念候へと之　御意也御次におゐて拜領物被仰付候旨御老中方被仰達芙蓉之間におゐて金五枚時服貳御羽織被下之近親其外兩敬之人々來る○篠山攝津守產穢男子出生いたす七十近く成產穢也とて殊之外之自負也自負も可也自負せさるも可也○昨日はおくにしたくの事にゐ大丸買物其外之義に付おます晝後〻來り六半時歸宅笄前後のかんさしにて十二兩衣類にて十二兩かゝる惣入用百兩にてあけ候積俊藏殊之外世話する也俊藏諸買物之義に付此度之骨折不一方候其旨そめ參候はゝおさとより得と挨拶あるへ

し中々容易ゑ事にあらす候○おますに簞笥町のそはを爲給候此節麴町に同樣ゑものありされ共簞笥町のかたよし以前ゟ細くして湯をかけれはキレやすき躰やゝ山岡のそはに近し

○十六日　晴　昨今神田祭不相替にきやか也なら人共右におとろく可惜宅御用多にて殘らすみせかねたり○昨日大坂よりゑ書狀とゝく大越弁松村等へ夫々參り居たること故に直に遣し候○母上四五日以來御持病氣にて御平臥也御風のきみに御かん症のましる也人はみないはふといふ御暇の拜領物なと別ゐよからぬ也此節少も不被爲替つもりなれとさても子の身分にてはわかれを御をしみの御樣子みえて內々にて涙落る也御尤の御事也これは其ところをしるものならてははなしならす一日も長く御そはに居たき也醫師はかつらき也坂上といふ上手へもかけたれと同案也今春の御症にて至ゐ御輕しといふ也○きのふの朝五時ゑ御用召に付七時頃ゟ起てくらきに湯を遣ひたるに太郎敬次郎ともに起出てともにバヽア〳〵と呼なり湯とのにて

母上の御そはに半時も多く居たししかるに眞田信州堀田備中水野土佐なとまて悉ふるまいの招きいつれも一日ツゝかゝるよりて備中殿と淺野はかり外は斷るつもり也備中殿はわさ〳〵下屋敷被參佐々木循助なとも被招よし斷かぬる也

からすさへまた鳴かぬ間にとく起てハヽア〳〵となく呼子鳥なとおもひつゝけつゝ來りみれは母上の御前うしろに太郎敬次郎這入居て太郎は御祭のまねにて御夜具を足にてさし上る敬次郎は夜具の外へ出たりとて大に怒りニヒサンの三太郎〆といふなと大かしまし也され共母上には御喜ひの躰也きのふも豐太郎と太郎にて敬次郎をイジメたるに敬次郎ニケなから君子は危に近よらすといひて遠くへ行其上にて大聲にて惡口せしよし玄關ゑものなとみな〳〵大笑のよし也母上へ太郎なとなれ奉るさまなとそはにてみるはなか〳〵に涙也

○十七日　晴　御宮へ參拜例ゑ通也○新家のおつるいまた新家に逗留也先方のことを露いはす病氣とのみなれと實は無余義わけもあるか也禮后院內々聞たれと只病氣といふよしされ共先方も親類故山本よりわかり來るさまにては大意先方よからぬ躰也おつるは見あけたる利口もの也感心

せりこの一事にても新家よくつゝしまねはならぬ也○おさとの書狀佐々木の書面昨日遣し候御尤也買物ゑ義夫々へ申付候書添の本多へゑ返禮申越候通古梅園の墨と肴にてよろしかるへし着坂の上にてはあまり遲し着坂は十月十八日なるへし○おさと書狀ゑ内市三郎緣談ゑ事前の通也いまたきまらすされ共追ゟ多分はしめの忠四郎世話の方に定まるへし是は御目付の岸孫太夫等ゑ了簡也○幾之進忠四郎ゑ事おさと了簡尤と承候○客來のことあまり多くて日々食事いたすものなと多けれはなか〳〵になれて客の二人三人の日は手もち不沙汰にてさひしきかことき日もたまにはあり大笑也この度は別段なれは酒を出し菓子を出したゝは返さぬ樣にする也

○十八日　くもり　おさと書狀書添ゑ内大越ゑ事何も別段にはいたし不申候御丁寧に御申越ゑ義と存候○日記ゑ内健之丞ゑ長屋近きよし定ゟ太郎敬次郎と日々のけんくわなるへしと今よりおもふ也○廿日の月までもみしやとゑ事一向に月はみるひまなし二階へあかりたること田口加賀來候日大熊善太郎來候日なと今日までに兩三度に不過十五夜に庭を少々歩行せりひるは客夜は母上との御物語にて月は南都の事と物語たるはかり也喜三郎のはなしさもあるへし女共ならを思ひていろ〳〵はなしすと尤也九月四日の初鴈江戸にては兩三日（十日頃か）已前に聞たりされとも十日に新右衞門方ゑ馳走にかもを給たりわか耳遲かりしか古さとをしきりにうたはよし外二首もきこえたり○いこまねのうたを評したるにみつからはよきつもりのよしたれもおのれのうたをわからすとおもふものなしうたの議論日記中にあるも又よしわれみてもあやしくならぬはよきうたなるへし大坂の砂糖高直のよしさて〳〵おとろき入申候砂糖なと大坂こそはもとなるへけれしかるに直高にてならゟ高きよしは解せぬこと也江戸もこの頃は高くなりしよし也過日飯嶋の世話にて長崎調進の下砂糖を多く買たり至ゟよろし夫等は三匁也尤御拂もの故なるへし大坂の砂糖全奉行

所ゑ直段なるへし御代官にたのみ一箱も問屋にて買候方徳なるへし大坂
には毛虫なと多よし夫は聞およひたるシコウホウとかエンコウホウとか
いふものなるへし江戸にてはシコウホウはなし毛虫にエンコウホウとい
ふはありて是は男もいやかり嫌ふよしある人のいひしをきゝたることあ
りまことにやおほつかなきこと也○眞田の嫡子十五日に御城にて知ル人
に成十六七也とよきとり廻し也感心せり細川越中の嫡子是も丸く角はり
たることき顔の兒にて才子らしくみゆ父に似す例のおさとのはなしある
女に似たるなるへし今日不時御禮有定ゑ元服なるへしもし大判のくはり
あらは刀壹本買ふへくとおもふ也いまたしれす候○けさいろ〳〵のはな
しに太郎のいはひに御殿の伯母より紗綾の時服來り敬次郎の時は羅紗の
巾着來ると母上の仰らるゝを敬次郎御そはに聞居なからヘン巾着なとは
オラハ御免タトいひなから一寸舌を出したり○ある御旗本朝食事の時元
家來切こみたるにそはに脇差なく持たるはしを投付なから逃るゝところ

を爲手負られたり其家來は井戸にて此ほと吟味に成たりされはしはしも
脇差は手はなされぬこと油斷すへからすと物かたるうちにいつの間にか
太郎拔あしゝて來りソツといひてわか肩へ飛附たるにわか大に驚たるも
大笑也此節孫共のいたつら等先かくの如し
○九月十九日　晴　太郎事大坂へ參候はゝ母上の御なくさめ草有之間敷
との事にて新右衞門發意にてわれもともとより同意其こと申上勿論おさと
ゟ申越しける旨をも申上て漸御承知太郎は江戸へのこる積となれりされ
共きのふもいろ〳〵と仰られ一度は再度はと醫の御沙汰なりしかわれい
ふ母上の御慰に相成よしは新右衞門の申條われも同意也大義におゐて太
郎を召連行こと不相成候間御決心のかた可然旨申上○かこ其外共再ひ拂
物にいたす積申付たりしかるに今朝未明母上とわれと床のなかなからい
ろ〳〵と御物語申上居たるうちに早太郎起出たるを母上めされ候ゑ御フ
トコロに入られ汝は大坂へ行か江戸に居るかと御尋ありしに江戸に居て

母上の御そはもよけれと大坂へ行たしといふなせかくいふと仰らるれは先荷へもて遊ひものゝ大皷或は獅々なとやりたれは既にこと極たり今更はといふ故夫等之ものはみな江戸にて可買遣新しくなりてよからむと仰られたるにそれはいや也といふわれ脇ゟ太郎は江戸にのこすつもり也よりてもて遊ひものは可買遣殘りて母上を慰め奉れといひたるに母上の御蒲團へ顔をあて泣入て聲をも不立シク〳〵といふ也其さま實におもひ入たる躰に付彰常とわかれの時かれか心のさまを顯に太郎かなすかとおもふはかりにてわれ何分見るに不堪厠へ行て密になみたを拭ひ歸りみるにこゝにいたりて母上再ひ御こゝろ迷ひ汝は左衞門へ附やる也ナ泣そと御落涙なからに仰られ乳母は其躰をみて益なきことにこの御兒樣を御なかせなさる虫か出ますこゝにいらせらるゝナ此婆ゝかめしものきせ奉るへしといひて太郎を引起しこれも泣かぬはかりのさま也其序にくど〳〵といふを聞はこの頃ゟ太郎段々と家來共へ申付小なる植木鉢の類其外共みな荷造りさせたると也よりてわれいふかくも幼なからにこゝろある上は却ゟ太郎を召連行かたし實に母上の御なくさめとなるへし孫を召つるゝこと大義に於てならすと申切たり決心彌堅く取極たりされ共こゝにいたりて太郎のこと母上再ひ大に御うこきにて大坂へ被遣旨を仰出たりわれ御受を申上ず御斷を申たりされ共此躰にてはいか樣なるかしらすさても定まらぬ事也ひる後幸三郎來る右之趣を申聞たるにそはに太郎聞居て何ともいはすうつむきて涙をこほし居たり其躰をみて幸三郎も亦潛然たり母上ます〳〵御當惑われも大に困れり

○十九日　くもり　淺野へ立ふる舞にて參るいろ〳〵と馳走ありけふは珍書藉珍書畫古物等を多くみたり○一昨日ゟ昨日まて幸三郎方ゟ敬次郎爲暇乞參いろ〳〵のものをもらひ來る敬次郎幸三郎方へ行は幸三郎をヲトツサンと云勿論おそてをヲツカサンと云て乳をひねるいたるよしわか前にては幸三郎をオチサンといひ或は內藤サンなと云にいたる幼年より

性ははやいろ〳〵也され共此時よりして教れは十に六ッまては大に變すること養子に養父の風あるかことくよほと違ひはする也○一昨日幾之進來る五ッ前まてはなし歸りたりよめのこと存寄無之今一段貞五郎身分定あもらひ可申旨をも云存寄無之いつれともおさと了簡次第之旨同人に申遣したるよしを答ふ貞五郎の御役兩三年は間あるへきかことしあまり延はいたさすやいかに貞五郎おとなしき躰よきわかきもの也こゝのところいかゝなるものにや○出懸新家來る

○廿日　風雨　一昨日はひる前より小笠原幷直たね來り夕かた迄はなし居たり直たねは自作の刀數本もち來る同人傳書を作り其下書を以加筆なしくれよといふ故に昨曉よみ見たるに意はよし奥州ことはにてイヱ或は出出來等の違ひなとのかなあるか也され共豪傑の意大にみゆよりて其意を大になしてあしきは削りて數十ケ所直したり夕かたより大熊善太郎來り五過まて居る六半時頃ゟ根本善左衞門來り四ッ前まて居るいつれも料理を出す○昨日はおしけ歸れり是は兩三日前より來り居たる也同人の貧なるはなしいとあはれ也歸とき母上へも申上候ゟ金三百疋遣すこの度の出府は存寄ありて來る人ことに必菓子酒を出す也百日の間一日一兩ッゝ逢も難有事ならすや平日かくなしては間違也一句の詩一言のうたをも不詠書物も夜曉に目さむるとき起出てよむのみ朝より夜迄母上と御はなしのみをたのしみとする也月見前後は日々客三四人に減たるに御暇被下たるより客又夥なりたり三度ッゝめしをたく也ッンホの雇女よくはたらく也乳母二人幷おくにチウを飛歩行也この躰故女共朝早く起てからすのなきはしむるころに乳母共椽頰をふく也○今日おくに結納來る

○廿一日　快晴　朝母上の御寢所に行みるに太郎と敬次郎前後に御とこのなかへはゐり居てヲハアサンわか方に御向といへは又ひとりもしかいふよりて母上左右へ御くひを御廻しなさる也手前か方にはムカセヲとい

ひて御かたのところよりチヒサなる手を出して互にせり合ひ或は御ミヽ御コフを引はる其さわき云へからすしかるを母上殊ゝ外御喜也これにては
は決して太郎をつれ行かれぬ也

○廿二日　曇　十九日に淺野へ行たるに奥へ通したり奥にては老女ゝ取計也奥口といふかことき所にて老女刀を受取て刀かけへかけたり着坐茶たはこ盆出るやかて小ひろふたをわか脇へもち來れりこしも也これは懐中ものを出しおくためなるへししはしはなし中奥方被出かひとり也老女差添一通りはなしなとして居る淺野と二人ひなのことくに並ひ老女は次に侍坐也やかて次にそは女ひろふたをもち來りて平服して居るわれ一向氣かつかす暫ありて中書御肩衣をといふ故にその爲なるへしとこゝろ附て次にて白衣に成主人も同斷奥方は紫いろの衣類に着替緋の中かたのけたしなと着て出たり奥かたの躰至ゑうちバジミにてヤボならす全に中書と一對のひなのことしキリヤウはよほとよし鋏作の先妻に似て四五段も立

あかりたるなるへしいつくへ出しても立派なる奥さま實に淺野にまけすおとらすの女德ある躰也無間も銀の茶盆に堆黑の茶代ヒラ土ひん茶わん三ツのせたるをこしもともち出りて差置行たり奥かたみつから茶をくみてわれへくれたりいろ〳〵と入組たる身の上はなしなとある故に奥かたは或は一寸來り又は暫不來奥方附の女なるへし入側奥かたの來れるかたには別に二人ッヽ侍坐して居る也若とのも奥かた出ると無間も知ル人に成五ッはかりなるへし一時はかり過て吸物出る其時は奥かたもへも出る女中四五人出てとりはやすされ共至ゑ物靜にて奥かたへ向ひ時をり竊に物云ひ奥かたはこと〳〵に淺野問ひ淺野の一々に答ふるさま穩にしてよく和しこと〳〵に禮ありさても諸事かくありたしと其躰にひそかに感服せり所謂和にして不流とは淺野のさまなるへし酒を主人きらひなれと給らるヽ丈ほとよく給る躰奥かたは一滴も不飲又みたりに強ゆるなといふ馬鹿けたるいやしけなること更になく尤よし馬鹿强なとせすよく酒をほと

よくすゝむ客もこゝろよしやかて書畫宋本なと實に日本にての珍物出るかな澤文庫の印ある書或は一部にて百金に近きものなるへし宋本の漢書なと生れてはしめてみたり畫は不覺書には文徵明黄道周のかけものなとありきいつれも百金以上の品なるへし其内天海僧正と外に一ふく明人の書幷林則徐の書（この人は今のからにてイキリスヲ退ダル武人ノ學者也）なとありきしかるに右之四ふくは同しもの二ふくあるかことくおもひ驚てみるに二ふくッヽありあやしみて問ふに一ふくはみな奥かたか慰にうつしたるに幸によく似たれは戯にわれにみせたる也といふ也こゝにいたりてこれは〳〵といひて大に驚き且怪みて再ひみるに決而似せとはみえす驚歎いふへからすこれはかくうつす法ありと云也引うつしのことくなしたるもの也奇々怪々其絶妙いふへからぬ事也夫等のことにて夜四ッ時過に歸れり其時右之書は本書とうつしともに借用して歸り新右衞門其外の人々にみせたるにみなケシトンテ新右衞門なとはわれは已後手習は一字もせし女にかゝる人ありとはと

いひて發憤する迄に感したり今度抱の用人肇（ハシメ）といふものは書をよくし淺野の用人之世話にて抱たるものなれは尋みしに書をよくしうたすきにてたにさくのみことなるはみもしきゝもせしかかくからさまの書をよくするはしめての事也といひきはなし中書物を夫よこれよ〳〵とみたる故に混雜したるを奥かたみなみわけてかた附ル故にかなりに書目位はみわくること自由なるか或はかなりに詩作位はするを隱し居るかわれ奥さま御學文はいかにと問ひしに一字もよみしことなしと答たれとかくし居るなるへしわれあまりのこと故諺にいふ鬼の女房に鬼神かなるとはこのかたの御夫婦なるへしといひき世にめつらしき人もあるもの也としは二十四五位なるへし

○廿三日　風雨　廿日に例刻登　城いたし居候へと之事若年寄より達に付出る御老中御登　城後無間も　御前ゟ被召候このめし出しといふこと今度にて既に八度に及ふ故に御席之御樣子をも辨居れは例之所ゟ出たるに

これへ來れとゝ　御意に付一段すゝみて　御意等奉伺候處又こゝへはいり候へとゝ　御意に付いと〳〵無勿躰は奉存候得共　御意ゝ事故又一段すゝみたり古人のいふ天威顔をさらさる咫尺なるものにて御側近しといふも大かたなりやいかにもかしこきのかきり也夫にて暫ゝ間　御意相伺尚又申上旨なともありき其時わかことき輕き身分ゝものかく　上樣へ御側近きのかきりまて罷出へきとは實にはからぬこと也　上の御不ためなること露おもはす身を忘れ御奉公をすへしと難有おもひたり今まて　御前へ被召たることも多かけれとかく御そはへ進みたることはなし人もあるましとおもふ也難有御事也其御席ゝ御樣子のみは母上へ竊に御物語申上たるに頻に御なみたを御落しわか子かゝるへしとはいかなる難有御事なりや汝か遠國へ行をいやに思ふは勿躰なしとて殊に御喜ひ也かく近被召候事近頃ゝ御樣子ゝ由或人はいひき

○廿四日　晴　廿日におくにへ結納參りたる日はあやにくに風雨にて幾之進なとは不來新右衞門夫婦よめ幸三郎并坂本くま次郎野田源太夫等のみ來○太郎事是非大坂へ行へしとゝ事いか樣にしても不止よりて新右衞門夫婦より强ゐいろ〳〵申聞たれと只泣にシク〳〵と泣のみ新右衞門夫婦は殊に親みふかくとまりに行てはたかれねるといふ位故いろ〳〵と叱りもして迄いひたれときかすます〳〵泣也あまりの事其上母上みるに御忍ひかねにて彌われに添て上かたへ可被遣とゝ御決心四月には何事を置ても太郎に逢に行へしとゝ御意夫にて先治りたりされ共もとより小兒のいふことなれはとるに不足母上の思召を段々伺みたるにかれ小兒なからもいふことかくの如ししかるにわれもし江戸にて大病ならむにはよみちの障となるへし夫よりも汝に今引渡すかた安心せりとの御事也しからはとおもへと乍去母上のことといかにも御案事申上ルに付今一段相談ゝつもり也

○廿五日　くもり　廿一日には水野越前守殿位牌所英烈院と云脇坂中務大

輔殿大久保加賀守殿ゟ墓所ゟ參詣いたす英烈院殿は代々ゟ例にて下總國某の寺へ葬送の事故に江戸に墓なし靈位のみなれといにしへのことおもひ出て其人の御おもかけ髣髴（ホウホツ）たることくにておほえす頻に落涙せりおしき御人也英烈の二字は相當せし人也この人よからぬ人に被欺玉はすよき人を用ひ玉はゝ今も尙さかりなるへきにと殘念にもおもふ也夫ゟ眞田信州に面謁いたす同所にて料理なと出閑話數刻にて夜五時頃歸りたり手つから麻の差袴をくれたり歸宅せしに直胤參り居る傳書ゟ相談也○廿日にはおさとよりの書狀日記ともにとゝく御兩親樣御機嫌克おさとも無事ゟ由目出度候夏かけうたの事則日記を以たのみ遣し候われも先日餞別に十二月のうたをたのみ置たり牡丹もちのうた大わらひ也其余はさしてのことなし○循助にまち受の香の物可然候早々其手當あるへく候○八重嶋へは着ゟ節さらし其外遣し彼方ゟは立派なる時服を喜ひに差越候間挨拶に白羽二重遣し候よりて別には不遣つもり也

○廿六日　くもり　廿三日には退出ゟ根もとへ參るこゝにては一寸はしをとり候はかり也新右衞門方にて立ふる舞あり參る鐘三郎妻と知ル人に成よき女也鐘三郎ゟ祖父も來るよほとの通家也たはこ入に廿兩以上ゟ品あり同し着類を着たることをみたることなく妾を置といふにて其余をしるへし河村の隱居ゟ二三段立上りたる也武藝に出來さる藝なしと云眼さし凡ならぬ人也若き時甲州ゟ被遣たるかときゝたり鐘三郎養父も必來る積なりしか御番くり替り」これを御小納戸にてはカハ替被仰付といふ也」不來この隱居わかことを御ゼン〳〵といふ也今は新右衞門宅の庭なとよしいなりよほと立派にて矢數の奉納なと人々ありけふは新右衞門藤左衞門鐘三郎の弓術をみる新右衞門は繼上下に木綿の紋附藤左衞門は御召シマちりめむの着類にて新敷こん足袋鐘三郎は　御召御紋ゟ黑羽二重にかめのそきのあさきむくを着たり新右衞門はス足鐘三郎は白足袋也其さま新右衞門は藩中ゟことく藤左衞門は役者のことく鐘三郎は御小性のことし

みなよく中ル也十本にて新右衞門二本藤左衞門一本ヌケ鐘三郎は皆中也○酒中はなし家二人來るみふり聲色なといたししなからはなすみな女とも大によろこふ也土屋大膳も今日は來る四時前歸宅せり太郎もとまりおくには歸宅せり

○廿七日　晴　ある人の此節の行跡をみるにいかゝあるらむ同役のかたに御用向のより合也とて夜八時に歸りたるよししかるに宅より酒を船宿へ廻したるよしこの人常に最上の酒を樽さけにて一わたりの料理やなとの酒は不呑故に侍に申付て酒を爲廻たるかと聞ゆ此節から歎息せりわれ在府中かくの如し往々はいかゝあるへきかゝることある故にわか方へは來りて長坐をなしてとけ〳〵とはなしをなしたること百日中一度もありしか無覺束新右衞門方へはあまりの無沙汰にて同人よりいかにやとて尋たることなと有といふ也表向は立派にて着類等われなとは更に不及候

○九月廿八日　晴　廿四日に村田阿州へ參たるに同人大にこゝろよし中奥ともいふへき所に出迎たり夫ゟ居間へ通していろ〳〵と物語歸らむとせしに是非めし給候へとゝ事也老人殊に病中ゝ人のいふことなれは無余義しはしはなし居たり無程うなきを多くやかせてふるまひたり椎の木といふうなきやの魚故ことによしさらにもりしを田かくふるまふことくあつきと屢引替てくはせたり大に大食せり歸らむとせしに家來ゝもしたくといふされとも家來の辨當は跡部甲斐守方ゝ兼ゝ廻し置たる故に其こといひしにさらは近きわたり也とりよせよとの事にてしはし又はなしなしたり阿州大にこゝろよし其志少も不衰官年九十六なれと全は八十五也」われ病氣故に今の御足高のまゝ御鑓奉行を可願遣旨申ものもあれといや也夫は既に八十年來けかれたるとおもふことをせすしかるに老て家來に扶られなから登　城なといたし或は閑地にて御足高を貧るなと世にあれといと〳〵可耻事也故に今しはし養ひても家來に扶られて出るほとならは直に御役御免願ひて隱居する也けからはしき心にて上のろくを貧ることといか

にもいや也とおもひ切ていふさま實に別段也病氣も快けれと息きれする故いまた登　城せすと云也○廿二日には蜷川能州ゟ行たるに老人殊ゟ外なる悦也これも八十五也鳩の杖を人のくれたるとて夫をつきて庭へ出所々みする庭に四季さきのさくら盛にひらき居たり菊をかくつくることは植木やにても得ならすといふ高さ六七尺もあるへし大なる枝あること百も其余もあるへし叢生するものゝことしされと根は一本にて親指より大也枯葉なと少もみえす實に驚たり庭に亭ありこゝには佛書を見臺にのせ左右其外にマカ玉忌甕の類或は奇石なとこと〳〵くにならへありこの人の樂は終身これ也居間もこの亭もかけ物は觀音經也めつらしき佛像こと に多しこの人は健なれと小便近くなりてこまるといふ也登　城其外共に勝手次第と被仰付たれは五千石の御隱居さま也わか行たるを甚敷よろこひにていろ〳〵ならのはなし諸佛又はバケ物ゟことなと例ゟ通いふ也いとまを乞たるに御歸りを期すること老人いとかたしなといひて別れを惜み鳩の杖を突なから玄關迄出る故に式臺の上り下り六ケ敷とおもひて強ゐ差止て玄關上にて挨拶して歸ぬ夫ゟ所々廻り歸りみれは其以前に自書にてわか行向ひたるよろこひをいひ鮎なとくれたりもらひたる茶なと遣すこの人わか浪花へ行ををしむにや三日に一度位は使來る庭前の柿山莊のいも或はけいとうの花なといふ類也出立をいはひて道に縁ありやはな向に帶をくれたり岡本近江守わか歸るを待しよしなれと八十四にて去年捐館其余われを憐みおもふ老人は當時村田にこの蜷川也其上この人はいにしへより親敷にはあらす番頭のころ与風懇意になりし也顔もみすしてわれを憐む人諸侯にては松浦溪山榊原遠江守也水府の潛龍閣公なとは屢めされけるを失禮までに御斷申たるに度々難有御沙汰共あらせられこのたひも御冑（カフト）なと給はりたりいかなることにやかく人におもはるゝもあれは親かるへき筈の人のわれをよくも（脱アルカ）又多し○久須美佐渡守へ參る同人は子に扶られなから庭に出居たりしはしゝて歸り來りいろ〳〵とはなしす

る也これも息きれするといふ也八十一才なるへし氣分はたしかなれと漸庭を歩行する也三千石高にて御籏奉行也

○九月廿九日　晴　廿五日にはさくら侯より兼約にて同人〻中屋敷へ參るひる飯よりとの事故四頃より參るこれは同人の屋敷近頃八丁堀へ出來して十九日には同列〻内松平肥後守松平讃岐守を御招廿二日には堀田攝津守を御招ありてけふはわれと佐々木循助を御招ありし也且これは御餞別として宴玉はりし也我も循助もちと家からも高も前の人々には叶はさるかことし循助は御用有之八時頃に參るこれは御城より也所々に見星附人なと附置たるをは我知らす出かけに所々廻勤して芝〻方々參りたれは家來の少々混雜せしも又可笑彼宅へ參るや否直に侯被出候ゑわれを客坐にての取扱いかに斷候ゑも例〻ことく承知なし無余義其意にまかすしはらくありて菓子出る白かねの鉢に鬱つみあけたるもめさまし菓子盆はグリ塗也めつらしきもの也やかてひる飯出るこれは本膳にて備中殿接伴〻取扱也ひる

後快晴にていと過暖也これより庭に出て釣をせむとの御事也わか着替あらむことを備中殿被申候よりてわれいふ得てわれらか着類は半そてなといふものにてかゝる所にて下着を拔は甚敷こまりのもの也されは共といひなから次にて着替たるに白はさすかつきもあたらす家來狹箱よりいらさる着替を出したるに果して黄キ胴の半そてなとの衣類ありしも又大笑也こゝにて下着をぬきたるにはや侯はこもむの衣類羽織に替させられて出られたり夫〻侯に隨ひて所々庭を歩行す潮入にて泉水つき山はなれの亭等所々にあり築出したる釣所ありそこにてつりす釣は御上手なるへしなと侯笑なから申されたり果してつれす近習の人々コカヒをはりへさしくるゝなとちと氣のとく也漸にタホハセ一ッをつりたりその時循助も來りてつるにコレモ又同し侯と循助われには至ゑキレイなるこしかけいつる夫にこしをかけなからつれとさらにつれす果てはつりいとを引かけなとす人々笑ふ也夫〻馬場ある亭にて小休いたす探幽の武藏野の富士のかけ物

かけあり至ゐよしそこにてうす茶出るサトフ粟もり其外數品の銘酒出る菓子盆手塩さらなとみなギヤマン金イツカケ也しはらくいろ〳〵とウマキものなと給半分はヲトケましりのはなしなと侯いたされたりヤア左衞門そこはならにて古佛を得神代の矢の根とゝもに目貫にいたされたるかあれはふるきもの也西大寺のイフといふ古銅の紫色別段也よし野の奥に一本足の奇獸ありなとわかいふへきことをならへ立てのはなし也われ大に驚くしかるにまだはなし有ソコの御かけにていたく難義したること有其うらみをかたるへし夫まてに今一ツ粟もりをのみ候へなと被申われ不審のかきりにていかなることならむといさゝか恐たれと元來公のことには常に心をつくすことなれは氣遣はなけれといさゝか案し思ふ也循助ソバより其御うらみ伺たしなといひなから頭をかゝへて笑ふこれは廿二日に侯福山執政へ逢を申込參られたるに侯は溜つめ格なれは小書院へ通られ其次へ御奏者番の伊東播磨鳥居丹波とわれと居ていろ〳〵のならのはなししたるをフスマこしに侯のきかれたる也しかるに福山執政のわれに逢はるゝによりて前の二人は斷なりきそれもわれはしらす前の二人ゐ内伊東出られたるに直に退去にてわれ出たりしかるにいろ〳〵と御用向其外ゐ内話ありてわれ門外へ出たるにやかて登　城ゐ御太鼓なりき故に備中殿は一時はかり待られけれと氣のとくなからと申ことにて逢は斷になりて廿七日に可參とゐ事なるよし也これにて御老中の重きも御用向を御老中ゐ別段にさるゝもしるへしその事を侯の申されたる也循助いふ知りては左衞門かために侯のムタ足をサセらるゝ樣にはなりかたししかるに右ゐわけにて侯にムタ足させしといふも尤よし奇といふへしなといひて笑ふ其内又亭を替て前の池も馬場も不見亭へ侯案内ありそこにても菓子其外出るやかて家來出て前の二ケ所にて出たるものを重つめにいたしたるをもち出してけふの御みやけなれとはやく宅へ廻すよし申聞たりけふは侯のおもひ附にて昔寺社のことつとめたる家來をつれられたれはみな

こゝろやすき也そこにて書師或書家なと出る實に山海の美味夥出たれと覺へて歸りしものは松魚と鯛のつくりわけのさしみかもとねぎと麥との茶わむもりうづらやきこれらは大坂の御兩親にあけたらはいかに御よろこひなるへしなとおもひし也其余のことはみな知らすいつも侯の優待特禮にて醉をつくす故にこゝろして大醉せぬ樣に用心して歸りて四半時も家來共ゝ用向其外共きゝたるなれと乍去常の一合にては中々不濟よほとのみたり侯左衞門それにては死ぬ氣遣ひなしなと被申たりこれは朔日に侯に　御城にて懸御目侯節酒を近頃大に減して一合はかりの外はノメズと申たるに侯はこの酒料にてさまてに減する樣にては無間も死すへしなと申されたることあれは也歸りには中ゝ口にカコダイの上にわかカコをのせられて家來共並居これよりといふ故辭退に辭退をつくせとも申付也とてきかす故にそこよりカコに乘て歸りたり侯の丁寧にさるゝこと常にかくのことしけふのさまもおもふへしされ共これもみな　上の御めくみに

てかくの如く也ユメ失禮あるへからぬ事也

○晦日　文恭院樣　御靈前ゝ爲御暇乞參詣○去ル廿六日に大坂より〻書狀來る御兩親樣倍御機嫌克恐悅〻義おさとも五十日目にてのげろ〳〵丈夫〻趣相分る日記にも詳なることうたなと多し可笑ことの返事なとまておもしろく記したり○水野大監物居城燒失〻由承候間關善左衞門を以其樣子尋として菓子かはり墨なと遣し候處昨日返書來る其趣にては當六月廿四日臺所ゟ出火いかなる故歟屋根へ早く火廻り候ゆ燒防〻いたし方無之主從手をつかね候ゆ只あれよ〳〵といふのみにて諸道具類は不及申舊記其外迄無殘所燒失せしとの事也さて〳〵天譴可恐〻かきり也蜷川のはなしにては雷火也といふ也まことにや書狀には雷火とはなしされ共似たる事也○新家此節座敷をつくろひ茶坐敷并しらへ所等をこしらへる暇乞として參り大工〻來り居たるに大に驚申候ひそかに歎息せりよりてかくしるして遣す新家榮之助殿御在世〻節〻通御家法相守御位牌にはつかし

からさる樣可相守事

此ことをわするゝことのなかりせは行末なかく榮行らむ

右は嘉永四年九月大坂に出立ゑ前銕作心得として記し候壁へなりと御張出し可被下候午九月左衞門尉禮后院樣鷲香院樣銕作殿かくしるしたり○市三郎にも幸三郎宛にゑ壹通○おくにゝも段々としるし大意は夫を恐るゝこと主人のことくにし姑によくつかふること親よりも大切にし男子と相對して口をきくへからす參り候はゝ高山家の下女のこゝろへなるへし苦勞にくろう〳〵をつくさゝれは　上に對し親へ對し候不束ゑ罪亡へからさるよしをしるしたり○いろ〳〵の詰ものをなし母上御守り其外の御世話あり御佛前にていろ〳〵のことなされ居らせられたるに太郎參りて何卒彰常の位牌をもち行たしと願ふ其ことを聞もし見もしたるも涙を流さゝるものなし八才の兒なからよき心得也この志をよくそたてならはよき士となるへしされ共母上御いやかりにて乳母もいやかりてわれにとふ故に過去帳有其義に不及旨を申たりおもはぬことにて旅の情の外に大に腸をきらるゝことときおもひをなせり○父廟へ御暇乞として　御靈屋に參る

○十月朔日　在宿廿九日の夜に高山隼之助來るこれはわれ出立するによりてとくと目通したきとの事也つく〳〵とみるに鼻筋通りいろしろくよきわかもの也才氣もありて利口なる男也よき男故にさて〳〵當惑する也われはしめより斷におよひけるか强ゑといひて否の沙汰いはぬうちに姑來りてみむことを乞ひ其外いろ〳〵の手續ありて斷るに斷かぬる次第にいたれり今に至りていかむともすへき樣なしとしわかにてよき男はとしふけてあしき男に遙におとれりされ共隼之助いかにもジミにて御小性のことき人なれはいさゝかこゝにとりとこあり選ひてかゝるところへ与風したることより取組もあやしむへき事也隼之助に御右筆を願ひ候へと敎

遣したりおくに十四五より十七八までならは上もなき縁組也おくにカン氣大に治り別人のことしと母上の御沙汰故少々はよけれといかにも案事らるゝ也○昨日水野大監物の様子聞に遣したる返事來る是は大監物七月十四日に山かたへ着廿四日曉居城三ゝ丸の住居「是は本丸同前にいたし置候由」臺所ゟ出火いかなる故にや忽に屋根へ火移候故主從いかゝせむとおもふまに不殘燒失せしにて諸道具は不及申舊記諸書物迄不殘燒失せしとゝ事也○蜷川能登守はなしにては雷火也といふ也いかにや矢部駿州ゝ忌日七月廿四日也同日なるも不思義といふへし世上にては廿二日正忌日にて鳥居一件必廿二日也といふに廿四日なるも怪といふへし○出立前に井上内藤根本野田へ爲暇乞太郎敬次郎を遣すいつ方にも一兩夜ツゝ居る人々いろ〳〵のものをくるゝ御のふ方にては是非共暇乞として上り吳候樣と申越故遣す一夜止宿ウハ共をも附遣し候歸りてみれはいろ〳〵のものをくれ御年寄表遣ひ頭其外より御もチヤ等くれたり夥事也嶋澤といふ御右筆頭は殊に太郎を愛して八丈縞一反くれたり尤兩人ゟとてくれたり右ゝ人ゟは今日うなき其外を謝として遣す御年寄ゝつめ所にて菓子なとをくれて姉ケ小路より早く歸りて御小納戸に御なり候へなといひしよし太郎かたる此女無如才人とみゆ御とき坊主案内にて所々拜見いたすいとかしこき御所をも上りて拜見せしよし例ゝ敬次郎故兄サンコンナところへ上りて叱られはスマシヤといふと太郎答にあの坊サンか案内する故來しも也わるくは坊サンかシバラルゝなるへしといふみなの女中大に笑ひしよし敬次郎は御障子を開川路敬次郎也とてリキミたるをみな笑ひたるよし也神さまの御揚弓のさまなと拜見せしか也おのふことの外の難有かりにて内々書狀をこしたりそはあらましなれと太郎等かはなしとウハ等か傳聞を以記す必間違あるへし○明日出立いたす積なるに母上の御不快も既に御こゝろよく四五日以前より御とこ上りきのふ御さかやきのこと御沙汰ありけれと御とめ申置たるといふ位のこと也天氣の都合もよかるへし

とおもはる○この度はいとま乞として來る人々も何もかもならの三増倍なるへし一昨日も芙蓉の間の人々其外追々來りて藤川彌次郎右衞門來りたるに逢ことならす中川飛驒守は少々談ゑ品ありて來りたるに忽に出火はしめよりうちませにて麹町三丁目といふこと夫登　城といふことにて客もかけ出すわけなるに存外赤坂也きそれにて客のへりたるも大笑也可憐は小笠原太左衞門也日ことに來れ共閑話することならす七十の老翁涙くみて居る也河内忠右衞門なとわか次へ來りて强ゐ目通を願ふこれ又同しけふは夜通しなるへし曉より起て髪結てさわく也太郎人情ある兒なれと八才故也敬次郎と道中のまねして遊ひ居る也あしたよりはシタニ〳〵也とて大にさわく也

校訂者曰　原本ニ拾月二日以下ノ記事ヲ欠ク按スルニ散逸シタルモノナラン

房總海岸巡見日誌

（嘉永六年）

○六月廿二日　晴　本多越中守殿海岸見分に付差添差遣され候に付六半時出立にゐ品川ゑ參る着服野羽織いか袴也御殿山御見分夫〻御同道にゐ海岸御覽有之候晝九ツ時より所々相廻りいか計歟くるしからむとおもひたるにさほとにはなし人は氣によるものなるへしされ共汗如泉○天文方〻望遠鏡來る重くして用ひかたし直に相歸す○此度は百姓ゑ難義ならさる樣にと越中守殿ゑ外は杖拂さらになし

○廿三日　晴　羽田大筒場へ參り夫〻羽田辨天ゑ參同所より船にて寄洲見分いたし燈明臺へ上り再ひ羽田へ歸六鄕をわたり池田新田海岸へ參るくさいきれ甚敷沙如火也あつさいふへからす池田新田太郎左衞門といふ

豪家へ小休いたす越中守殿御家來迄左衞門尉家來一同御勘定方御右筆方御目付其外不殘小休いたすいつれも二間三間宛立派なる坐敷をかしたり樽次蜂藏の大盃其外水鳥記等所藏也いにしへよりの豪家とみえたり水鳥は水はゝ鳥は酉にて酒の記なるへし水鳥記は成嶋司直也

○廿四日　晴　拂曉に川崎宿出立いたしかな川程ケ谷を經て程ケ谷中程より左へ曲りてホンモク村にいたる漁業專にてよき村也八王子山十二天のはなといふ所等を見分江戸近邊にて第一のけしきなるへし常ならは詩歌の料ともなるへきを只々岸の樣子海の淺深大筒ゑことのみ也可歎昨日迄江戸出立の朝より少々腹痛也しか今日は全によろし八王子山には今に細川陣營有いかにも麁末の極也越中守殿殊ゑ外御感心也我申上るは亂世ならすとも武の忘るへからさること如此かゝる昇平にこのまうけある驚へしと申たり今日は本牧村千藏寺ゐ止宿湯殿なし庭に石敷たる所にて行水也越中守殿御旅宿には湯殿有新に造たるもの也とて御同人民力を勞すへからす兼ゐの達しの定と相違せりとて以ゑ外ゑ御沙汰也難有事也

此寺にゐ行水たらひを借うにたるに字をたる多書たるをかしたり子時喜ゝ信ゝとよめたり

○廿五日　晴　本牧のはな出立いたし候ゐ杉田といふ梅花の名所にゐ小休いたし夫々金澤へ參り海へつくり出しに仕たる千世もとといふ旅店に止宿江戸の人金澤を上もなきことにいふなれと極狹小にてとるにたらさる所也大和其外ゑ名所に相合候ゐは箱庭のことし

○廿六日　晴　うら賀近に相成山水殊ゑ外によろしく海しらぬものなとめつらしかること甚し

○廿七日　晴　猿島といふ海上十八丁はかりの島へ渡海いたし御臺場見分ゑ上發砲等ゑ樣子一覽いたしうら賀ゐ參る同所殊ゑ外よろしき場所にて江戸の如し此節少もかこには乘不申候ゐ步行也からたの健のみにあらす修行の爲也少も暑を恐るゝことなし

○廿八日　晴　六半時早めゑ出宅に松平誠丸家來共ゑ發砲一覽いたすう

ら賀與力同心ゟ西洋流ゟ砲術一覽船打迄もよく出來申候晨風丸と申ハッテイラ風の船にゐホンヘンの早うちよき手際也○戸川中書脚氣不宜其上吐血也この人難得人物に付左衞門尉殊ゟ外に心配いたす兩三日ゟ樣子にゐ歸府なるへし

校訂者曰　本多忠德一行ノ歸府シタルハ七月十六日ナルモ台本ニハ六月廿九日以下ノ記事ヲ欠ケリ或ハ散逸シタル歟

長崎日記

○嘉永五丑年（六カ）十月廿九日　晴　四ッ時自紋ふくさ横麻上下にて登　城御老若へ御暇乞申上る○御前に被　召候ゐ筒井肥前守左衞門尉荒尾土佐守古賀金一郎一同へ御懇ゟ御沙汰共難有御事也○御用部屋ゐ御呼出にゐ御老中一同ゟ今般ゟ御用に付品々被仰含ゟ品有之候若年寄の御部屋ゐも罷出候これ別段ゟ御用故なるへし御用多に付御暇廻勤御用捨也夕暮に歸宅也親族其外暇乞として來る所々ゟ自筆ゟ書狀添候ゐ餞別來る溜詰其外芙蓉ゟ間ゟ御役人方ゐは自筆にて返事遣し候なら人より被賴候額字御用多にゐ認不申候間認遣し候醫師より指物をたのみたれは臨戰活人としるし遣し候○水戸先中納言殿より筒井肥前幷自分ゟ分共藤田東湖を以御藥被

下候其御つゝみかみに朱を以御自書にて乍麁製道中備に遣し候
我國の千島のはてはえそしらぬさりとてよそに君はとらすな
川路との水隱と被遊たり筒井ゑ方も同し御認ふりにて
ことわりや七十に余る齡もてよを長崎に君はたゝなむ
と有右ゑ御返しを
はてしらぬ君のめくみよえそしらぬ千嶋のかすはよみつくすとも
誰余所にとらすへきやは我國の千嶋と君か敎仰きて
としるし奉り候或御人より白かね作ゑ太刀御貸被成候荒井甚之丞を以御下也
○晦日　晴　左衞門尉五ッ時筒井肥前守四ッ時荒尾土佐守八ッ時ゑ出宅
也板橋宿にて小休いたす親屬朋友其外大勢來る一通り挨拶いたし直に出
立也馬ゑ師坐光寺金次郎前田夏かけ等も參り出入町人共大勢送りとして
來る蕨宿にて晝休いたし大宮に止宿いたす御勘定奉行は殊ゑ外なる御威
光也よりて供ゑ面々ゆすり等いたし候ゑは不相成候間近邊見廻りゑ八州
廻りへ申付候ゑ無遠慮召捕候樣申付候道中過貫目なき樣嚴敷申付たれは
貫目改所にゑかけ改たるに五人五分ゑ減也宿方ゑもの共嚴重なりとて禮
を申出る
○朔日（十一月）　晴　大にさむし往來の打水氷たり四十度位なるへし例ゑ通歩行
也熊谷土手を一建場のりたる計其余は不殘歩行也
○二日　晴　四十四度のさむさ也道にそゝきたる水は氷たり○今日は熊
谷を出て本庄宿にいたり夫よりくらかのに止宿也○安井九十九親のかた
へ立入濟て安中の領分通行屋敷立入も叶ひたれは今日親へ逢たき旨にて
參る悅て涙を流して行たりこの躰ならはかれ取締るへし○本庄宿は去々
年太郎と同道にて晝休したる時雪隱に鎖おろし有を太郎見て牢かと問た
り其頃におもへは今は物々敷成たりけふも亦右ゑ本陣にゑ太郎事をおも
ひ出たり八州廻り追々出て案内いたす百姓共百姓らかいかなる貴人かと

おもふ八州廻り土下坐して奴僕如なるに大に驚くけしき也御勘定奉行の旅行は御威光遠國奉行なとゝは夥相違也

寒衾難睡欲三更。遙報盲僧叫賣聲。心頭陸續千般事。渾是攘夷憤嘆情。

○三日　晴　松井田宿近くなりて時雨のけしき也妙義山のけしき尤よろし碓氷の御關所前の建場にて一昨年太郎慶（マヽ）次郎か神田祭の出し又は牛の眞ねしていさゝかも旅こゝろなかりことなと申出（思カ）たり（し脱カ）○安井九十九は願ゝ上板くら家の親のもとへ爲機嫌聞昨夜より參たり元來九十九は子細有て安中領は往來ならす其上父御關所の番頭なれはいかむともなすへき樣なしよりて板くらいよへ直談いたし其外羽倉外記より申旨も有ゝ三屋敷領分共勝手次第立入被差免たるによりて昨夜より親ゝ方ゝ參たる也再生のことく也とて親子手に手をとりかはし一時はかり泣たりとの事也九十九親も今夕參りたり父は中村平藏と申たり立派なる男也

○四日　晴　坂本より碓氷峠を越て望月宿にいたり止宿途中日くれかゝりたれは如飛歩行したるに案内ゝ手代坂みちにて息切れて途中にへたはりたり道中師より駕籠に不乘日々歩行もしやかこ遲く候はゝ陸尺引替可申哉ゝ旨伺出るも大笑也右ゝ通健なるも平日夜ル々馬場ゝ出甲冑歩行する故也新右衞門なと學ときは老ゐ不衰と申古人ゝ教御修行あるへしこの六月已來氣根からたも四五段宜相成申候不思義也○碓氷峠には白鹿居候ゐ八州廻り渡邊園十郎は見受候事有之候由同人申聞候間心附ケ候得共見受不申候碓氷峠よりは雪有之候得共少々に御座候さむさは四十一度にて溝まて白晝も氷はり居申候

山風に紅匂ふ浪たちて朝日かゝやく峯の白雪

すゝみ行みちはかく也きのふみし高根の雪をふもとちにして

坂本のさとにあふきし一村のしくれはみねの雪にそ有ける

しかの山梅さくらちるころこゆるかとまたはつかなる信濃路の雪

埋火のもとのさむさにくらふれはなか〳〵やすき雪の山ふみ

○五日　六時望月を出立長くほにて晝休いたすこの邊より段々さむく和田にいたりては三十二度のさむさにて山へ登るほと大吹雪と成峠へ行まての辛苦大かたならす笠の紐みな氷たりされ共山へ登る故汗出るはかり也太郎幷市三郎啓次郎なとよく聞候へ當年六月より七月へかけ海岸のくるしみ其あつさいふへからす十一月より十二月へかけ寒中旅行さむさまたいふへからすされと暑はあつさの稽古寒はさむさの稽古とおもへは暑寒共にかこに乘るは宿入位のこと也かく修行する祖父父をもちなから其身は十分ゝ修行せすよき所へ養子にやりもらひたく或は五百石を寢なから取ゝ類よく心得されははちあたりて一生涯人の上に立ことはならぬ也わか子孫たるものわれへ孝行は斷也　公儀ゟ御奉公の爲修行して文武の達人となるへし

○六日　拂曉の出立也塩尻峠より諏訪の湖を見おろしたる晴雪のけしき別段也洗馬よりくもりて追々微雪と成本山迄行たるに木曾に入たるしるしみえて一望みな積雪也其けしき奇々妙々中々筆にとり詞に述へきにあらす只御用中故此山水に酒なきをうらみとす今日も多分は歩行也此節健なること別段也晝飯五椀余を給て密に

飯鉢の掃除に來たか信濃ものいやまたござる江戸の御奉行右ゝ通おもひつゝけ候ゟ獨にて笑申候

○七日　晴　鳥居峠雪二尺計もあるへし曉七ツ半時出立にてそこを過て福嶋の御關所寐さめのさとかけはしの舊跡うら嶋の古跡等をみて須原宿に止宿也今日十一里はかりゝ所御關所乘輿其外惣歩行也晝飯夥給候ゟ寢さめにて蕎麥一重箱一さら中山の建場にてわらひもち十須原にて夜食三盃也はらのへること夥故也道中師より足を遲くいたし呉且かこに多のりくれ不申候ゟは棒頭ゝ家業立兼候由願出候大笑也今日のけしき木曾中第一の絶景はつかにのこる紅葉の碧の淵に臨める千態万狀の岩ほ雪にて玉をみかきたるかことき中間まてもみな賞歎せぬはなし

あつふすまかけても寒きおもひよりなか〳〵やすき雪の山路

松の火をふりてらし行山路のみねよりしらむ雪の曙

○八日　曇　曉七半時出立にて妻籠にて中飯いたし七ッ半時中津川宿へ止宿也○道中師共達ゟ申に付晝前三里晝後三里歩行其余は乘輿也○中津川の宿と云は木曾山御用ゟ節十一日止宿いたし其後も三日止宿いたしたるところ也右ゟ譯を以本陣より魚一籠出す名護屋より三十里はかり取よせたるものなるへし目録其外遣す高きさかな也其上麻上下をも遣し候此邊肴なとは有ましとおもひたるにゑひなと如生江戸にては見たることも（脱アルカ）大サ也○此度の雇頭取締別段に付惣中ゟ金三百疋雇頭ゟ百疋遣し候處右ゟ禮としてうなきをくれたり是亦目を驚せり家來へもくれたれは組頭其外ゟ分チ遣し候

○九日　終日雨　七ッ半時中津川宿出立いたし大くてにて中食いたし六時前みたけに止宿也○五十度ゟ寒氣也（暮時）○けふは終日輿中にて退屈かきりなし久々にて詩を作たれとまとまらす追ゟつくり改候積先しるし置

去山纔十里。驚看換乾坤。雪意知何處。細雨似迎春。

渺茫如望海。雲霧暗山間。驚飈巧揮筆。奇峯現半顏。

棧道雪堆三百里。巫山巫峽寫來眞。笑言兼盡勝區妙。何缺一樽軟脚春。（餘旅中禁酒故云）

道繞深潭還繞嶺。新看步々怪天工。休言泉石多清興。余是官途奇險中。（木曾道中）

竹輿三尺室。覆窓油幕中。簡書娛僅在。山水興全空。泥脚辛艱僕。桐爐困睡翁。

路遙四千里。幾度遇斯窮。（旅中遇雨）

辱恩三大尹。難報一衰翁。關係寰區外。定謨方寸中。誰言虜情猾。我賴國威雄。丹心拂囊底。願盡箇微忠。（偶成）

淨々赤身一片筵。褌衣脫去不知寒。喫烟常臭龍王草。採骰曾登鼎將壇。集散如雲名稱實。怒嬉在醉酒爲餐。家宏五十三次驛。笑看行路世人難。（雲助　かく申たれと詩にならす）

折節十三峠にかゝりけれは

數のみにみるへきけしきなかりけりわかからうたに似たる山みち

とみつから惡口を申たり

かこのうちをふみよむ窓にけふはしてうたからうたにうさ忘れけり

うきといふうき世の中にうきたひのうきかなかにも雨そうかりき

うまやちにきつやとみれははるけくてみわたしかすむ野路の松原

虜艦航來款瓊浦。星晨踏破雪堆岑。休嗤日々尋鞋杖。暗學陶翁百甕心。

○十日　くもり夕雨　七ッ半時みたけ出立鵜沼にて晝休いたし加納へ止宿○加納の本陣は太郎か去々年休にゑ敬次郎と申爭婆々に敎られたる立派なる本陣なり笠松の御代官容躰聞として出る

いふき根の雪吹おろす夕かせに衣手さむしかゝみのゝ原

かゝみのにいさこと問はむうつし置し昔のすかたありやなしやと

怪々知何物。非翁必少年。叱人々不恐。々々亦依然（杖拂）

○十一日　晴　昨夜大坂より長崎の魯西亞船退帆いたし候旨爲心得申參るいかにも不審され共屆之趣難捨置四時過より寄合いたし候旨筒井荒尾方ゑ急便にて申遣す不取敢明日出立延引之旨相觸るゝ八時急御用狀江戸より來る同事に付伊勢守殿より長崎ゑ可參旨之御差圖申來る御尤なる御趣意さもあるへし御差圖可承以前より左こそとおもひ合せ候○七時筒井肥前守來る同人七十六にて健にはなしの約なるに氣力もおもはれて一同驚きぬ

喜のもしをまとかに玉（タマ）の浦めつらしき春を迎ませ君

峠の雪をふみわけて歩行してみたるに氷りてすへり歩行なりかねたるなと申たり雪中の歩行あまり也とて笑ぬうたは歳暮に可遣顏をみなから胸にうかひたるをしるす（文字）（長崎のこと也）

○十二日　くもり　晝八半時頃までに御目付方一同到着いたす右に付左衞門尉宅ゑ一同寄合いたす江戸表御差圖之趣一同御尤に敬伏候ゑ長崎ゑ出立いたす積卽刻左衞門尉は加納を出立河渡へ止宿也○けふ承候

品川の突出いやな客を待陰陽石へ正三位有功

天の川ふたつの星の地におちて又雨と成雲と成らむ
二首共おもしろく承候ゟ御慰にしるし候
○十三日　晴折々しくれ　河渡を六時前に出立いたし候ゟ垂井にて晝休八半時過柏原へ止宿此さとの前今須との境所謂ねものかたりの里也
○十四日　晴　柏原より高みやにゟ晝休武佐に止宿也
○十一月十五日　夕かたより雨　草津より大津にいたり止宿○草津宿にならば長吏共罷出候をはしめにて瀬多のはしの邊にて花井隆助幷喜三郎等參りたり折節予も歩行してけれは行逢たり喜三郎其外道路に平服して泣々に御機嫌よう〳〵といふ故に予も亦あはれに成たり寶藏院の後見滿田權平盲人春悅事土佐都其外は一旦大津にまち居たりしか予加納に逗留のよしを聞て引取たりとて所々より之遣ひ物を隆助取次候ゟ差出候土佐都はわか遣し候金子にて官衣を着する樣になりたり右をみせたしとてもち來たるに滯留也と聞て力おとして奈良へ歸りたると也所司代幷淺野中書

にゟは待居られたるに上京せぬとて所司代よりは三木新藏御使にて菓子うなき等被下仰下さるゝ旨も有新藏は御先代中務大輔殿之頃より機密に預りたる相談をもなしたるもの故其ことおもひ出て先ツ胸塞りて御恩を申出たる事也其外御代官或は横田源七之類まて追々來り其混雜いふへからす笹屋太郎兵衞若狹や八兵衞等來るいつれもへ金子其外夫々相應之挨拶いたすなら人はみな頻に泣故に家來順作等まてみなあはれかり色々はなしの内尤かなしきは貞助次男也わか此節大坂に參り候由及承自分之殿さま御出也とて日々待廻らぬ舌にていろ〳〵と申候由聞もの涙さかさぬはなしと也
○十六日　晴又くもり　曉に大津を出てふしみにて晝休いたしひらかたへ止宿也○同所に狹川常三郎和田榮助岩村榮三郎來りて菓子なとくれ佐々木か馬にて出火之節罷出候由之はなし等承候○御城代より上田角右衞門御使にゟ敷皮其外被下之尼崎又右衞門なとよりも給物くれたり此節目

ろく存外に出申候しかし菓子うなき鮨等給物にありあまり候いかなる福分にや大坂町奉行ゟ御勘定奉行に成再ひ大坂ゟ參たるものなしとてとり〳〵の評判也とそけふもふしみ宿なとゟ取扱大坂ならゟ奉行ゟ節とは別段也與力共機嫌聞に出町代ゟ如きもの麻上下にゟ先立いたし其外十手をさし一刀なるもの二人先立火ゟ用心を呼歩行也ひらかたへ着いたし候處御城代より御直書被下品々拜戴物いたす殊ゟ外に御待被成たるに廻り不申とゟ義也上田角右衞門は及老年今世の面談無覺束かたみとおもひくれ候へとて加州勝國最上ゟ出來ゟ脇差をくれたり返禮に當惑せり甲冑製作方ゟ義度々申付たるならの穢多伊兵衞は代人を以革製の着込一ッくれたり同人ゟ徒具足五領中間具足十領申付遣候かゝることにて昨日より着候と湯もめしも容易にはなりかね候

○十七日　晴　十一月十一日附ゟ御用狀昨夜四ッ時到來也もちの木坂上屋敷家作共差上候ゟ小石川御門前新見豐前守屋敷家作共被下候旨芙蓉ゟ間におゐて名代河内守ゟ和泉守殿仰を傳られ候旨申來難有御事也扨又先先代新見伊賀守近藤遠江守ゟ屋敷拜領ゟ節ゟ事なとおもひ出候ゟは不相成は新見は懇意ゟ人に付別ゟ氣ゟ毒也別段ゟ繕金等差遣不申候ゟは不相成哉と委細は新右衞門方ゟ申遣候積せめて万分一ゟ罪ほろほしなるへきかさて〳〵歎息也おさと日記新右衞門ゟ書狀相屆夫々承知おさとの日記乍例書かくかことし右ゟ内母上ゟ御不快よほと御よろしきは何よりゟ御事也則御直書被下御健ゟ御樣子安心せりさて引移に付ゟは新右衞門其外民藏俊藏等ゟ骨折おさとゟ心配等察入申候よく養ひ候ゟ不快少にいたし何卒母上ゟ御世話賴入候

○十一月十八日　晴　昨日は牧方（枚カ）よりもり口ゟ出大坂京橋口より東御役所下天神橋通りより尼ケ崎ゟ參神崎にゟ晝休西宮に止宿也西宮よき所也二千石に足らぬ村也家數四千軒有と云酒を江戸へ出すこと十万四千九百樽也其内よき酒を第一猿（サル）わかと云其次正宗也いつれゟ家にても勝手に銘

をいふ故に正宗といふ酒に直段數品有平均二十樽十六七兩ゟもの也と云也けふ西宮より兵庫に至る此所大坂のことし船の入津大坂よりも多と云繁昌目を驚せり西宮より茨住吉岩屋村ゟ内地内といふ所にて小休いたし兵庫にいたる以上五里兵庫より羽箒一谷垂海の小休以上四里半にて大藏谷に止宿播州也羽箒より一ノ谷ゟ間敦盛の墓有須磨浦にはいにしへのなこりにて家々にてすたれをかくる也けふのみち生田森生田社其外舞子濱等いつれもよきけしき也大藏谷といふは則あかしの浦也京都なとより來りて見たらはめつらしかるへけれと舞子の濱の松林ゟ外はいつ方にても有けしき也乍去としを經て山と水とにあきぬれと猶めつらしき須磨あかしかな

小林金左衞門元養子當時川上金五郎之手代桑名佳十郎附添播磨境迄來る

○源氏又は松風村雨の舊蹟有後來は里見八犬傳の舊跡も有なるへし○けふ兵庫にて大坂與力共鯛とハモをくれたりみな生キ居たり須磨浦にてタコを大なる桶に入有みな達者に生たりいろひきかへるのことくさて〳〵ブキビなるもの也

○十九日　曉雨午後より快晴　今度の旅行も天氣都合殊によろし明石を拂曉に出て加古川をわたり直に晝休則加古川村也よき本陣也大坂を越候ゟは本陣みな居間十疊也次其外も廣し建場にも本陣のことき所有夫より姫路にいたり止宿姫路の天守臺は遠く二里外豆崎といふ建場也より雲にそひえてみゆ城下よろし三十万石以上ゟ物成ならては持れぬなるへし見物ゟ老若夥し家老番頭奏者番といふものの路上に平服せり其外町年寄惣年寄なといふもの諸役人多くいつる家老出れは下乘して挨拶也かく手重なる取扱は御勘定奉行故なるへし

○廿日　曉に姫路を出て三里はかり歩行したるに片嶋といふ所の前より雨と成たり同所にて晝休いたす片嶋と云は脇坂淡路守領分也火消役騎馬にてかためたる位に付至ゟ丁寧也所々城下みな火消の固同し領主より料理出ねり羊羹一箱を贈られたり今度の旅行は長崎奉行受用いたし候例有之候分は伺濟

にて受用いたす右に付キウヒ其外羊羹等差支なし折々酒をくるゝ所有上下禁酒例ゑ通なれは簑(箕)作玄圃(阮甫)又は雇頭本陣ゑ類へ遣す也三石といふ所に止宿いたす山家也

○廿一日　晴　折々時雨此節五十五六度より寒きことなし　曉三石を出立して片上(潟かとおもはる)にて晝休いたす　そこより歩行していんへ村　風ところにて段よかるへし

インへは忌瓶にて祭器也今土中ゟ出るものこれ也

三里はかりの入海を庭のことくなしたるところにて景ことによろし箱根の湖水に似て今一段よかるへし

にいたる所謂備前燒をつくる所也手塩十人前三拾二文より六十四文位なるも有といふ也そこよりかしと村といふ所を經て堤上を行たるに芝原廣くつる多く群居たりそこに入江のことときもの有小なる湖水かといふも有われいふけふは吉井川を渡ときゝつ吉井川には昔熊澤了介奇絶の堰をつくりて水を引數万石の新開を造り後世迄水旱の患なしと聞もし其堰の上にはあらすや地勢さこそとはからるれと申たり頓て七八丁はかり行たるに果して大なる堰を見たり堰を石にて五丁はかりの長さにつくり水を引分て余りを落したる工夫別段也土人に問に不及必これ也とて手を拍て感したり又太郎より案内ゑ庄家に問ふに了介の工夫に出しといふことまことに然りされ共其頃水理のことに長したる津田左源太といふ郡方ゑもの有それか普請備前一國中に往々存せり凡人の及へきにあらすこれも左源太かつくりたるかと土人は申也といひぬ左源太のことしる人なきは了介の名高きに壓倒せられしなるへしそこより四里はかり行て岡山にいたる松平くらの頭三十五万石の城下也城は往來よりよくみゆやくら天守等大造なるもの也町もよろし大坂のことしそこにいたりて止宿也

○廿二日　朝晴夕かたくもり　曉に岡山を出て川邊と云所にいたり晝休いたす晝後は七十二町壹里五十町一里にゑ三里故五里に向といふ也より て例ゑ早足を出して歩行したるに花のことく雪いさゝふり出て風烈しさむさいふへからす早足にゑ漸暖氣を招きたり矢懸町にいたり止宿(四十七度のさ)　此邊暖氣に驚候　同所は民藏ゑ取次にゑ懇意なる柚へしの名物有よきみせ也調給たるに一段ゑ風味なるかことし○けふ吉備津宮領を過るに社家組頭堀家

近江之介鑓挾箱を爲持候ゑ路傍に平服せりこれ堀家權平か一類なるへし（マヽ）そこを過て板倉宿にいたるこゝより備中國也風俗俄に惡しくなりて飯もり躰ゑものなとみえ宿は至ゑゑ貧宿にゑ潰家多しこゝにいたり備前の領政宜をしらる元來大藩ゑ近所に小諸侯又は御代官所を置かるゝは彈丸黑子の地何ゑ用に立たさるか如くなれと用ゆることあれは神龍に一滴の水を與ふるかことく大に雲雨を起すことも有へきにこの風俗となりては何ゑ役にも立ましと歎息せり板くら宿にては民藏の身より等出たりとのさまの御書御覽可被下とて出したるをみれは古河（賀カ）侗庵の若書也民藏を召つれ候はゝよろしかるへきにといろ〳〵とおもひ出たり

○廿三日　晴（時々微雪四十五度寒）　七ツ時矢懸町出立いたし神部（カンナベ）にゑ晝休いたし七ツ時備後國尾のみちに止宿いたす今日は五十町幷七十町壹里ゑみち十二里也其内八里半歩行也尾のみちの入口たうけより藝州領也田畑開け山みち山畑のくろ迄立派なる石にて坂をは四間はかりの一本の棹石を以足たまりをつくり左右に石を敷たり其立派なること目を驚せり藝州領入口より山にかきの木夥し尾道は大坂の如くにて小なるもの也山海のもの何不足なくみゆ今日は阿部伊勢守殿より酒一樽鯛の干物一籠を賜たり今まて酒は本陣へ遣し來たれと伊勢守殿ゑ賜たる品に付左樣にはならす人足を雇ひ尾道迄持來りて今日限家來共へ遣し自分も給申候

○廿四日　くもり　尾道を六半時出立三原にて晝休奴田本郷に止宿也○尾道より三原へ行みち大なる入江にゑ十里はかり有といふ所々に島みえて畫のことし唯今迄二十余國を過て山水のけしき舞子の濱すまあかしにても格別にはおもはさりけるかけふのけしきは唯今迄あらさる事にて眼を驚せり松山多けれとも落葉一ツなし奇麗に掃除したる庭の如しこれは山上迄も眞土の所は畑にいたし岩山はまつ生立たれは薪不足にて落葉迄薪とする故なるへし梅梢院なと參候ゑさそ驚たるへし三原の城は堀入江にて魚をとらせす堀に鯛其外の海魚夥しと申也奴田本郷は本陣といふは

藝州にゐ立置茶屋也大なる入かは等有之大造なるもの也藝州の山水いまた宮嶋をみずといへ共既にわかみたるうちにては第一也田畑亦別段也これにて此節國いたく困窮とは不思義千萬也三原の城はやくら大造にゐ石垣の高サ十間はかりも有へし立派なること也人々みな驚たり○尾道の本陣小川作右衞門宅に三疊の上段に六疊の次ニ間帳臺附の坐敷有これ豐臣太閤殿下の朝鮮御征伐の時の御坐所也こゝに寐てもよけれと人々寐給る人なしと云たりめつらしき坐敷也今は全ニ寶物となし置樣子也奴田本郷に小早川隆景の古城跡有よほとの山にて山上に清水有よろしき地可惜左右の山高し今は大炮を打込まるへし

○廿五日　晴（至ゐ暖氣也五十五度也）　六半時に奴田本郷を出て溜り市といふ所にて晝休西條四日市に止宿○昨日夕かたよりけふの道はみな山家にて地やせ民貧也本陣といふものは領主ゐ建置たる也故にいつ方も同し建さまにてからかみかたまて同し貧村とはいへと關東の如くにはあらす溜り市の間の建場小原村といふにては山陽茶山等ニ書を多くもち居てみせたり

○廿六日　曉雨晝曇　七ッ半時に西條四日市を出て海田市にいたり晝休いたし廿日市に止宿○海田市より岩鼻にいたりこゝより廣嶋は十六丁に付鋏炮牽馬駕わき六人かち五人にいたし參る廣嶋は城下町に巾三四十間余ニ川六ッ有三ッ四ッの邊町よろし長七十二町有といふ也備前岡山よりは少しくおとりたるかとおもふ也されにきやか也所々のもちやにまんちうを多く出しあるにてもしるゝ也町奉行麻上下にゐ出る其支配向なるへし大勢出る横町はみな木戸をゝたり御成のことし目付役ニもの城下町を先キ乘いたす也定ゐ琴井の噂梅梢院等の有ことなるへし○草津といふ所より廿日市迄の間七十町余宮嶋をはしめにて七里廻りニ嶋七ッ五里廻りニ嶋五ッ其外小嶋いくらも有てみちは松山を行也けしき十二分にて尾道より又一段よろし人々驚かぬものとてはなし藝州は尾道幷城附ニ如くならむには百万石もあるへきに山村やせ村も有て六七十万石位かとおもはる

丶也○ころ柿を買ッたり一箱三匁ッ、也皆大きくして柔也味殊によろし新敷故なるへし

○廿七日　晴　廿日市を六時出立候ゟ玖波にゟ晝休關戸周防國也に止宿○廿日市と玖波の間五里の海岸也船にて行は四里也よりて船にいたす宮嶋の鳥居の前を通る故に先例も有之故參詣せりはたこや千軒有といふ也夫を以其大なることをしるへし清盛の造たる廻廊も八尺間にゟ百八軒有て其頃の鋏燈籠今に有繪ま等いつれも珍し日本三景ゟ一也といふ尤也はせ寺を海に築出したるかことときもの也寶物をみるにいろ〳〵有其内重盛等ゟ甲冑數々刀小サ刀數々有いつれも別段也來太郎國俊と銘有良刀有國俊と來太郎國行別人同人ゟ説有考へし中心等よろし螺鈿の小サ刀等絶妙也鹿はならの如し猿も多し廻廊に遊ひ居たり遲くなるを恐れて手廻して出立したり玖波に至り九ッ時關戸にいたり八半時也今しはらく刀劍をみてもよかるへきに殘念也

○廿八日　晴　拂曉に關戸を出て半みちの廻り故に吉川監物城下岩國は行羊腸のみち大河に添一方は高山也岩國の城は岩山を切開て造たる也追手前にある大河錦河也それにかけたるはし則錦帶橋也二十五間ッ、の橋五ッ有三ッは橋くひなしひち木つくりの如くにしてもち出したるもの也橋をかけわたしたる石かけ大造なるもの也ところ〳〵なまりにゟつなき有形◇かくの如し水勢をさけたるもの也石かけを急流に穿られぬ樣に根卷大石にていたし有元來左右ゟ山と大河とにてよきけしきなるに橋有城有景色別段也橋板に目板かはりに銅をはりたるもの也橋下に水ある所は五十間はかり故に橋の下へ廻りみたるに桁をくみたしかなものを遣ひたるさま手のかゝりたること夥しこの橋の入用はかりにゟも監物か知行莫太のことしるへし城下町殊ゟ外よろしそこより高もりといふ所にて晝休花岡に止宿○藝州路より村方不宜ところなとには本陣替に茶屋有御本陣といふ所を御茶屋番と云也○毛利の領内へ參ると晝休泊共に使者にて野菜と魚類とを二臺ッゝくるゝ也これ長崎奉行へゟ例を以取計事也兼ゟ伺

置たれは受納いたす其度々人足を買上て次〻泊り休へもち行本陣へくれ遣すこと也江戸表ならは親類へ遣候ものも毛利領分三十二里〻内みなかくの如きよし也此節の日々〻手續左〻通○目藥齒藥例〻通也夫より手水を遣ふ又太郎出て母上より被下候御符御洗米を謹て推いたゝきて差出且水初穗を以爲給候此又太郎取計少も朝々かはらす候夫〻朝めし四はい也かこの内にゐは近思錄をよみ宿に附ては通鑑をよむ也晝めし夜食共先ッ五はい菓子は五切位也大さい二其外例〻通也歩行尙六七里以上也雨ふれはかこ也日記は御城代と伊勢守殿ゐ上候御用向〻日記共に四通り也

○廿九日　晴　曉花岡を出立福川にてひる休いたし宮市に止宿○宮市の前に浮野峠といふ所有こゝより九州の山よくみゆいつれそといひたるに豐後也と申也○今日にて三十泊也江戸より大坂へ行二度かけ余也しかるに此上十三泊せねは長崎ゐは行かれす旅に一同當惑せり夫に付ゐも母上の千辛万苦奉感候市三郎幸三郎其外左衞門尉等愼て拜察容易におもふへからすこの邊蘆の葉尙青くもみちも有大根を木の枝にかけて干也霜にもいたまぬとみゆあたゝかなるに驚たり八ッ半時過六十度也

○十二月朔日　晴　曉宮市を出て佐野峠にかゝる峯上に兩便所幷こしかけ有かき根を常盤木にてつくりことの外見事也中國之大家にてはいつ方にゐも同樣也日々にみれことに一二ケ所つゝあらぬところとてはなし此みねよりは大海入海山川所々のみね〳〵等みえて實に絶景也かゝるけしき初ゐ也供〻中間迄大に驚て賞歎せり夫〻臺道村にいたるこゝの本陣豪家にて庭に薩州手植松有と聞て來山陽〻文にゐ覺あれは承たるに詩哥文等殊更夥みせたり紅毛人の作たる詩とか哥とかいふへきものさへに有珍敷こと也小郡にて晝休毛利家の茶屋本陣也船木にいたり止宿これ又茶屋本陣也この茶屋本陣といふものは領主普請とみえて大造なるもの也○けふは松平大膳大夫〻晝休ゐは鯉二野菜物泊ゐは鯛二野菜物贈物有長州領へ參候ゐは日々二度つゝ也先格也松平肥前守〻明日より長崎迄附ケ廻り〻家來差出候

旨（附廻りとは朝夕共附添道中ゑ用聞也）を以粕漬ゑ鱸海月あらき酒一臺贈物有之候其上へ道中師直吉より鴨二をくれたり此節日々野菜物と肴を人足を買上て持歩行こと也家來共こゞとを申也されば共みな　公儀御威光難有事也左衛門尉なとかゝる身分にゐ西國旅行實に難有事也

○二日　晴　曉に船木を出て吉田と云所にてひる休いたすこゝも領主の茶屋にて大造なる構也さなから寺のことし其一里前に石炭といふ所有石炭出るかと尋しに少々は出ると云下關にて聞は石炭は筑前より夥出長門の北うらなといふ所よりも出るといふ至ゐ下直のもの也下關市中を通るにかやりの臭氣甚しきかことときは石炭の臭也長府といふ所にゐ小休いたすこゝは毛利左京亮城下にゐ市中へ家老町奉行其外役々出るこゝにては小休所にゐ椀もり菓子吸物酒三品（並ゑ銚子あはもり養老酒）出るこれ又先格也家老其外役々に逢候家老玄關白洲迄送り候夫ゐ下關へ參り止宿即赤間ヶ關の事也人別三万前後なるへし家數七千余有といふ也時計師刀やなと有大坂の如し

本陣殊ゑ外立派也市中に家老其外詰居候ゐ領主より料理也家老は左衛門尉ゐ番頭は組頭へ挨拶として參る其外小倉より小笠原大膳大夫ゑ迎船來り右ゑ使者等來る本陣取込大かたならすしかし　公義ゑ御威光驚入たること也けふは檀のうらをみる大海かとおもひたるに長州と豐前のせと也こゝよりは九州至ゐ近くみる豐前の村々なるへし窓の入口なとよくわかるそれによりておもへは海の巾十四五町廿町内なるへし

○三日　快晴にゐ海上殊更に穩也　五ツ時と申ことにゐ五半時頃に下關にて鍋嶋の迎ふねに乘るはしけ船なれと立派也十町はかり沖にわか船しるしのはたふき流等立たる船ありて夫ゐ乘移るこの船は二階附にてけしからぬ立派なるもの也大船頭といふもの其外乘居候船手はみな惣髪にて角力取の如し乘船候と太鼓をたゝき候ゐ船歌を哥ふ也西國は船手みな上手也三里のわたしをはつか十町はかりにいたし候と又もとのはしけゐ乘其以前より紫幕の船にゐ案内として小笠原大膳大夫家來罷出居候ゐ先乘

いたす小くらに上陸いたし候と大膳大夫家老はしめにて家來共夥出る兩岸幷橋の上見ン物夥しき事也肥前の迎船をみるに四方に五色緞子の幕をたれて遠くより望けしきことによろし龜甲に三ツ星の船印其外共にいと〳〵きら〳〵し紋所ちと上り過たるかことし可恐可慎着に上にゐ小笠原に家老或は諸役人肥前筑前に用達長崎用達其外御代官に使ひ等夥來れり遠國奉行となりて海船には佐渡のわたり二度桑名のわたし三度或は大坂の川船等まて乘たれとけふを以第一とすへし○下の關へ行と朝日西國の山より出る也

西の國の山よりいつる朝日かけなれて赤間の人はみるらむ

○十二月四日　くもり　曉七ツ半時小くら出立いたし候ゐ木屋に瀬に晝休いたし飯塚に止宿○小倉を去ルこと一里半大藏村といふ所より筑前の國也こゝに黑田美濃守家來三人出迎居壹人は領境にため壹人は附ケ廻り也一人は美濃守義今日晝休に相成候木屋に瀬に兼ゐ罷出居候間　公義御機嫌も奉伺度且對話いたし度とに事也承知に旨申遣ス石坂といふ所へ行たるに再使者にゐ美濃守參り居候得共別段御急には不及候旨申來る木屋に瀬には當月朔日より參候ゐ待居候とに事尤遊獵を兼たるとにはなし也美濃守は同人罷出居候茶屋に參り松平肥前守は旅宿へ彼方ゐ參候由は承り其手續も承り候得共御勘定奉行長崎御用として參候は近頃は初ゐに事故例も無之候に付長崎奉行に准例を用ひ可申大國へ對し不敬無之樣いたし度旨申遣候處彼方にゐ委細に申參右に付麻上下に着替家來はもゝ引用人計野袴にゐ召連候門内に黑田家に用人其外出迎いたし居候間門内に陸尺に足を片足いれ不申樣にいたし下乘候ゐ　御朱印は用人に首に爲懸候ゐ召連相應挨拶候ゐ玄關にゐ刀持へ刀をわたし次に間へ入候處家來麻上下にゐ夥平服いたし居候處其所に美濃守出迎に付及挨拶候ゐ同人案内にゐ座敷に通り床に間を後ろに着坐候處　上樣益御機嫌克と申候間御機嫌宜候旨申之畢ゐ美濃守居直候間同人に對坐に所へ刀かけ差出左衞門尉に刀かけ

左衛門尉至ゐ靜にゐ取廻し美事也可惜おさと爲見不申候に

有之候に付右之所に着坐候ゐ少々進みなからいさゝ下り候ゐ彌御勇健と文通は御健達と認候申候處彼方にゐも御安泰と被申候夫々椀盛菓子吸物酒肴貳種薄茶幷菓子出る大家國持と初ゐ對話之事故菓子も給酒も十分に三獻給申候畢ゐ直退去いたし候積之處美濃守領分に金銅山出來右之試掘として美濃守出張之由にゐ金くさり等差出佐州をも相勤候由を以色々相尋候に付相應及挨拶候西洋に青キ色にゐ金より今一段貴キかね有之候處右も出候由なと咄也元來金山には山師多し領主かく乘込候ゐは無覺束事也歸らむとするに美濃守いろ〳〵と異國の事なと人拂にゐ申漸之事にゐ暇乞いたし候處鷹を召連捉飼候由にゐ御鷹之鴈之如くにいたし近習二人にゐ鴈三ツかも二ツ持出たり夫々美濃守直演達にゐくれたり次之間まて送られ候夫より旅宿へ歸り立つけに着替候ゐ如飛に急候ゐ旅宿へ着候處高橋古助殿被參居候間いろ〳〵と物語候處御同人烏犀圓にて宜候由にゐ足其外共よほと健にゐ以前々は若やきたり酒を出し飯振舞美濃守より貰候鴈を料理候ゐ振舞

候處酒も飯も十分に被給候わか今般之御用其外御役之事を日田之もの共殊之外喜ひたりとて大原八幡之神主御祈禱之札等を差出候由にゐ土地之もの之喜ひ大かたならぬ事之由不思義なるもの也いろ〳〵と夜九ツ時頃まて物語いたし候○けふみるに小倉領は二十町余もある宜城下町也筑前領よろし乍去貧家多し山家と木屋之瀨之間村々より石炭夥出る山之如く堀出したる所等有赤土之如き山より出る也

○五日　晴　拂曉に飯塚出立候ゐ山家と申所にゐ晝休田代に止宿此田代より前一里ほとの所筑前と肥前の境也田代は宗對馬守領分にゐ中老長棒牽馬にゐ領分境に出る中老故下乘に不及候○今朝見立として古助殿御出也目出度歸府かけ可懸御目旨申候ゐ御わかれ申候○山家といふ所に太宰府之もの共罷出居候ゐ御札其外差出先格に寄目錄遣し候○此ほとは二尺七寸之刀にゐ日々步行故冷水峠にゐ

長かたなかこにものらすとしよりのひや水峠ふみ越て候

家來一同大に笑ひ申候

致ㇾ使大藩訪戟牙。送迎相集馬還車。晝船風穩忽看得。陸續鎭西粉壁家。

赤間關上年將暮。暖足輕衾伸足眠。扁舟叫賣曉纔止。吐旭鎭西螺髻嶺。

これは下の關にて也

○六日　晴　七時出立神崎と申候所にゟ晝休八半時肥前之城下佐賀に着

○晝休後はやのことものに行逢心にかゝりたるに佐賀手前に參候處長崎より急狀來候ゟ三日之内に役々來り不申候はゝ魯戎うら賀に參可申と之事也馬鹿なる使節其手に可驚かはと存候得共長崎ゟかく申參候上は今曉七ツ時魯戎渡來と之事計は申來急速出立之積佐賀ゟ長崎へ船にゟ參候間道（カン）并山みち有之船之方を申談候處一番手其外船にゟ罷出かこ無之由に付明後日までに陸本道長崎へ參候積明曉九ツ時出立之積申觸候○松平肥前守入來玄關次之間へ出迎左衞門尉上坐にゟ御機嫌伺之式有之其後閑談いたす元來懇意之事十年來面會いたし不申候事故肥前守話に可申こと胸より湧出てはなしな

らすと之事也六時過まて對話歸には必長坐と之事にゟ相別候今日佐賀を見たるけしきにて沃野千里之地人別五十万と申候は如何と申たるに大に笑て四十五万有五万は拙者代に成追々ましたりと申されたり肥前守御機嫌伺之序左衞門尉安否をも尋候に付右之挨拶として肥前守旅宿に直參之先格也然ル處急之御用に付例も有之右は斷と之事に付是非參候由申候處左衞門尉は玄關迄に候得共其相濟不申候内は歸城不致相待居親族并家老は門内白洲に出迎いたす事之由に付御歸城御遲く被爲成候ゟは恐入候間仰に隨ひ罷出申間敷其かはり直に御歸城被下度と申候處急度其通と申候事に付其積にゟ供揃に相成罷歸候間玄關式臺迄送り申候乍去余り氣之毒に付直に名代之使者を旅宿へ遣し候處いまた旅宿に罷在候と之事に付大に驚候ゟ追ゟ機嫌聞として參候肥前守親族并家老に面談之上右之別段優待之厚意禮申述候今日は八寸重に五重之重詰并鮮鯛酒等先格を以贈有之其上家來末々迄料理出るいかむともすへき樣なく本陣其外雇之もの共迄

遣し候江戸ならは中間ゑ難義なるへし

○七日　晴夕雨　夜九ッ時過佐賀出立いたし候ゐ兼ゐゑ晝休并泊りゑ場所にゐ木錢米代拂少々宛食事いたし候ゐ二日分歩行候ゐ大村領彼杵（ソノキ）ゐ着十三里余ゑ歩行也○塚崎といふ所は肥前守茶屋にゐ温泉有よき遊山所也華清宮のいにしへおもひ出らる此邊梅花咲たり

○八日　曉大風微雨朝より快晴夕くもり夜雨又あられふる○四半時起し（マヽ）にゐ九ッ時過彼杵出立いたし大村并矢上といふ所にて食事いたし六時過長崎ゑ内中嶋と申所御鉄炮方高木貞四郎明屋敷ゐ着いたす（これは同人は今度自分罷越候に付明拂ひたる也）町年寄日見峠にゐ出迎たるかはしめにゐ市中ゑもの共役つとむるもの共ゑ分は不殘追々出る皆町人にゐ凡ゑ躰佐州に似たり今夕より手賄に成御普請役兼ゐ左衞門尉ゑ儉約なるを知れは申付て着ゑ祝ひとて燒物并吸物一ッにゐしるしはかりの酒出候計全ゑ一汁一菜と成○夜分支配向并紅毛通詞森山榮之助其外來り候ゐ夜九ッ時過まてかゝる○着ゑ節町年寄ゑ内三人は玄關式臺御普請役同斷支配勘定櫻井重左衞門外貳人は玄關へ出迎いたす○高木貞四郎は十人扶持ゑ御鉄炮方なるに屋敷三千石以上ゑ御役宅ゑ如し御勘定方詰所并箕作玄甫（マヽ）主從左衞門尉惣供方まて住居してまだ廣過候宅はあまり立派にはあらねと見苦といふにはあらす床かまちタカヤサン也長崎の六ケ敷所なること可知○昨日途中をみるに菜の花つはきの花咲申候此節ゑさむさ例也と申也唐蜜柑の木所々にみゆ

羽書頻報虜船來。笑臥旅床鼾（イヒキ）若雷。無奈（マヽ）官途輿論囂。星奔侵曉向瓊崖。

海雲如滑虜。欲雨自由飛。何勝天風力。忽看旭（ル）日輝。

○九日　雨　今日より宅へ御勘定方相越より合いたす○今曉はからすに驚されて起申候○六半時江戸より御用狀到來いたす魯戎よりゑ再書翰和解も參る兼ゐ考置候通に相成候は扨々國家ゑ御ためにゐ心配ゑ極なり身は差上置度（マヽ）たれは心配なし

○十日　晴　大にさむし筒井肥前守方ゐ參る長崎人物をみるにかみかた

ち江戸の如し○往來に三尺はゝ二通りに切石を敷有之候尤よろし

○十一日　晴　より合として筒井ゟ參る○魯戎と對話之節彼方にゟ立居候間曲ろくに乘日本は着坐いかゝに付白石か琉球人と對話之時椅子兀子之類を用ひたりしこと有と覺たる故に蕃客對話之式古賀に問たるに一向にしらす延喜式によりてみれは隼人式蕃客對話之ことみえ玄蕃式にもみえ椅子胡床へ日本の人儀式の時よりたりし證分明也唐學者之詩文の人は今日のことには一向こまるもの也武士之學文は實用に有たき事也○筒井肥前守方ゟ參る此節は長崎奉行より上役之廉にゟ日々六人かち士六人二本道具にて出るにさし押其外日雇頭等之もの共まて附添候ゟ立派五六万石以上之如し○此節は大棒居合をはしめ其外例之通朝はしほを斷晝夜共惣菜之外は少もなし勿論酒もなしかくなくては取締出來不申候○通詞骨折候もの有之目錄に大小鍔遣し候これも御奉公の一ッ也いかにも節儉にして御奉公に金子を出すことは少も厭ひ不申候

○十二月十二日　くもり　自分旅宿にて寄合筒井肥前守其外一同來る○魯西亞人共役々之人々船へ參り吳候樣申來○御國躰に拘候義に付難參旨申遣す尤追ゟは見物として可參旨をも申遣す再々應之通辨にゟ船ゟ之懸合彼是にゟ支配向之引取候は曉に成（以上は十一日之事也）今四ッ半時過昨夜遣し候御普請役御小人目付來候ゟ使節彌明後十四日長崎奉行御役所ゟ可參旨申聞候承知之旨申遣す十五日には肥前守初一同異國船ゟ參吳候樣申之兼ゟ之覺悟に付十七日可參旨申遣すこの應對前後之懸引中々筆之可及にあらす紅毛大通詞西吉兵衞森山榮之助と申候もの取扱榮之助別段なる差働有之候ものにゟ通辨殊之外達者にゟ蘭書を譯すること手帋をかくかことし

○十三日　雨　長崎西御役所月番水野筑後守方ゟ參るこの御役所は紅毛夷出嶋之旅館に附たる所にゟ目下におらむた旅宿を見わたし候高サ十間はかりも可有之候旗竿立有之候これへ佳節其外之時旗をあけ候事也其外は瓦屋根みえ候計外に相變候事なしこの御役所ゟ長崎之湊よくみゆる魯

西亞船は一里はかり沖にかゝり居候遠目かね持たるもの一兩人ッゝ始終ほはしらの上に相見候○今日町年寄共ゟ宅前を通るに大名ゟ如し大に驚

○十四日　快晴　五時より西御役所ゟ參るのしめ麻也參候ゟ一同相揃候

ゟ肥前守左衞門尉は裏附ゟかり衣にゟ白かね作ゟ太刀爲持之長崎奉行大澤豐後守水野筑後守は大紋にゟ糸卷の太刀爲持之儒者古賀謹カ金一郎は布衣御勘定組頭中村爲彌御勘定評定所留役菊地大助布衣着用（いつれも足袋をはき小サ刀帶之）御徒目付は素袍着用支配勘定是又同し尤長崎立合として參候ものは麻上下自分召連參候日下部勘之丞はかり素袍也四ッ半時魯戎使節小船ゟのり候ゟ來る祝砲と号し大炮五發いたす船に殘候もの共はほはしらの繩ゟ上り候ゟ夥し日本取締ゟ船太皷魯戎ゟ太皷頻に聞ゆ段々近く相成候ゟ上陸いたし候と魯戎はチヤラメラ太皷にて高嶋流ゟ調練ゟ凡躰にゟ上り來る劍附銃炮ゟもの帶劍にて將士ゟもの廿七人いつれも天鵞絨筒袖着用也使節は羅紗ゟ衣類に紅ゟ五寸巾なるものゟ帛にて紋あるたすきのことき帽子にゟ金にてかをかけたり（これ貴人ゟ服）頭にはかたち小桶の末細なるかことき帽子に金にてかさりあり上へ白き毛を附たるを着したるを門を入るときとりて手に持始終手に持居候（帶劍也）永井能登守に似たる男也茶いろのかみのけ三寸はかりはえたりひけ又同し（三十一歳也と云六十歳位にみゆ）金ゟ房を左右ゟ肩に附たり（ふさ長し半えりの所ゟ金にゟ碁石のこときものを附たり）船將（酒井右近に似たる男にて髮黑キ方銀ゟふさを附其余同し）船將次官（金のふさを附短し通ゟふさいかなる故にや船將ゟ次席なれと通弁ゟ故を以使節ゟ次に立つ也）將士（羅紗又は天鵞絨の衣類也）右ゟ面々都合三十一人座敷ゟ參る夫と一時に筒井肥前守其外一同罷出候ゟ通詞を以夫々及挨拶候ゟ暫爲引候（此節はいつれも立居候）夫ゟ座敷殊更に高き高麗へりの二畳臺を敷（此節延喜式幷折たく柴の趣等參考候ゟ椅子兀子等ゟ類を用候積ゟ處さて〳〵不都合にゟ困候間先例により如此）魯人は椅子（三十二も椅子の前へは卓の如き臺をつくりて並へたり）右ゟ座ゟ使節船將次官ゟ通詞船將幷頭分ゟ將士以上四人椅子により此方は筒井自分計にて筒井自分より時分時也飯をあかり候へと申候時中村爲彌菊地大助は二畳臺なしにゟ立居候間自分より爲彌へ差圖いたし候上三汁七菜にて酒をも爲給候（給士は魯人は長崎ゟ地役人筒井自分は銘々ゟ家來